〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

慶應元年 自五月 至七月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」(紙数八六枚)」の記載あり〕

目録

舊邦秘録大原重徳卿ヨリ久光公ヘ書翰
土持平八報告防長ノ形勢探訪
小倉出張土岐新兵衛報告長防探訪
道島家記抄陸小姓上京
〔西郷隆盛ヨリ黒田清綱ヘ書翰〕
舊邦秘録土岐新兵衛小倉ヨリ報告
島津主殿關山糺宗門掛
舊邦秘録
土岐新兵衛小倉ニ於テ探訪報告
江戸通信錢相場
黒田氏書類
幡島三郎ヨリ黒田清綱ヘ書翰
蓑田傳兵衛ヨリ黒田嘉右衛門ヘ書太宰府ヘ云々
舊邦秘録
長州討入来ル五日ト決定云云達書
園田彦左衛門土持平八小倉ニ於テ探問報告
当時ノ米価鹿児島
道島家記
舊邦秘録
本藩士某勝安房守対話ノ要点
長防ノ動静探訪報告
文久二壬戌ヨリ本年ニ至ル出来事
道島家記抄藩内雑事
藩内事情
内山伊右衛門書状略写
舊邦秘録〔會薩離間策ニ就テ洛中市街ヘ内示書〕
道島家記抄

中路権右衛門報告大坂ノ風説
大御目附御廻文写
藩内物価道嶋家記抄
舊邦秘録
小倉滞在園田彦左衛門届書
出兵御賞詞
大奥取締令藩令近衛家付ケ女中へ
毛利淡路吉川監物上坂ノ上旅宿云々達書

六三六　舊邦秘録大原重徳卿ヨリ久光公ヘ書翰

愚忠

〔付箋〕〔若又進発々々ト鳴シ置、臨期所労ト欺ニテ進発上洛セサル時ハ、幕府ノ関東之令ニ長州征伐ト云々、征伐之不可ハ言ニ不及コト也、但シ内存ノ趣風説アリ、風説ノ真偽ハ不分明ナ奸吏正サレ候、コトニ大藩滞京ナレハ御都合ニナリ候也〕

レトモ、幕府従来之所置ヲ以テ量察スルニ、近比別シテ大凡　朝命ニ応シタルコトナシ、此レヲ以テ考フレハ、道路ノ風説モ隅言ニ非ル欺、但シ隅言ニモセヨ、朝廷ニテ其御心得方在セラレズテハ叶ハヌコト也、然ルニ恐レ多キコトハ云迄モナケレドモ、恥モ云ハネバ理カ聞ヘヌ類ニテ、包ンデ居テハ、却テ御為ナラズ、止ヲ得ズ申述ル也、　朝廷徳川氏ニ天下ノ政事ヲ御委任、此方何事ヲモ凡申シノ侭ニ　勅許ニナル遊シ来リニテ、御否ミ遊シタル事凡ナシ、幕府モ申シ乞フ事ハ、其侭　勅許ノ事ト思ヒ込テ居ル仕来リ也、夫故ニ外夷〔正睦〕ノ事モ申乞ヘバ、何レ　御免ニ成事ト心得、堀田備中老中守上　京シテ相伺タル処、　皇国ノ御大事タル故ニ如何ニシテモ　勅許遊バサレズ、夫ヨリシテ段々行違トナリ（此間ニ種々有レトモ事長ケレハ略ス）、既ニ別紙ノ様ニ風説ス、道路ノ流言採ルベキニ非ザレトモ、従来ヲ以テ考フレバ、虚言トモ思ハレズ、ヨシヤ虚言ニモセヨ捨置ルベキニ非ザレトモ、彼御仕来リノ上ニ事ニハ馴レ玉ハズ、ヤヽモスレバ幕ノ勢焔ニ御恐レニテ、柔弱ノ御評議ニ落入ル事ニテ、タマ〳〵確乎タル御議論有トモ、暴説抔ト御採用ニ成兼、有志ノ徒切歯扼腕スルコト也、然ルニ此度ノ模様ハ、先日二月廿一日関白殿ノ御糺問ニ、老中衆当席ニテハ至当ノ仰故ニ、一言ノ答ヘ申上様モナク、恐入テ退シナレトモ（既ニ休所ニテ関白殿ハ、荒々敷テイカヌト云シト也）、内心如何有リシニヤ（幕府恩顧ノ者カ国事掛リノ御方ノ門ニ張紙シタルニ、豊州カ又イカナル大奸ヲ企候哉モ難計、過慮ノ余リニ認シニト云々、此度ノ風説思ヒ合ハサル、也）其砌リ早々帰府ニテ、此趣大樹ニ申入ヨト命ゼラレタルニ、其御請返答モ一言モナクシテ進発、　御満足ニ思召ストノコトニ御請ヲ申上タルハ、如何ノコトナラ

ズヤ、左スレバ何様ノ工ミ有モ知ヘカラザルコト故ニ、弥以　朝廷ニテ、此度ノ御心積リハ、格別ニ御評議ヲ尽サレネバナラヌ御コト也、然レハ愚蒙ノ小臣ト雖トモ、急度千万思慮ヲ尽シ、献言モ致スベキナレトモ、此度ノ事件深ク思慮ヲ回ラセハ、中々容易ナラザル模様ニテ、浅慮ノ及ブ処ニコレ無ク、然レトモ黙止ニ堪ズ、倩思フニ、　朝廷ニ御後楯サヘ有レバ何ゾ恐レ玉ハンヤ、此後楯ト云ハ、則外藩衆ノ上京ニテ、大樹公上洛ノ砌、尊奉勤　王ノ道ヲ主張セラレ候ハヾ、幕府何ゾ手ヲ出スコトヲ得ンヤ、然レバ偏ニ大禄ノ外藩衆上京ヲ希フ所也（一藩ニテモ、多キガヨシ）然レバ大禄外藩衆ヲ　召寄ラレ候（付箋）「此度ケ様之御　朝議ト云ニ非ス、御平常ヲ以奉量察処ケ様ナル御模様」テ然ルベキ処ナレトモ、朝命ニテ召トナリテハ、何ト故ニケ様ニ書取リシ也、此度御　朝議ケ様ト思フベカラズ」ノフ幕府ヲ向フ座ニ遊バサレ、相手取テ事ヲ始メ玉フ振合ニ相当リ（是前条御仕来リ、御遠慮ノ訳也）、幕府モ是ハト存ル意味モ生ズル筋合ナレバ、召寄ラル、コトノ成ガタキ次第也、願クバ藩主々々自分ト心付上京坂ナサレ（大樹気嫌尋ト云ヲ題ニシテ、并天気何ト云気味、但シ断然ト天気何歟存意次第）、乍去自分心付出ルト云フコトガ、彼因循家又ハ、時宜ヲ考フル藩ハ、迚モ出間敷考ヘラル、也、ソコヲ断然ト出ルハ薩藩ヨリ外ニナシ、ヨシ出タ処ガ至極宜敷ト云場合ニ至ルトモ存シ兼ラル、也、右故ニ偏ニ薩藩ノ出ラル、ヲ頼ムコト也、薩藩断然ト出ラレタレバ、因備ノ類押切テ出ラルベシト思ハル、扨上ノ屋敷ニ居ラレテ、尊奉勤（但シ屋敷ニ只ジツトシテ居ラレテモヨシ）　王ノ道ヲ彼是周旋ナサレ候ハヾ、幕府手ヲ出スコト有間シ、是何ヨリ十分ノ御後楯ニテ、幕府ノ失政モ改マルヘク覚ユ、泰平ノ基本ト存ル也、然ルニ断然ト上京ニ付テ案シルコト有リ、彼諸藩ガ目ヲ付、會抔モ疑テ居ル故ニ、サレバコソ薩ガ出タ、是ハ一趣向有ツテノ事ト云フベシ、是甚困リタルコトナリ、サレトモ此度ノ事件ハ、風説モ実ニ道路ノ風説愚案モ実ニ愚案ニテ、サシタルコトモナケレバ真ニ無益ノ心配、若実事ナル時ニ其御用心ナキ時ハ、実ニ大御狼狽、其時ニ臨ミ誰ヨ彼ヨト　仰出サレテモ、時ノ間ニ逢ヌノミナラズ、其内ニ強請ニ怖縮遊バシ、和親交易モ　勅許、兵庫開港モ　御聞済ト云コトニナリタランニハ、実ニ　皇国ノ恥辱、一度　勅許之旨夷人ヘ申聞候ハヾ、遂ニ挽回スベカラズ、臍ヲ噬トモ及バジ、所謂瓦ト成テ全キハ、実ニ無念ノ至極ナラズヤ、是ヲ思ヘバ、人口ハ兎モ角モ、至誠懇情ヲ以テ、只一心ニ　皇国ノ御為ヲ尽サレンコトヲ希フコト也、小生等如何ニ思ヒテモ無力ノ者何トセン、只々歎息仰天ノ

（付箋）「若後悔改心ノ模様ナレハ、夫コソ重畳十分ニ尊奉ヲ行ナハシムヘキ機会ナラスヤ」

ミ、一橋ノ極意ノ処、如何トノ事モ至極当リ前ノ事ナリ、然レトモ一通リ誠忠勤　王ノ積リニテ不都合ハアルマジキコト也、若此人不所存ナレバ、諸共ニ誠忠勤王ニスルト云程ノ心ニナツテミレバ、一橋ガ不所存デモ、　皇国ノ大事ニハ替ラレヌコト故、カマハズ断然ト行フガヨイ、ソコ迄断然ト決心シテ、勤　王ヲスルニ何ノサハルコトカ有ランヤ、

朝廷御微弱ト雖トモ、カク迄精忠ヲ尽スニ、夫デモ一橋ノ申分ニ御随ヒニテ、薩ヲ捨玉フ道理ハナキコト也、夫迄勤　王忠節ヲ尽サルヽトモ、小藩ニテハ万事行届カヌ故ニ、兎角薩州デナケレバナラヌト存ル也、何卒此辺ヲ差斟ミ、厚ク御勘弁有テ、大樹公上坂迄ニ上坂ニ成リ、連イテ上京祈ル処、是小生ノ　皇国ヲ思フ微忠也、

（是ガ御後橋也）

此条ハ総小子ノ心ニテ　朝議ニテ無之、思侭ヲ認シ故、不都合ノ文言御免可被下候、

重徳（島津忠承氏所蔵本にて校訂）

右大原三位様御所存、中将久光公ヘ被遣候趣御書左之通、

二白、時気御用心専要所祈ニ候、万々後便ヲ期候也、

風説書一冊ハ御家来ヘ渡シ置候、御覧可被下候、

其後ハ打絶御無音無申条事ニ候、追日暑気愈御清康珍重ニ候、陳ハ当節時節大ニ切迫イタシ、心痛ノミノ事ニ候、就テハ関東ノ模様、風説書風ト手入、甚敷事共大ニ仰天イタシ、虚実ノ程吟味イタシ候ヘ共、更ニ相分リ不申、実心配如何可然、当惑ノ処候、幸輔来リ段々咄イタシ虚実不相分候得共、先書取ヲ為見候処、何卒真偽吟味治定、御国元ヘ可達トノ事ニ付、追々吟味候得共、不相分、其内愚案ニ迚モ分明ナルコトハ分ル間敷候得共、風説ハ風説ニシテ、全体ノ処一帳ニ認候通リノ事故、虚トモ定カタク、実トモ定カタク候得共、自然真実ノ時ニハト存候ヘハ、何共御六ケ敷ト御案シ申上候付、貴兄御上京ナラテハト存候付、一帳ニ認候次第ニ候、何卒御勘弁所希ニ候、巨細御使ノ仁可申述、先小子ノ存意荒々申入候、毎々要用而已如此、不典、

五月八日

燈下認乱書

御免御推覧

島津中将殿

右大原三位様ヨリ

中将久光公へ御直書写

慶應元年乙丑五月十日記之、

六三七　土持平八報告（防長ノ形勢探訪）

長防之動静先達て申上置通ニて、其後相変事新敷承得候儀無御座候得共、当二月初比より熊本藩寺尾太門・田上仲介両人、為聞合藝州廣島より岩國、又は徳山領迄も致奔走、同三月同人共帰掛、於小倉致面談、段々承得候儀有之、且此節交代被仰付、乗船より帰帆ニ付、諸国致汐繋候浦々江流入候雑説等、探索仕候旁之次第、左条ニ申上候、

一寺尾太門等江承合申候処、奇兵隊共事、去冬時分より三田尻辺諸浦々、山口又は亡益田右衛門介（親施）領須佐江相掛致分居、其砌五卿方、筑紫江御移座相成候際限ニ依て、長府領分隊之一徒は、五卿方五藩江御引渡之処、随分致承服候得共、須佐滞留之同隊、服心不致、剰商家江踏入致乱取候挙動有之、萩之番頭粟屋帯刀一手之人数召列、兵器迄も携、為鎮撫須佐江出張致説得候処、帯刀兵力を以人気折之意味ニ曳受、激論約兼其場一旦曳取候、同夜暴徒より不意ニ夜撃を懸られ、帯刀少人数故利を失ひ、斯て財間新之丞等遂戦死、無為方鉾を曲て退去せし折柄、帯刀一味之輩援兵として追々駈加勢ひを得、漸々取押候得共、其後両三度及戦争、夫より益々致沸騰候付、逆徒為退治、既ニ萩より撃手被差向御軍議ニ候処、末家清末より再往鎮静之使者勤、強て大膳様江願出、御免許之上山口江参陳説得いたし候、併其時諸隊江清末之応接振等相分不申候得共、大膳様江白封を以致上書、山口より直様自領江曳返し、其後萩江登城不致、依之吉川藩中評論之趣ニは、清末之領内山口辺暴徒分居之間ニ挾れ、脱体微力之小家、兼て彼等ニ致恐怖候処より、前段説得之使節却て内心ニは、凶徒ニ情を通し候半哉之嫌疑も有之、然ニ清末曳取後諸隊暴動増長ニ及ひ、吉川監物（経幹、岩国藩主）不得止御征伐之趣屢致建議、御両君御許容相成、当正月末二月朔日ニ相懸、長門様ニも明倫館迄御出馬相成、監物ニは、凡四百人余之手勢曳列、国境柳井迄、致出陣候場合之処、本藩柏村主計・山田宇右衛門（顕毅）・野見右衛門等、同二日山口江出張、諸隊江談判之趣意は、別紙戦書ニ載処之、椋梨藤太其外要路之奸臣等、最早君側退られ、有志之士追々御撰挙、且昨夏　京師変動後之御国辱被為雪度思

召ニて、
皇国之御為御尽力之処は、聊已前ニ不被為変御趣意ニ候間、軽々敷邦内ニ干戈不動様、臣子之名分をも致覆勘、速ニ令解兵、左候て天下之通路江屯集、往来之諸人等江妨不相成、辺野ニ致潜居可然段、程能致理解候処、暴徒より相答候ニは、戦争更ニ好所ニあらすと雖共、御追罰之時機ニ臨ミ難忍、雌雄決度必死存詰罷居候得共、訳筋ニ依ては何そ承服不致心底ニも無之、去は此内大膳様御父子方より追々御沙汰之趣、
皇国之御為致勤労候は、往々知行被成下との御命令ニ応し、去夏　上京已来、是迄艱難辛苦致したる其御取持可有之哉、且又当時出頭不義奸佞之臣悉退られ、勿論尊　王攘夷之道被為尽可然、其路ニおひてハ、随分領承可致旨申答、其場主計等三人之説得ニ、半服納得為致形ニて引取、右形行主計より御両君江具ニ申上、吉川ニも同断、夫より長門様ニも御帰城被成、監物儀も致退陣、其後病気と唱萩江登城不致、然処岩國領江浮浪輩等拒て不入付候処、監物家来本家之領土不為蹈様、互ニ取締厳敷有之、若哉暴徒侵入致し候ば、一戦可及決定ニて、只今籠城同様之致手配、国境山岳江相図之為松火矢等仕懸、或は陸地江炮台ヲ築、諸所江関番所取拵、将又驚破之時、藝州侯よりも御援兵之御約定罷成候由、
一前条柏村主計等より、諸隊江鎮静之説話入候節、知行被宛行度、諸隊より願意之趣、且主計より之返答は、勿論御所持振相分不申、跡以段々承合候処、知行御扶持米被成下、夫より平穏罷成候哉ニも風説有之、然ニ大膳様御親子御間御隔心ニて、諸隊より長門様致扈従、再ひ山口之城守返し、籠城被成候哉ニも申触、又一説ニは、御父子方倶ニ陥入奉り、暴徒御同意ニ候得共、脇々響合之為、右御鎮静有之との作説起候半抔雑説区々いたし、謀実何れ之筋取留難申上様御座候、乍然吉川領江侵入可致世評は、諸国湊々江流入、右熊本藩廣島辺ニて伝承之趣相変不申、左候て当分諸隊頭取高杉晋作・赤根武人等ニて、此已前益田・國司等如き歴々、大身之者不罷居候故、我不劣隊長之権柄掌握し暴威ニ募、無故同隊暗殺いたし候事共多々有之、将又防長諸浦々江、是迄本藩其筋役々より、触渡相成候法則も不被行、何事ニ不寄諸隊より取捌いたし、商民承服不致者は直様殺害ニ及ひ、又叮嚀致会釈者江は恩義加候儀共有之、

然ニ去冬より同国端々浦人迄も一同謹慎之姿ニて、鳴もの等禁制相成候処、近比ニ至りては、先々通不相変通商不苦候段申諭、追々遊惰之風を起し、諸所江踊・芝居等為取企候由、

一右太門等より伝承仕候処、当時何方之他藩ニても、名義正敷者は、岩國領江入込候ても不相拒、至極叮嚀致会釈候得共、長滞在不為致、如何様子細可有之哉之旨、吉川家来共江太門より為致尋問由御座候処、返答之趣ニは、監物事因循姑息之致周旋、終ニ本家可得為之奸策を以、他藩江交結ひ候哉と悪様ニ言触し、又或時吉川家中和親之友達名前相分不申候得共、互ニ取遣之似文相認、長門様可奉暗落隠謀取企候趣意書面ニ相顕し、右之密書暴徒より岩國領ニおひて窃ニ拾得、萩江持越候筋ニ取繕、遂披露候処、大膳様御親子方始官中一座仰天致され、段々御穿鑿有之、謀書と申事跡以明白ニ相分、夫より漸く疑も相晴候儀共有之、右ニ準し様々無形浮説受、大小嫌疑之目廉有之、別て心痛ニ堪入次第ニて、恥敷訳柄ニ有之候得共、彼是致推量可呉段、監物家来涙を流し、右太門江致説話候由、

一肥前唐津小笠原佐渡守(長国)領呼子浦城下より五里程相隔、湊口江台場三ケ所、且津口番所弐ケ所有之、一身者より致勤番、其外大炮隊士分より拾人余繰廻ニて、城下より混と繋勤致し、当時旅人取締厳重ニ相見得、尤先月初比長藩三人国名等相謀、長崎表江廻船掛呼子浦江致汐繋候を見咎られ、程能追払候儀共有之由、

一松浦肥前守(静)領平戸之城海岸ニ築顕し、同領田助浦より海陸俱半道(半里)位も曳隔候場所ニて、津々浦々江台場数ケ所有之、専天山流被行候形ニて、台場又は広野ニ多人数出張、毎々致調練等、当時随分士気震立、銃武盛之形ニ相伺れ申候、然ニ小笠原領隣国ながら藩中之交不親取沙汰有之、段々承合申候処、先年来より松浦侯萩様御親和ニて、昨夏時分比迄は、長藩共平戸江毎々相渡候得共、　京師之一挙ニ付音信相絶候処、又近此より防長之浮浪輩等相見得候哉ニ取沙汰有之、然ニ小笠原侯脱体御譜代家ニて、御隣国柄政事向旁御検察之趣、一々幕府江御密奏有之、畢竟右体之処より御不和被相成、然ニ呼子浦等ニおひては長之国是至極悪様ニ申触候得共、平戸・田助辺ニては防長致美嘆候形ニ相見得申候、

一大村丹後守(純熙)領松島之儀は、城下より十八里程相隔、廻

三里之端島ニて、炮台等も無之、士分浦横目一人、一身者大庄屋、都合両人島元江致在番、聢と国之形容分兼、併防州之金恵丸船主名前等不相分候得共、平戸より松島・樺島辺江毎度入湊滞船中、酒色ニ耽数多之米銭費、夫而已ならす浦人等致合力候儀も有之故、如何様積荷余計之商売いたし、得用筋ニても有之候欤、旁承合候処、無其儀徒ニ廻船致し、左候て乗頭之者両三人は、凡下体とも不相見得、長より之廻者ニては無之哉評判仕候、然ニ松浦領平戸并大村領松島より御領樺島辺ニおひては、萩様御名誉一方ならす、仮初ニも悪敷は不相唱、甚敷ニ至りては、去秋馬關江外夷船襲来、戦争之事さへ全長軍得勝利、異人地雷火ニ係、弐三百人致焼亡、又は昨冬御長征各軍被差向候得共、山口之城堅固成る故、御撃入難調処より、御猶予寛大之道ニ運立候様致下評、左候て関東之御政道致誹謗、右は畢竟奸智深き長藩、昨年より取々之農・町兵等、其道得手之職分を以、商人・船方・大工等賃取稼品々姿を変諸国江紛入、彼より人を以令言、自国之美を餝、他邦致誹議、前条金恵丸等之手段ニて廻込、御譜代等ニて故障付、国柄江は、因・備・藝州等之国名謀候儀も有之、尤樺島辺は纔壱里廻有之小島、素取締之役筋不罷居場所ニて、長防ニ不限諸国より浮浪体之者流集、当分山口之者入込候由、将又近来ニは幕府之手先、長崎より天草諸所江差廻し、御譜代家等之手弦より導入候者段々有之形ニて、且遠国ながら會津藩ニも同断、右外九州ニては、熊本・久留米等よりも無油断、当時長防之動静は勿論、各国之形容相伺候形ニ相見得申候、一右ニ付、防長之国是、君上臣子之内情、追々他藩等より伝承仕候、評論ニ応し、猶亦観察仕候処、乍恐大膳様臣子之堅愚、奸曲之御見留無之、近来御側ニ暴臣を御近寄、良臣を退られ、　勤王攘夷を名とし、公卿方江手弦を率合屢暴計被致候、其機会ニ臨、去亥年已来未前ニ時を識、機を察せし譜代恩顧之士令痛心、傍観ニ過候者も有之、或は不得止致忠諫候ても、讒者要路ニ登て忠言を破、己之徒類語ひ求、頗巷談野説之暴論得失利害不考候、暴臣浮浪輩之拙策ニ浅間敷も迷れ候処より、終ニ大盤石之基を被為失ニ至り候も、畢竟御国政不正、賞罰不明、御徳化無之、方今御国難到来、吉川監物活然として、尽力及ひ候得共、一己之力不足ニ哉、穏順一致之道不開得、無為方不平懐微意隔居之

為体、然は迚益田等三暴臣御誅罰後ニ至り、于今清廉之良臣御撰挙無之、夫故監物之周旋難被尽、凶徒時ニ生れ致蜂起、人心別離隔意之有姿、諸民時勢ニ怠、様々之国論建、党を結ひ、紛々之人気罷成、依ては小邦と違ひ、大国弊乱之端緒ニ係、再ひ太平之化ニ被沐候期有之間敷哉、観察仕候、

但諸隊より粟屋帯刀江差送候戦書壱通相添、差上申候、

右通御座候、以上、

横目勤

丑五月十一日　土持平八〔綱幸〕

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

〔別紙〕

諸隊戦書之写

昨年秋京師変動已後、御両殿様深御憂慮被為遊、御恭順御尽力被為遊至不得止候ても、年来之微衷以死奉報鴻恩之外無之候付、其節ニ至ては、一致いたし尽力候様被仰聞候付、乍恐御意之旨深奉体居候処、奸悪邪佞偸安苟且之臣其節ニ乗シ、冥頑不霊不忠不義之徒ヲ嘯聚シ、かしこくも君上ヲ朝敵ト申立、御恭順ニ事寄、要シテ萩御帰城ヲ奉促、椋梨藤太其外之奸物要路ニ登、正義忠讜之士ヲ退ケ、剰大夫其外之正吏数十人ヲ斬戮シ、或ハ幽囚投獄シ、旦御屋形ヲ毀チ、関門ヲ破リ、所謂清光寺党ヲ楯トシ御国是ヲ変シ、恐多モ御名義ヲ天下ヘ失セ奉リ、未曽有之御国辱ヲ引出シ候ニ付、私共不憚忌諱去冬来数度歎願書ヲ奉候処、御前ニハ尤之義ト被思召難有奉存候、然処彼奸臣トモ讒佞奸謀ヲ以テ塵散シ奉、妄ニ居意ヲ矯メ、遂ニ今日ニ至リてハ諸隊追討之御廟議一決、既ニ大夫其外先鋒トシテ御出馬被為在候由、干戈ヲ邦内ニ動シ候事、臣子ノ至情不忍儀、泣血之至候得共、事至于此候儀付、可及御一戦候、尤私共目差取者売国無君不顧御国辱、椋梨藤太・岡本吉之進・中川宇右衛門・諫早乙次郎・工藤半右衛門及財間新之丞、進藤吉兵衛以下之清光寺党数拾人ト一戦、決雌雄度旨、大夫其外之面々ニ於てハ御国家ニ取リ寸怨無之候間、無謀岡本吉之進首領只今御渡シ被下候て、早々御引取、御国是御挽回之御尽力、為御国家肝要と奉存候、泣血再拝、

乙丑正月　諸隊各中

粟屋帯刀殿

〔島津忠承氏所蔵本にて補正〕

六三八　小倉出張土岐新兵衛報告（長防探訪）

長州御征伐無相違向ニ承得候形行は、去ル七日刻付を以御届申上置、尚亦段々手を付承合候処、右次第長州江相響候欤、藝州と周防境大瀬川と相唱候処より、萩口之方六里程手前江、当月三日比より、長州より数千人致出張、夥敷陣営致造立候向ニ相聞得、尤　公義大御目付、小倉領沓尾陣と相唱候城下より、五里程相隔候処より上陸ニて、当所江下着之賦ニて、当所役々先日より出迎相成候由候得共、只今迄も未着船無之由御座候間、為御見合此段申上候、已上、

小倉出張

唐物締横目

土岐新兵衛

丑五月十一日

琉球産物方掛

御裁許掛衆

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

六三九　道嶋家記抄陸小姓上京

六三九ノ一

一将軍出馬長州征伐、時宜ニヨリ五月十七日方トノ仰出有之、丑五月廿三日陸小姓ノ内ヨリ五十人、禁聖守護トシテ上京被仰付候、平田七郎兵衛トノニモ什長ニテ出立被致候、

六三九ノ二

丑五月廿四日

一米三盃入一俵　十二貫五百文ノ直成ニ候、五月廿四日

一小麦百文ニ弐合五勺位

一雨傘定尺カ壱貫八百文

一日傘壱貫三百四十八文

一打綿百文ニ付六匁ツヽ

一高一石カ七八十貫文位

一アチ、サバ魚カ一献ガ二百三十二文、或ハ百八十文位、兼テハ百文ニ付三疋、二疋位カ直成ニテアタラシキモノナリ、

又五月廿五日

一真米一表　代十四貫五百文

又五月廿七日相場也、

同　一表　十三貫文

又五月朔日

一二盃入一表　代銭八貫文

六四〇 〔西郷隆盛ヨリ黒田清綱ヘ書翰〕

別紙筑前脱走人、京師ニオヒテ吉井方ニ差出候由、右脱走人ハ北小路ヲ斬姦ノ賦ニ出掛候向ト被相聞申候間、有志之者共ニ相違無之モノニ御座候、正党両立之形歎息之筋ニ相見得、歎ケ敷次第ニ御座候、正気不突立候得ハ、毎モカクノ通之事ニ御座候ヘハ、何分御含置被下候テ、御教解奉希候、御進発之一条ニ付、筑モ自然相迫勢ニ御座候間、此機会ヲ以、一致ノ道如何様共相立事ト奉存候間、宜敷御周旋奉願候、筑・米ノ両藩ハ力ヲ尽シ候得ハ、其益必可有之事ニテ、片腕ニハ相成藩ニ御座候間、何卒御手ヲ付置可被下候、此段御頼申上候、以上、

五月廿六日　　西郷吉之助

黒田嘉右衛門様　〔大西郷書翰大成にて校訂、別紙省略カ〕

六四一 土岐新兵衛小倉ヨリ報告

当時長州表之形勢并隣国之動静等相窺候処、防州岩國其外長州領分之末家不残致一和、当分防長一円致合体居候由ニて、数ケ所江陣営を構へ、関東之寄手を待設居候向ニ相聞得、然ニ、去月十六日　将軍九万人余之御手勢ニて　御進発、別紙通　御休泊ニて、此節は不被為在　御参内も、直ニ当月十五日　御着坂、十九日播州姫路江　御着之賦ニは候得共、内実は先月下旬比、蒸気船より疾ニ　御着陣相成居候由、取沙汰も有之、尤肥後・柳川之両国も、不日ニ出軍之由候得共、筑前并久留米・豊前中津抔は、当分諸所江、角力・芝居等賑々敷取企候向ニ相聞得、当時諸国之人気過半は、第一攘夷、第二長征と致論説、五人打寄候得は、三人は是非攘夷之向ニ申立候由、尤此節之征長ニ就ては、京師公卿方・諸侯ニは、尾張様御始、聊御不納得之方も被為在候哉ニも、致取沙汰候得共、慥成儀は未分り兼申候、

右通承得申候間、為御見合別紙相添、此段申上候、

已上、

小倉滞在
唐物締横目　　土岐新兵衛

閏五月六日

琉球産物方掛

御裁許掛衆

〔別紙〕

将軍去月十六日御発途御休泊左之通

一御休

〔東京都〕

品川　同上　神奈川　同上　戸塚　同上　平塚　同上

一御泊

〔神奈川県〕

川崎　同上　程ケ谷　同上　藤沢　同上　大磯　同上　小田原　同上　箱根　同上　沼津　同上　吉原　同上　三嶋

〔静岡県〕

蒲原　同上　興津　同上　府中　同上　藤枝　同上　岡部　同上　金谷　同上　袋井　同上　掛川　同上　見付　同上　浜松　同上　荒井

〔新居〕

吉田　同上　二タ川

〔愛知県〕

赤坂　同上　岡崎　同上　池鯉鮒　同上　名越屋　同上　おこし　同上　稲葉　同上　鳴海　同上　墨俣

〔岐阜県〕

垂井　同上　醒ケ井

〔滋賀県〕

高宮　同上　武佐　同上　草津　同上　伏見

〔京都府〕

橋本　同上　佐田　同上　瓦丁

〔ママ〕

垂水　同上　以上

六四二　島津主殿關山糺宗門掛

一宗門方掛　島津主殿

〔久籌〕

大垣　同上　大津　同上　守口　同上　越知川　同上　鳥居本　同上　關ケ原　同上　尼ケ崎

〔兵庫県〕

大坂　閏五十五日　枚方

〔大阪府〕

淀　同上　明石　同上　兵庫　姫路　同十九日

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

關山〔金生〕糺

右之通掛被仰付候条、兼テ見聞役掛宗門取締、厳極行届候様被仰付候、此旨表方へ致通達、奥掛御勝手方へモ可相達候、

閏五月　右衛門

右之通慶應元年丑閏五月十日被仰渡候事、

一御目付
一宗門掛
右ハ此節別段之以
思召、宗門改役之御役場、右之通被相替、御役所之儀、宗門方ト相唱候様被仰付候、
一宗門掛見習
一四人賄料
一御役順御裁許見習之次
右ハ此節別段之以
思召、右之通被仰付、急事等之節諸差引旁、何篇御裁許掛並御裁許掛見習同様被仰付候、
一横目
一宗門方掛
右ハ宗門方横目之儀、右之通役名被相替、急事等之節諸差引旁、外横目同様被仰付候、

右之通被仰付旨、被　仰出候条、此旨差方へ致通達、奥掛御勝手方へモ可相達候、

慶應元丑
閏五月

〔桂久武〕右衛門
〔喜入久高〕攝津
〔小松清廉〕帯刀
〔川上久運〕但馬
〔川上久美〕式部

六四三　土岐新兵衛小倉ニ於テ探訪報告

当時長州表動静向并、隣国之形勢等承得候形行は追々御届申上置、尚亦精微ニ手を付承合候処、此節播州安志小笠原幸松丸様為御迎、小倉船数艘被為差登候内、壱艘は同所之周平船頭ニて、同町人米屋伊兵衛、自米瀬戸内表ニて、売払呉候様逢頼ニ、四斗入五拾俵丈積入、去月十八日開帆、同廿日防州カムロ沖漕船ニて乗行候折、下之關阿彌陀寺之船印有之三枚帆壱艘、右周平船江漕掛ケ、何方之船ニ候哉と相尋候付、小倉船と相答候処、年比三拾内外と相見得候立揚野羽織致着用

候士体之者四人乗移り、何荷積入候哉と申ニ付、米積入候段相答候由、然処一人脇差抜身ニて底板を明、此度将軍兵粮用ニ、兵庫辺迄積登候米ニ相違無之旨申ニ付、備後鞆表江煙草買ニ積登候段致返答候処、何分小倉船ニ候得は難差置、沖カムロ江船を付候様、荒々敷申聞候付、色々為申詫由候得共、船綱ニて右阿彌陀寺船江結付、竟ニ沖カムロ江為漕出置、右四人之者共は致上陸候由、然ニ周平儀は兼て知人之船宿江走越シ、前文之趣申聞、是非助ケ呉候様相歎候処、何分気之毒成訳合ニ候得共、彼は豊岡殿と申人ニて、兼て我々共ニも致恐怖候人柄ニて、込り入候段申シ、聢と口入等いたし兼候口気振故、無致方乗組中致当惑居候折、右四人之者共、人夫等多人数召列越シ、積米都て取揚候上申渡候は、船頭始乗組一人も不残可打殺候間、庄屋嶋江船漕廻シ候様申聞候付、一同相驚、老母等も罷在候付、一命は助ケ呉候様申出、六人共ニ泪を流シ、手を合致拝伏候処、於其儀は老母等江対シ、一命丈は助ケ呉候付、此書付小倉役筋江可差出申聞、庄屋より同名宛之書付弐通相渡候由、

一周平事、右次第ニて備後鞆湊江致着船候処、類船九艘汐繋いたし居候付、右形行申聞、便船より当月四日、小倉江罷帰、前条始終之形行申出、右弐通之書付差出候由、其文言小倉領内兼て之政事向甚暴政ニ有之、人民苦ミを請候段周平申出候付、一命は助ケ遣候趣意等書認為有之由、然処沖カムロ庄屋より船取仕立、船頭水主四人乗組ニて去ル七日当所長濱庄屋江申遣候は、小倉船於防州沖ニ逢盗ニ候由、就ては右盗賊致捕方、盗米取揚番人付置候付、早々為請取方小倉役筋之内より御出会可給旨、申遣候由ニて、当所吟味中右船番人付置候処、亦々去ル九日、四人乗組之船壱艘同断ニて、右相捕置候盗賊、請取方及延引候処より逃去り候付、右米為請取方可差越申遣候由、然処前段之趣当所出張塚原但馬守江(昌義、大目付)も細々申出之上、右家室船弐艘共ニ、夫形速々差返シ相成候由、

一今般　将軍御進発ニ付ては、暫時被為在　御参内、大坂　御着城之上、御老中・若年寄間より当所江御下着相成、諸国御出軍之向ニも致取沙汰、尤肥後・柳川之両国も出勢之手当向、都て相調居候得共、　将軍姫路江御着陣之上、惣勢可繰出旨、塚原但馬守江御申出相成候由、

一此節御征長被仰出候趣、早速長州江洩聞得候儀は、長府藩名前不相分候得共、野々村名字之者、当時之動静為探索方江戸表江罷登居候処、今般御征伐相発候付、則より物貫体ニて、道中筋罷下り注進いたし候由、且又、英国人らふだ名前之者、横濱より飛船ニて、本御旗本之由、当分致欠落居候藤田泰蔵乗組ニて、去ル四月十五日長州江致着船、右御征伐等之趣為告知候由、(事実ナシ)実説之向ニ相聞得、尤此比ニ至り英国之旗印相立候蒸気船繁々下之關江渡来いたし候由、一昨日も大船壱艘下海筋より乗入、今ニ致滞船居候由、就ては余程和親之向ニ相聞得、其外備前・因州・筑前・久留米・豊前之中津等は、以前より長州と致同意居候由、近比ニは筑前若松辺より米数千石長州江致運送候風説も有之、殊ニ太宰府滞在之五卿方、窃ニ對州辺江潜伏之催シ有之哉ニも申触、亦は此節御征長付ては、防州吉川監物より筑前江使者を立、和降之御執成シ願立候向ニも致取沙汰候得共、基軽輩之雑説ニて、聢と為突留儀は分り兼申候、

右通承得申候間、為御見合此段申上候、已上、

小倉滞在

唐物締横目

土岐新兵衛

閏五月十二日

琉球産物方掛

御裁許掛衆

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

六四四　江戸通信（銭相場）

丑閏五月十八日

江戸通町(近江屋猪之助ヨリト記ス)今月十五日ヨリ銭相場、左之通ニ相成候、

一古四文銭壱枚　拾弐文

一文久四文銭壱枚　八文

一銅小銭壱枚　四文

一甘白銅銭壱枚　六文

右之通御触渡ニテ通用相成リ申候、前代未聞之事ニ御座候云々、

六四五　〔幡島三郎ヨリ黒田清綱へ書翰〕

謹啓三月廿九日、四月十五日両度、自筑地之御細書難有拝誦、先以益御清適被成御起居、欣喜此事ニ御座候、其後闕然御答書モ不仕、甚以失敬之至ニ候得共、何分

好便モ無之、且過日星山君御帰船之節モ、生憎小生浅海浦行中ニテ行違ニ付、不得止之事情多罪御海涵奉祈候、扨又宰府奉別後、直ニ弊藩へ御出被成下、不一方御配慮被仰付、御蔭ヲ以弥解囚之御返答ニ及ヒ候趣、委細御書中被仰越、積年深枉之患ヲ一朝御解被下、小生等日夜之苦心モ氷釈致、雀躍之至不堪罷在候処、其後又姦徒ヨリ陰計ヲ廻ラシ、解囚難叶様手ヲ施シ、御約諾ヲ背候趣承、重テ驚惋仕候、何分対　尊藩失信義、言語道断不相済之次第、於小生等無面目義ニ御座候、就テ此上御願申上候モ、甚強顔之至候得共、右等之義全姦物之謀計、正議ヲオトシ入、寡君之明ヲ蔽候ヨリ、無拠信義ヲ失、御違約申候次第ニ立至候義ニ付、何卒此上御見捨不被下、　御大藩之御威徳ヲ以恢復之所ニ相成候様、幾往モ奉懇願候、尤弊藩幽生之死生ハ、一国之存亡ニ関係致居、幽囚生一死候得ハ、弊藩再興候事ハ迚モ出来不申、然処御承知之通、勢ニ随ヒ変シ易キ之藩風ニテ、既ニ昨年伐長之命下リ候節モ、弊藩俗論益沸騰、幽囚之士殆被誅殺候勢ニ相成候事モ有之、方今天下之形勢朝夕変転、弥切迫ニ及、又伐長之論起リ、大樹公自ラ大兵ヲ卒ヒ、上洛有之候趣ニ候得ハ、弊藩モ又姦人得力居候ハ、心然之事ニ付、此後時勢ニ従ヒ、何時暴挙致候モ難計、左候ハヽ弊藩夫迄之事ニ御座候、臣子之情寔ニ難堪次第、其辺深ク御亮察被成下、姦徒ニ不先内ニ解囚之処ニ立到候様、御配慮御拮据被仰付被下度、泣血奉伏願候、幾重ニモ御垂恕被成下候様、奉祈候、扨又当藩之義、小生等四月朔着船、夫ヨリ追々応接致候処、何分種々之虚説ヲ申張、一向屈撓之色無之、然シ是非共姦物ヲ退度苦心罷在候内、五月朔夜藩士三十人許奮発致、勝井股肱之人阿比留喜助・大庭左次右衛門・原田佐兵衛三人ヲ暗殺シ、直様君前ヘ訴、其ヨリ勝井五八郎ヲ被召、割腹被申付候筈之所、勝井ハ兼テ殿中ヘ詰切居候事ニ付、其様子ヲ悟リ、抜刀シテ君前ニ迫候ニ付、近習之士抜連勝井ニ掛候所、勝井ハ不闘シテ逃去、行先不分、翌夕自宅稲荷堂ヘ潜匿致居候事相分、多人数ニテ取囲討取、其残党モ二十人許継テ被刑、先恢復之姿ニ相成候ニ付、五月六日平田・大江等一行、壹州ヨリ帰船セシメ候所、右斬姦之諸士モ勝井之党ニテ、畢竟禍ヲ畏レ、反覆致候者多ク有之、就テ其後姦徒又々得勢、勝井程之暴逆ハ〔ママ〕無之候得共、只今ニテハ前狼後虎之患ニ相成、使

リ申入候事モ一切不行、且正議之士ハ大ニ被悪、剰此節帰国之士ハ、仇讐之如ク忌憚シ、日夜同人等ヲ除クヲ計候様子ニテ、既ニ当月十三日夕、君侯調練御覧ト申立、士卒ヲ集候ニ付、平田・大江・多田荘蔵等是ヲ悟リ、帰国之士大江宅ニ集居候処、果シテ多人数ニテ、多田荘蔵・佐野金十郎・小宮延太郎・吉野牧兵衛四士之宅ヘ押掛、切腹モ被申付候勢之処、染川・大脇御両君不一方御尽力被成、小生等モ随テ周旋致候ニ付、漸右四士詰問ニ相成候処、何之罪状モ無之事ニテ、全姦徒之計策ニハ御座候得共、先無事ニ此節ハ事済申候、然所右之次第ニテ、今日之勢中々当藩恢復之目途無之、且　尊藩御使節等ニ対シ、只今ニテハ平田・大江以下之所モ先無事ニ有之候得共、諸使節引取之後ハ、同人等禍ニ罹候事必然之勢之様被察候、当藩モ勝井之暴逆ニテ、正議之士ヲ誅鋤シ残居候ハ、此節帰国之士ト其他僅ニ両三人ノミニ相成居、実ニ可憐之事情ニ御座候、染川・大脇御両君ニモ、其辺深御苦慮被成居候、然所小生等モ折角奉使命罷越候テ、此侭引取候モ甚不本意之至候得共、何分右申上候通之事情ニテ、実ニ尽力之術モ尽果致方無之、先近日中引取候覚悟ニ御座候、尤同人等救助之道モ有之候ハヽ、又当藩恢復之時モ出来可申、其辺何卒御賢慮被為廻被下度、是又奉懇願候、先生当藩御越之義モ、甚残念之義奉存居候処、御同藩様御渡海ニ相成、不相変御下交被成下、深ク御懇切被仰聞不一方御厄介ニ罷成、御蔭ヲ以万事御教諭ヲ受、寔以難有奉万謝候、右御礼且奉懇願度、草略如此ニ御座候、委細ハ大脇君ヨリ御承知可被下、イツレ不遠拝唔万縷拝謝可仕候、再拝謹白、

閏五月廿八日

従對州府中
幡島三郎

黒田嘉右衛門殿

二白

時下陰霖之候、乍憚千万御自玉奉祈候、猶弊藩之義ハ前文之次第、幾重ニモ御垂憐御配慮被成下候様奉万祈候、再拝敬首、

六四六　蓑田傳兵衛ヨリ黒田嘉右衛門ヘ書

（太宰府ヘ云々）

黒田嘉右衛門様　　蓑田傳兵衛

西郷吉兵衛宛之問合、従筑前及両度被差出候処、西郷出立後相達候ニ付、拙者致開封御届被申上越候赴(趣)、逐一致承知、則達　御聴置申候、久留米一条モ精々為被致尽力由候得共、姦説益盛ニ相成、迚モ急速解囚之向ニ無之由、御互ニ残意不少、当世態愈奸党共疑念イタシ、致閉塞候半ト存候、近々彼御方ヨリ御使者被差向赴ニ候得共、未無其儀、追々御賢慮モ被為在候半ト奉恐察候、既ニ天下之勢切迫相成、京師之一左右不相分日々相待候義ニ候、為御心得此旨及御返答置候、以上、

閏五月廿九日　　蓑田傳兵衛

黒田嘉右衛門殿

六四七　長州討入来ル五日ト決定云云達書

来ル五日弥御討入相成候ニ付テハ、間諜脱走等之輩潜入之程モ難計候間、領分国境間辺海岸島々迄守衛之義、別テ厳重可被心得候、以上、

右六月一日夕鹿児島ヘ幕ヨリ達候事、

六四八　園田彦左衛門土持平八小倉ニ於テ探問報告

私共事、去ル二日御国許出立、精々差急夜白通行仕候ヘ共、雨天勝ニて諸所川々江相滞、同九日朝当所江着仕、爰元取沙汰之次第は勿論、通行掛承合候形行、一先左ニ申上候、

肥後備頭
堀丹右衛門
右一番手
右同家老
有吉市左衛門
右二番手
右同備頭
尾藤金左衛門
右三番手
右同宇土城主
細川豊前守(行真)
右本陣先
右同一門家
長岡　刑部
右本陣跡

右人数隊長ニて、此節長州御再討出軍被仰付、惣人数弐千五六百人位、将軍御下坂御差図次第豊後鶴崎江繰

出、責掛之都合相成筈之由、右外ニ長岡監物(是容)・長岡内膳、溝口蔵人(貞直)・有吉将監ニも長州模様次第ニは追て被差出儀も可有之旨、申渡相成居候由、左候て中途人馬込合等無之様との評儀ニて、先月末方より拾四五人、又は廿人計ツ、追々繰出、相応之人数鶴崎江滞陣いたし居候由、尤此節先鋒御願立ニ付ては、其涯少々は異論も為有之由候へ共、近比ニは左様之聞得も無之、且長人為探索方忍込候聞得有之、旅人取締は勿論、長州江米抜売いたし候者有之由ニて、先達てより穀物一切他所江売出候儀、手堅差留相成居候由、

一柳川侯惣人数三百人位、小倉宿陣之賦ニて爰元出張、塚原より差図次第不日繰出之手当相成居、小笠原侯ニは此節出軍之兵勢都合千八百人位、尤出馬も有之筈之由、

一大樹公去五月十六日関東御進発、東海道御通行、伏見姫路(マヽ)城江御着城之筋を以、大坂之城江入　御、併内実は蒸気船より御先番人数ニ被為紛、前廉大坂御着城之哉ニも致風説、又は先月廿二日　御入京、同廿五日大坂御着城之哉ニも取沙汰御座候、且

将軍再討ニ付ては、滞坂中

朝廷より諸侯江長征之儀為　御試、御建白

叡覧被備せ候御朝議被為在との風説も御座候得共、何分当所より掛隔、彼表之情実分明仕不申候、且大目附塚原但馬守并御用人服部清之進、其外上下六拾人程当所江出張相成、追々豊筑之海岸等見分有之、夫而已ならす九州各国之形容探索有之形ニ相見得、且又長征ニ付ては、小倉侯は素末家小笠原幸松丸・堂藤(ヤヽ)両侯合て弐千余騎援兵可致被仰出、尤堂藤侯は豊前中津より上陸之賦ニて、三藩一手之戦兵ニて専軍旅之用意有之、勿論小倉領海岸台揚等江は多人数出張、昼夜相堅罷在、右は畢竟敵方より不意ニ逆寄致し候欤も難計との懸念ニ御座候由、

一将軍御再討ニ付長藩国論旁之処、当所より海路絶、更ニ探索之手絃も切果、容易ニ分兼申候得共、五卿方致扈従候諸藩脱走之者共、筑前若松黒崎辺より、追々馬關江押渉致往来候、便りニ彼等商議布告いたし、太宰府辺江流入候、一説ニは今度伐長ニ詫(託カ)し大兵を以暴威を張り、

朝廷擁塞致し、兵庫開湊之手順可致奸策見留も有之、左候て当時長藩諸隊致一統、尤吉川監物(経幹)之建議ニも、

去冬御征伐之砌は三暴臣首級出し、城迄も明渡降伏致謝罪候ニ至り、断然監物尽力致歎願候処より、終ニ御寛大之道も開ケ、其後大膳様御父子御謹慎被遊、御国家一致人気折合之御所置、折角致勤労候場合、御再討可有之及伝承、然ニ大膳様御父子、不容易御企有之との御趣意ニ付ては、其罪之非是ヲ致尋問、若理不尽御撃入も候期限ニ臨ては、無為方国家存亡不顧可致敵対決議相約、当分津々湊口より国境江、陸台場取構待設居候由、

一熊本・久留米藩等之国論之処、差て是と取留申上程之論議は不承候得共、当時宰府滞留之五卿警固之各藩、追々互ニ取会有之由御座候得共、熊本・久留米両藩は至て懇切ニ相交致密会、他藩江之会釈疎情軽薄ニ過き、然ニ三條方等を脱走公卿抔と致軽蔑候口気も有之、尤当時久留米藩之国論は、細川藩之建議次第と相見得、是以畢竟幕府之周旋より出候半哉、他之疑念も御座候、将又当二日夜、宰府肥後宿陣より小銃ヲ撃、一放ニは候得共、同所は鉄砲御留場所ニも有之、不意之事ニて公卿方は勿論、諸藩致仰天、俄ニ追々駈集列藩評議之上、不被捨置訳柄ニ付、熊本隊長江及尋問候処、酒狂ニて全不取覚暴発いたし、何そ異論は無之段、公卿方其外江も程よく挨拶有之、左候て右之者直様翌日国許江差下相成候由、然ニ熊本藩は最初より外四藩ニも相替、警固多人数出張罷成候処、先達てより追々国元江曳払、其後右交代も不相見得、当分士分九人程致滞留、然ニ表通は伐長ニ付、引取候哉ニ申出、右旁之始抹〔末〕ニ付ては、猶更嫌疑之廉も有之、公卿方始諸藩ニおひても、折合之処至て不宜形ニ相見得申候、

右通ニて着涯之事故、此表動静情実分兼、猶又探索仕追々可申上候、且佐平太儀は、今日より藝州江渡海仕候間、自然彼表着之上承得候形行可申上候、先此段申上候、以上、

但

幕府其外各国風説書壱冊相添差上申候、

小倉滞在　園田彦左衛門

六月十二日　土持佐平太

奥掛

書役衆

〔添書等省略カ、島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

六四九　当時ノ米価（鹿児島）

一三盃入真米一俵　代銭十八貫文丑六月十五日比
一二盃入一俵　代銭十貫文　六月十日比直成

六五〇　道嶋正亮建言

此節　御身辺格外ノ御取縮被遊候哉ニ伝承仕申候間、我等敷不肖ノモノ恐入候得共、存寄左ニ申上候、人ニ君タルハ苦楽衆ト共ニナストハ、聖人ノ格言御座候、天下国家ヲ治メ玉フハ、我一身ノ徳ニヨルモノナリト思召、天ニ則リ地ニ応シ、人ニ和シテ天下国家ヲ治メ玉スンハ、人ニ君タルノ任トハ申難シ、人各今日ノ生業ヲ楽ムハ、人ノ命数纔カ六七十年、七十古来稀ナリト申セハ、六七十年カ限リニ御座候、其前ノ六七十年ヲオモヘハ、殊ニ長ク候得トモ、過去リシ六七十年ハ夢幻ノ如ク、実ニ光陰矢ノ如クニ御座候、其六七十年何事ノ為ニ朝ナ夕ナ汗水ニナリ、暑寒ノ苦シミヲ犯シ奔走スルハ、君恩ヲ敬承（恭カ）シ、祖宗ヲ祭祀シ、父母妻子ヲ養ヒ、衣食住ニ安心スル迄ノ楽ニ御座候、左候得ハ、タマ〳〵天ノ命数ヲ禀ケ得タルモ、夫々士農工商上下寡福ノ階級アリテ、人各其分ヲ楽トスルモノニ御座候得共、兎角昇平ノ化ニ浴シテハ、終ニ上ヲ好ムノ心モ生スルモノニ付、聖人是ヲ禁メ、節倹ノ道理ヲ解出シテ、人君ヲ禁メ世ヲ憐ミ玉フモ、実ニ、天地自然ノ道理ニ御座候、其道理ヲ能ク弁ヘ給ヒ、己ヲ責人ヲ禁メ玉ハスンバ、人君ノ任決テ天道ノ理ニハ相叶ヒ申マシク、今世上諸色高料且兵乱ノ御時ニ顕レ候付、下々ノ苦ミヲ御憐察被遊テ、今日ノ渡世ニ苦シミ、衣食住ニ堪ヘカタク思召、　御身ヲ御責メ、美服ヲ去リ麁服ヲ用ヒ玉ヒ候ハヽ、上下交々其恩慮（思カ）ニ感服シ奉ルヘク思召候ハンカ、又ハケ様ニ諸色ノ高料ニ相成候儀ト、驕奢ノ余リ下々美服ヲ用ヒシ故、諸色モ高料ニ相成候ト被思召候カ、今此諸色沸騰且兵乱ノ御時ニハ、誰カナス業ナラント深クオモヒ遠ク慮リ、其大本ヲ御見出截チ棄玉スンハ、此弊マス〳〵沸騰可仕候間、千思万慮可被遊、モシ御合点無之候ハヽ、一々御不審書ヲ以、上下ニ不限対策被仰出候テ、其内ニハ決テ此弊ニテ箇様ニ世上一変シ、諸色高料ニ人心モ乱レ立候儀、明白ニ相分リ可申候間、其宜ニ随ヒ、務テ英雄ノ心ヲ攬ルノ意ヲ奮発シ玉ヒ、其弊ヲ一洗変革ナサレ、其上

質素節倹ヲ以テ上下ノ衣服ヲ定メ玉ハヽ、其時コソ人々其位ニ居、生涯ノ楽ミヲナシ、君恩ノアリカタキヲ敬信シ、上下安心可仕候、今君ノ衣服ヲ麁相ニナシ玉ハヽ、上下ノ衣服何ヲ以テ着シ可申哉、当時綿麻ノ類ヒサヘ抜群ノ高価ヘ相成、殊ニ市中ニ相少、タマ〳〵有之トモ、軽キハ容易ニ買入難相調、却テ世上紛乱可仕候、定テ君ノ心ニハ、上下衣服ヲ同フシ玉フ時ハ、衆ト楽ミヲ共ニスルノ本文ニモ相叶フトノ思召モ可有之候得共、是ハ決テ左様ニハ有御座マシク、蕭荷カ所謂皇居ノ厳カナルヲ見スンハ、争テカ天子ノ貴キヲシラン、左候得ハ上下衣服ヲ同フシ玉フ時ハ、貴賤ノ分チモナク、礼義廉恥ノ風俗モ失セ、却テ国家ノ大害ト罷成可申候、泰公遺事ヲ視玉フヘシ、泰清公〔島津綱久〕竹内助市カ言ヲ深ク信シ玉ヒシ事、シバ〳〵相見得申候、助市ハ其時□〔本ノマヽ〕下人ニテ、別テ軽キ職ニテ御座候得共、下言ヲ恥玉ハサル事格別ノ儀ト奉存候、助市モ又夫程君側ニ咫尺シ奉リ申候テ、君寵ニ誇リシ事蹟モ不承候得共、実ニ其比ノ風俗易簡質朴ナル事オモイヤラレ申候、只今君ノ衣服ヲ麁相ニナサレ、下々ニ抑移候様トノ思召ハサル事ナレドモ、外ニ令ノ大ナル被成候様モ可有之、ケ様ニ令ノ行レカタキヲ下々大ニ困窮狼狽シ、実ニ世上動揺仕、却テ怨情ヲ懐キ可申候、其訳ハ前ニモ申上候通、諸色沸騰綿麻ノ類ヒ少ク、下々朝夕ノ苦ミ外ニ余産無之者共ノミニ御座候付、何ヲ以テ衣服ヲ改メ易ヘ可申哉、其大本ヲ御見出、嘉言善行被遊候ハヽ、自然ト世上質朴ノ風ニ一変可仕候間、第一ノ御急務ニ御座候半（結文迭ス）

慶應元年乙丑六月中旬草稿

六五一　本藩士某勝安房守対話ノ要点

六月中旬比ニテモ可有御座哉勝房州〔義邦〕上京ニ付、岩下家御同道旅宿ヘ見舞イタシ候、同人咄長防ノ御所置イマタ戦争ハ有之間敷存上坂イタシ候処、最早事破居イタシ様モ無之候、江戸出立迄ハ山口ヘ直ニ差越、彼是応接成功可致含ノ処、今更手ノ付様無之、戦ヘト有之候ハヽ、差越直ニ打挫キ見セ可申、上京ノ主意ハ不被申聞候得共、會ニ被相頼タルニテモ可有候哉、公用掛ノ野村初説破セラレ忠ヲ尽候ハヽ、大忠ヲ尽セト申置候、薩・會ノ中周旋ハ決テ不出来、ソノヨウナルタヒコ持ハイヤチヤト申置候、乍併以道論丈ハ可致ト申置候ト、笑

咄ニ御座候、コノ三ケ年ノ遊ヒニ、大ニ学問モイタシ、目モ開候事多ク候、兵庫開港ノ儀ハ力ヲ尽候存念ニ候、何分幕ハ　朝廷ノ御役所、則幕ト云役所ト心得候得ハ、訳ハ無之候得共、夫ヲ我カ物同様ニ心得、　朝幕抔ト唱候故、事皆間違ニ成立候、是等ハ鎌倉以来ノ弊故、イタシ方モ無之候得共、是ヨリハソンナモノニテハ決テ相済ス、何レ大藩ノ五六藩モ尽力イタシ、共々得失ヲ論判シ、宜敷ヲ取ノ仕掛ナラテハ不相済トノ咄ニ御座候、會モ大ニ悔悟イタシ、房カ議論ニテ、薩之心意初テ存タルト申居候間、トヲソ頼ムトノ事ニ御座候、外ニ段々咄モ御座候得共、国家ニ関係シタル事ニテハ無御座候間、形行迄申上候、只今ハ下坂ニ付、此度ニ橋被下候ハヽ、軍艦奉行ニテ被参候哉相分不申、軍ニ罷成軍艦ノ指揮ヲ被預候ハヽ、為応之儀ハ被致候半欤、

六五二　長防ノ動静探訪報告

長防動静且隣国形勢等之形行、去ル十二日月次飛脚便より一通り御届申上置、精々手釣を求、響合無之様承合、いまた御見合相成程之儀も無之候へ共、承得候趣左ニ申上候、

一防長之儀、爰元よりは通船差留相成居、夫故、委敷儀共分兼候へ共、筑前者ニ姿を窶、為探索方入込候者共罷居、右江手を付承合候処、諸所江砲台并陣営を拵、萩・山口之城は勿論、津々浦々江も人数手配いたし、いつれも持口江出張、粮米沢山ニて、砲機は馬關北浦辺江、毎々異船参り、此内大小砲数拾挺并玉薬交易いたし、尤蒸気船壱艘買求、大里前より引島辺諸所追々乗廻り、左候て於役筋は、成丈寛大之御処置有之度歎願之形ニ候へ共、劇烈之者共も罷居、いまた国中一致一和と申程之儀ニては無之、毎々及異論候輩も有之、然共御征伐之時機ニ相成候へハ、不及是非一統為国家粉骨砕身いたし、存分相働度、吉川監物ニも同断相含居、いつれも突立居候由、

一将軍先月廿五日御着坂、御供方之面々も追々着いたし、姫路御入城之御手当ニは相成居候由ニは候へ共、いまた期限等も不相分、尤此節は分て極密御評議有之向ニて、当地江は色地分かね、然共世評ニは何となく御再討迄は至りかね、決て御寛大之御趣意欤之様取沙汰仕、何分ニも両条共来月中旬過ニも不罷成候ては、迚ても御処置は相付申間敷、爰元出張塚原抔咄も有之由、且

陸路芸州ヨリ岩国夫ヨリ山口攻寄候面々

応援

松平越前守

三浦備後守

板倉摂津守

本多肥後守

松平備前守

脇坂淡路守

松平安芸守

板倉阿波守

阿部主計頭

松平近江守

紀伊中納言殿

芸州石州数道間路ノ押

朽木近江守

森美作守

森対馬守

木下備中守

関備中守

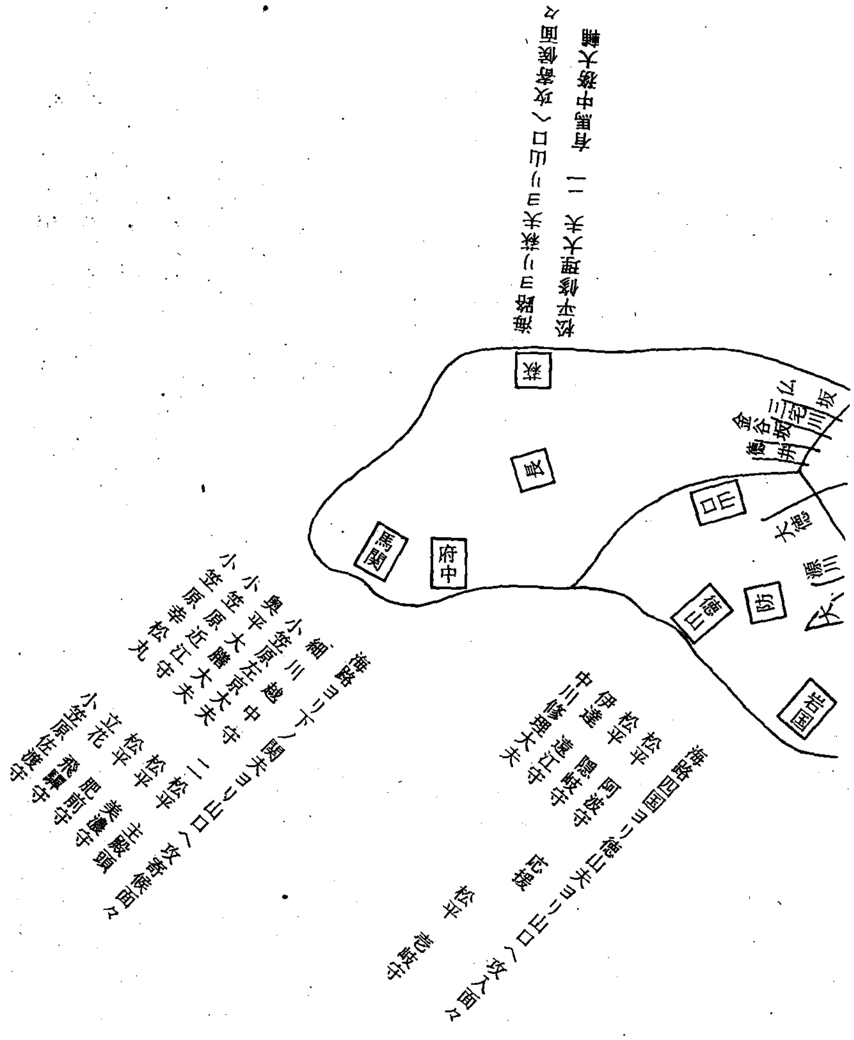
丹羽長門守

一柳対馬守

伊東播磨守

織田山城守

建部三二郎



海路ヨリ萩表ヨリ山口へ攻寄候面々
松平修理大夫
二
有馬中務大輔
萩
府中
馬関
山口
徳山
防
海路ヨリ下ノ関表ヨリ山口へ攻寄候面々
細川越中守
小笠原左京大夫
奥平大膳大夫
小笠原近江守
小笠原幸松丸
二
松平主殿頭
松平美濃守
松平肥前守
立花飛騨守
小笠原佐渡守
海路四国ヨリ徳山表ヨリ山口へ攻入面々
松平阿波守
松平隠岐守
伊達遠江守
中川修理大夫
応援
松平壱岐守

諸侯方ニも屹と名義不相立候ては、縦令御命令有之候ても、容易ニは難致出勢国柄も有之、何分及混雑候向ニも相聞得候へ共、いまた慥ニ分かね候付、追々承合可申上候、左候て塚原爰元着涯、小倉藩致面会候処、余事は差置、筑前国論如何之模様候哉、余程嫌疑を掛及尋問候由、於当藩は、兼て筑州之儀は色々申立、尤塚原方都合向を恐居候姿ニて、長州同腹ニて、当分迚ても互ニ往来いたし候抔と之趣申答、夫故尚更先達ても申上置候通、彦根并會藩其外、手付之者共差出探索いたし、彦根藩ニは筑前より一昨日当所江引取候付、おのつから聞合之形行塚原江為申出筈候得共、其遍之儀は相分り不申、御目付御手洗幹一郎事、近々爰元江差入筈候由御座候処、病気ニて跡代り、松平左金吾蒸気船より去ル六日大坂出帆、諸所海岸見分之由ニて、いまた着船不仕、塚原方江も、将軍御着坂後之模様不相分、夫故左金吾差入之都合余程待かね候由、最早相応日込ニも罷成候付、決て近々着船可罷成哉、左候ハ、其上は、彼是相分ル廉も可有之、且又肥後之儀、此節は鶴崎出勢決議相成居候処、小倉侯ニは御小藩、殊ニ馬關より逆寄せ之取沙汰有之、何分手薄き処より、万一も変動到来も難計との事ニて、小倉援兵之名目を以、実は塚原方為取締、早々出軍人数之内より当所江差出候様、熊本并柳川・豊後辺江も申渡、細川よりは鶴崎出軍決議之趣を以、為申断由候へ共、聞済無之処より物頭三人、其外士分取束上下七拾弐人、柳川よりは出軍人数之内先五拾人位、来ル廿日国許出立、豊後杵筑府内よりは、弐三拾人位ッ、当所江着いたし、中津之儀も人数揃置、追て差図次第繰出候様是又申達、いつれも塚原宿陣最寄江参集之手当ニ御座候、

一将軍先月廿一日膳所城御泊り之筈候処、同十五日別紙之人数外ニ長人両三人被召捕、夫故欤同所江は御泊り無之、俄ニ御宿割相替、大津駅江御泊り相成、右被召捕候事柄は、いまた分りかね候へ共、本田様ニは御小藩右様捕方相成候程之企も有之間敷、就ては浮浪輩共入込、何欤事を工候時機ニて、右通相及候半、先実事等敷相聞得申候、

一松平肥後守（容保）様先月廿八日御下坂、一橋侯ニは当月朔日比より同断之哉ニ取沙汰仕候、

一播州安志小笠原侯、当所御援兵として、先月中旬過御乗船之処、長兵付躯御通船難成、御引返シニて、備後

鞆湊江御滞船之由当所江申参り、当月初方より迎船拾壱艘被差遣候由、其後之模様いまた相分り不申候、
右通ニていまた巨細相分り不申候へ共、別紙相添此段御届申上候、尚相変儀は時々可申上候、以上、

丑六月十八日　　園田彦左衛門

小倉滞在

（島津忠承氏所蔵本（別紙図なし）にて校訂）

六五三　文久二壬戌ヨリ本年ニ至ル出来事

文久二戌年中勘定奉行小栗上野介曽テ在横濱亜米利加国公使プラインへ、軍艦三艘購入之儀ヲ約シ置キタリシカ、数年ヲ経テ唯富士山艦壱艘（西暦千八百六十六年第一月横浜へ渡来）ヲ、彼方ヨリ送付セルノミ、夫ヨリ前記手附金内渡八十万弗之処、残リ金円其侭ニテ在リシニ付、右為結算勘定吟味役小野友五郎并軍艦組岩田平作・小笠原賢蔵同行、慶應三卯年正月廿三日、品海出船、二月十六日米国桑港ニ着シ、華聖頓府ニ至リヲコシデント（旅館ノ名）ニ寓シ居リ、同国政府へ談判之末、富士山艦代価諸（雑）費共計算受渡済ノ上、其残金ニ利子ヲ添フルト、且紙幣ト正貨トノ差ニテ、数十万弗之残余金額アルニ由リ、装鉄ストーンヲール船ヲ購収シ、其他諸費ニ至ルマテ総テ差引、猶十万弗許ノ余リアル故、スペンセル砲等ヲ買求ム、因テ彼方ニ渡過ニ成リ居タル残金之分ハ、此時ニ尽ク受戻シタリ、此事畢リ友五郎ハ飛脚船ニテ、ストーンオール船渡来之前ニ帰　朝セリ、平作・賢蔵両人ニハ同船ニ乗組、慶應四辰年四月帰着セリ、

本文金円差額ノ生セシハ、最初渡シタル総貨八十万弗ナレトモ、彼国ニ於テ時相場ノ違ヒ、即チ紙幣正貨ノ差及ヒ利金等ニテ、大約四十万弗ヲ増加シタル由、

松平修理大夫家来差出候書付

長崎御製鉄所蒸気之御船、去ル亥年拝借仕候処、機械折損し大坂表より長崎江為修復差廻リ候折、長州沖ニテ長府台場より不法之及砲発、右御船致焼失、其段ハ則御届申上候通ニテ、其後右次第為尋問長府江使者差遣可申旨、其砌　御上洛中ニ付、於京都及御届候処、長州不法之義ニ付テハ、従　公辺御所置被遊候間、決テ取止軽挙之振舞無之様可仕、尤右御船之義ニ付、心配致間敷、御丁寧之御沙汰之趣有之、無拠其侭罷在候処、其後　御征伐迄も被仰出、尋問之義も相調不申、御船焼失ニ付、乗組人数も士官始数十人死亡、甚以迷惑之次第ニ御座候、就テハ船中不念ニテ致焼失候ハ、

奉伺候上何様奉畏、御船代りも上納可仕義御座候得共、此節之義、乍恐別段之訳柄と奉存候間、何卒前件之次第、厚御評議被成下、出格之御取訳を以、御船代上納之儀御猶与被仰付被下度奉願上候様、修理大夫申付置候間、此段申上候、以上、

丑六月十八日　　松平修理大夫内
　　岩本右右衛門

六五四　藩内雑事（道嶋家記抄）

六月廿四日

一真米三盃入一俵弐十弐貫五百文位、七月朔日同断ノ直成、七月十日比ニハ廿三貫五百文ニ候得共、売買ハ無之候、納米一升ニ付七十文位市中売米無之、朝夕蕎麦抔ニテ相凌キ居候由、餓死イタシ候者モ有之哉ニ候得共、是程ニハ不承候事、誠ニツマラン世今如何可成ヤ、

六五五　藩内事情（道島家記）

伊地知壮之丞事、当五月比長崎表ヘ御用ニ付、差越居候、其御用ハ阿蘭陀ヘ致相談、口ノ永良部島（鹿児島郡）ニテ、米相払約束ニテ候由、上下町人□□□□□ヘ申付、六月初比出帆イタシ候由有之、何某ヲ壮之丞所ヘ召呼、当時御所帯御難渋ニ付、内実ノ候様（本ノマヽ）候事約談相成候間、一倍ノ御奉公トゾンシ渡海イタシ候様、右ニ付口外イタシ候テハ一大事ノ事ニ付、親子兄弟タリ共、口外致間敷候トノ事ノ由、右ニ付テハ此米何方ニテ売片付候ヤトノ事承候処、上海ニテ相払、利分ケイタシ手段ノ由、誠ニ軽忽ナル手段ニテ無之哉ト抱腹致候事、六月十日アル人ヨリ承候付、アマリ珍敷事ニ付記置也、他見無用（当時要路ノ人ヲ悪ムコト如斯）

六五六　内山伊右衛門書状略写（道嶋家記）

太樹公上洛ハ長州征伐之賦候処、于今為何事モ無之着京、当日参内ニテ、是非長州家ヘ切腹被申付候含被申上候得共、

御所向不相済、イツレ当時柄之事故、一統莫大之所置不相付テハ、弥増可及紛乱トノ

勅語迄モ有之、自侭ニ致下坂、是非々々吉川・森讃岐ヲ大坂迄被召呼賦ニテ、此内之仕形ニ応接相成、終ニ長門家ヘ切腹被申付含ニ候得共、右通天下区々之儀故、其儀モ無相調筋ニ相見得、尤応接役尾州ヘ被仰付候処、

尾州断申出、一橋へ被仰付候処是モ同断之由、就テハ薩州へ被仰付有之様ニ及承候、是モ御跡之程無覚束旨承及候、頓テ進発被達候節トハ見込致相違、今更引モナラス、行モナラス、滞坂之向ニ御座候、右通之沙汰ニ御座候得共、此節ハ何モ此御方様ヨリ御周旋無之様、何事モ難洩世評計ノ事候故、実不実不相分次第ニ御座候、

右之通丑六月廿八日日付ニテ、内山伊右衛門殿ヨリ到来、右ニ付孫子ノ評判ニ、浪華ハイツ相用申モノニ候哉、又尾州・一橋抔モ義理ノ立ヌ男共ニテ候、此段ノ人物ニテ夷人軽蔑致シヨリ候、七月十一日相記置也、

六五七　會薩離間策ニ就テ洛中市街へ内示書

方今天下ノ形勢致一変、諸所御守衛人数モ被差出、就中幕府ヨリ御取締モ厳重、御手ノ役、夫々御職掌モ有之候ヘ共、既ニ長州ニハ兵端ヲ開、追々諸藩出兵ニモ相成候ヘハ、此末外寇ノ患モ甚念遣敷、亦此機会ニ乗シ、野心アルモノイカ成隠謀可企モ難計、且遠国ニ相聞候ニハ、無勿体モ鳳輦ヲ奉移抔致流言候儀、寡君深ク患シ、過日為　御守衛、弊藩ヨリ聊人数上京被　仰付候処、狐疑ヲ生シ、却テ異心有之ナト、前後不勘弁ノ族申触ス由承之、心外之到ニ存候、且亦會藩ト間ヲ生シ、闘争ニ可及ナト流言甚敷、既ニ去ル廿三日夜、今出川・東廣小路辺ニハ、数十人小銃手鎗等携、頻ニ奔走ノ者有之、間ニハ一着籠小具足ニ身ヲ堅モノモ罷居候ヨシニテ、右辺暫時ハ大ニ騒動兼テ申触候、會・薩闘争可致ナト区々評判承及、以之外ナル次第笑止至極ニ候、抑弊藩ノ儀僻遠ノ野夫トハ為申、大切ナル

（当時専ラ風説）

朝廷ハ蒙　御守衛居候テ、於

輦毂本何之意恨有テ、私ニ干戈ヲ動シ、上ハ奉悩叡慮、中ハ　宮方　三公方以下ヲ奉驚、下ハ蒼生塗炭ノ苦ヲ不顧、山賊野盗ノ如キ理不尽之争ヲ可好哉、実以迷惑至極顰眉之至ニ存候、是全離間之策ヲ施シイハシムル所ニ欺シ、臆気ヲ生シ奔走ニ及タルニ候半欤、街説ニハ會之歴々ト唱候ヘトモ、左様ニテハ有之マシク、自然會藩ニ候ヘハ、決シテ下郎輩ノモノ、公私之差別且人物ノ軽重ヲ不弁、街説ヲ信用シ、私ニ屯集シタルカ、又ハ御職掌ニテ探索之筋有之、取押ノ人数ヲ

見誤候欤、イツレニセヨ、甚以気ノ毒ノ至ニ存候、夫々武門ノ上ニハ、名分条理トテ明定ナル経緯有之モノニテ、無筋儀ニ闘争ニヲヨヒ候儀ハ一切無之、判然ト道之居リ有之、往々御場所柄水闘ヲ企候テハ、末代迄武門ノ恥辱、且ハ御守衛之名目ニ不叶、其篇ノ儀明ニ令勘弁可然存候、此後之処譬何様申触ストモ、市中申合聊動揺致マシク、一時之人気ヲ静ント欲シテイフニ、何分ハ能々前後勘弁頼入候、余リ気之毒ユヘ、不得止事重役トモ依沙汰此段申達シ候事、

右通相達申候処、市中安心イタシタル趣ニ承申候、會ハ余程イタク存候半、臆病未練ノ形勢、可笑ニ絶タル事ニ御座候、御笑察可被下候事、

鳳輦ヲ催シテトハ、態トコラシメニ書入相成申候、

六五八　道嶋家記鈔

丑七月朔日比

長崎ヨリ金百万両（貳百万両トモ又洋銀トモ申事ニ候）位参リ候由、何事ニ左様ニ大金相届候ヤ承候処、ガラハカ銀子ニテ遣候由、定テ交易ノ品ヲ被遣候半トソンシ、出勤ノ事チント相咄候処、琉球其外三島見当之由、扨々驚入タル仕合ニ候、昔シ（島津光久）寛陽公ノ御代カ唐人ヨリ喜入灘ノ辺、二三町ノ間、銀弐百貫目ニカリ入度願出候処、其時ノ銀ハ只今ニテハ、廿両ニモ可相成、余程ノ御勝手ニテ御出シ被成候儀可宜相決候処、其内壱人不合点ニテ、不時ノ幸ヒアル時ハ、不時ノ災ヒ有モノ也トテ、終ニ其事不相済候由、誠卓識ノ至ト、万一ガラハ琉球ナト目ヲ掛テ終ニハ夷人ノ者トナルヘク、又ハ右島々ヲ引当ニ被遣候ハヽ、祖宗ハ勿論天子　公辺ニ如何言分アルヘキヤ、実ニ不義無道也、

六五九　中路権右衛門報告（大坂ノ風説）

六五九ノ一　津和野藩渡邊義右衛門、小倉表江罷出、旅宿江来訪談話

一問長藩諸隊之根元如何候哉、

答元来八家之閣老有之、諸士を分隊支配致候、是を先鋒隊ト唱ヘ候、

一問奇兵隊如何ニ候哉、

答三老臣父子を侮蔑、国政を醸シ候より、次第ニ綱紀破裂ニ至、彼尊王攘夷之機会、一藩過激之徒ヲ入撰、

諸浪士ヲ集候、是奇兵隊なり、其余ハ時ニ乗し、私ニ名を唱候而已ニ有之候、

一問内乱之根元如何ニ候哉、

答右は去ル亥年、於馬關攘夷之節、奇兵隊一時之過激にて炮戦、先鋒隊之右ニ出ル、依て三老臣其功を賞スル事尤重大、爰ニ至て先鋒隊三老臣を恨ムル事甚し、是内乱之根元也、此已後奇兵隊之建言逸々貫徹、依て益先鋒隊之意恨深ク相成候由、然ル処、去年七月暴動後、三老臣幽閉已来、国政一変、此機ニ乗し、先鋒隊陽ニ恭順を飾、陰ニ私怨を指含、正月六日より戦争起り候由、

一問不苦候ハヽ、元来尊藩之御着眼承り度、

答尊王攘夷之儀は長藩同意ニ候、

一問交情如何ニ候哉、

答城下より長廻り迄纔ニ十四丁、防長より米穀を運送、城下ニて捌シ候事、旧来依て自然縁を結ひ候者不少、各藩之嫌疑ニ触候事も、右等より生し可申欤、至て痛心仕候、

一問京師暴動前ニ藩中動揺は不致候哉、

答三老臣出京前其機ヲ察し、藩より差止之使者、家老ニ至迄七度ニ及候得共、遂ニ不用今日ニ至候仕合、無是非事ニ候、

一問彼藩内乱後、隊士御藩江入込候儀ハ無之哉、

答二月中旬長藩脱走之者拾弐人、領岸江着船上陸致候、右ヲ追討之人数凡六七十人、兵器・刀鎗ヲ携、於中途囲候、依て津和野(島根県)より一手差出シ、渡邊義右衛門及応接、其言兵器御携御出向ハ、津和野江御打入之恐(姦カ)ニ相成候得は、幕府江対し其侭ニハ不被差置、又御降伏中有間敷義ニ被存候条責問、此理ニ伏候哉、速ニ退キ候(後日十二人之士ハ、岩国へ通行之旨人々申候得共、終ニ領界ニて長藩へ引渡し申候、)

一問防長各藩探索入込候事も有之候哉、

答會藩、水・土ト偽通行有之候、偽藩ヲ怒り馬上ニて追掛候得共、遂ニ不及候、

一問当今内情御聞込如何ニ候哉、

三末・吉川・山口へ集会、今般之御長征蒙其罪ヲ候謂無之、然ル上は領界江罷出、申開キ不及時ハ防戦、興廃は天運ニ任ス之外無之候旨評決、爰ニ至諸隊無二念心ヲ決、依て当時平穏之趣ニ候、

六五九ノ一

一此度毛利(元蕃、徳山藩主)淡路(経幹、岩国藩主)・吉川監物御呼出し之儀、藝州公へ被仰

付、右之儀相請、藝州年寄役野村帯刀〔景雄〕、当七月二日廣嶋江帰着、同七日以使者被　仰出候間、大膳父子并徳山・岩國江申達相成候処、何レも奉畏候旨、当座之請仕候由、徳山ニも宗家之指図ニ寄、如何様とも進退可仕趣申答候由、右藝州侯より御差越ニ相成候使者、同十四日廣嶋へ帰着ニ相成候由、岩國・徳山夫々より萩城下迄、通行之道路別段相変候儀無之、勿論差支候筋も無之由、

一同十三日、岩國より以使者、此間被　仰渡候儀委細奉畏、御請罷出候段申出候由、同十五日岩國より罷帰り候由、

一長防国内之士民、激徒之暴政ニ困窮憂苦仕居候由、激徒共も萩より墓々敷擬も無之、日費難取続、依て海路江罷出、通船相防ケ候趣ニ付、召捕厳科ニ申付候、併又候御領下江罷出、不埒之儀可仕も難計、左候ヘハ御召捕之上、御国法ニ御取行被下度段、前件不届相働候者は、急度厳科被申付候得共、以後右様之儀可有之とも難計御座候間、一応此段申上置候由、申出候儀も有之趣、津田三郎兵衛より承り候、

一去月下旬欤当月上旬欤、時日相分り兼候得共、四国路之孤嶋へ、浮浪之徒罷出居候処、九州之商船通行致候処、右船へ六人計乗込、何方之船ニて、何等之品物積込有之哉之旨相糺候ニ付、九州路より大坂江積米致浪華ニて売払、此度右代り何々之品積込罷帰候段申答候処、右ニ間違無之哉再相尋候ニ付、相違無之旨申述候処、左様候ヘハ、売買帳面相見セ候様申述候付、帳面指出候処、一応見分金銀何百両可有之、我等頭分之者彼之嶋に有之候間、金子帳面持参、彼辺迄罷越候様申渡候付、無致方帳面相携、同道罷越候処、其後当人も不罷帰、金子は勿論相返し不申候由、右等之賊徒長防国内浮浪之輩ニ可有之、日費難支処より、右等之辺江出張、件之所業相働候者哉ト被相考候段、同人より承り申候、

一吉川監物其外正議之士ハ、此度被　仰出候儀、彼是申立候儀ハ有之間敷候得共、諸隊激徒共、是非彼是異論相立可申、左候得は国内談判折合兼候処より、其跡ニ相成、病気ニても申立、大坂表江罷出候儀、遅延ニ可相成も難計由推察相成候段、是又津田三郎兵衛より承り候侭書取申上候、尤前件激徒、余程困苦罷在候儀哉、海路江罷出、通船相妨ケ候様之所業致候、依て萩より

も、急度相制シ申度存意ニ有之候得共、何分諸隊之浮浪士、大膳父子軽蔑、以斬殺彼是相答候処より、其侭ニ相成居候由相聞候段、右同人より承り申候、着後津田三郎兵衛応接、対話之侭書取申上候、已上、

七月十六日　　大和田吟吾
　　小西信左衛門

六五九ノ三
筑前候御直達

此節　公武真之御和合被成御整候段は、　皇国永久御安全之御基本、無此上恐悦至極ニ奉存候、然ルニ近年諸国形勢ニ依り、浮浪流言離間之説不少、人心不和ニ乗し、分外之緒申立候者ヲ、　皇国之御為と相心得、同気相集り党ヲ結ひ、出会ニ至、或は密々他藩江通し主張し、又は流言ヲ以衆人ヲ驚怖為致之類、以之外ニ存候、我等不肖ニ候得共、御両君様御規則ヲ守、公平正大ヲ以、国政執行候ニ付、右様之輩於有之は、無用捨厳重ニ可申付間、此段相心得、組中入念教導可致事、

此両人咎メ退役之由黒田播磨
　　矢野相模
齊藤五三郎　衣非庫記　建部武彦　河合茂助

右咎メ被申付、此外士分十一人、以下合四十余人、尚追々党類出来可申と之事、

六五九ノ四
一大坂表ニても無異儀、長州よりも毛利・吉川上坂之儀も返答無之、依ては　御進発御足揃として、昨廿九日御先手勢紀州様御城之南手講武所ニて、御惣督初御勢揃御座候、凡此人数壱万五千、其外供人凡壱万人計、旗差物等誠ニ美々敷事ニ御座候（事実）

一昨年来大坂之町人長州江出入致候者、諸商人ニ至迄入牢仕候もの数多有之、其後宿下ケニて町預ケ等ニ相成候処、此節此者等追放又は遠嶋ニ相成、其外長州賄方等致候、

鴻喜　加治久　鴻市　高作　尚此外三四軒

追放之代り、一軒前ニ四千両・五千両ツヽ、御用金相掛り申候、

七月朔日

右書付伝写致候付、入御覧申候、已上、

中路権右衛門

内田仲之助様
吉井幸輔様

追々入御覧候書面ト齟齬之廉も相見候得共、前後混雑之次第と有之侭写取申上候、此段御賢察可被下候、

（島津忠承氏所蔵本にて校訂）

六六〇　丑七月朔日大御目附御廻文写

本多美濃守殿御渡候御書付写三通相達候間、被得其意無遅滞順達従止、有馬阿波守方江可被相返候、以上、

七月朔日　　大目付

松平陸奥守殿（伊達慶邦、仙台藩主）
上杉弾正大弼殿（斉憲、米沢藩主）
有馬中務大輔殿（慶頼、久留米藩主）
南部美濃守殿（利剛、盛岡藩主）
松平出羽守殿（直貴、松江藩主）
松平大和守殿（直克、川越藩主）
松平修理大夫殿（茂久、薩州藩主）
松平安藝守殿（浅野長訓、芸州藩主）
丹羽左京大夫殿（長国、二本松藩主）
松平右近将監殿（武聡、浜田藩主）
伊達遠江守殿（宗徳、宇和島藩主）
松平肥前守殿（鍋島直大、佐賀藩主）
南部遠江守殿（信順、八戸藩主）
亀井隠岐守殿（茲監、津和野藩主）
松平鉄丸殿（上野、矢田藩世子）
溝口主膳正殿（直溥、新発田藩主）
島津淡路守殿（忠寛、佐土原藩主）

右留守居

六六一　藩内物価（道嶋家記抄）

丑七月廿四日

一諸色沸騰ニテ、七月中旬方米直成相下、其外諸品モ引下候様被仰出候、同廿二日三日比、三盃入米蔵手形直成廿貫文、六月末方ハ弐拾壱貫五百文位ニテ候、壱俵付壱貫文位ノ直下リニ相見得候得共、現米売買如何可有之哉、外見迄ノ直下リニテモ可有之ヤト評判也、シカシ諸品類ハ少シハ直モ相下候ヤノ人気ニ候、

一豆腐一箱、兼テ七拾文位ノカ当分ハ三拾文ニテ候、

丑七月廿五日

交易品前之濱出帆相成候由、八月廿六日朝アル町人来リ噺也、何ヲ積候哉ト承候処、米・綿・種子類ニテ候由、当分モ三艘参リ居候由、舟ハ何ニテ候哉ト申候処、イサバ壱艘（五反帆）ニテ、過分之俵数ナラントノ事ニ候、俵ノ

上ヲ運候テ通候由ニ候、
但給仕人ノ女共七八人、其内高麗町・上之園辺ヨリ三人大方其辺ノ士株、其外惣テ大勢ノ者共、新町辺ヘ差越、鯵又ハ蕎麦切抔ノ催ニテ、是計ニテハヲサヒシカルヘシトテ、魚肉類台ニ乗セ持越候由、江戸辺ノ揚屋同前ニテ、此六七月ヨリ殊ノ外評判有之、高麗町ノヲモト重久高橋トイフモノカ、第一見ヨキ全盛ニテ、殊ノ外責ニ逢候抔ト、散々評判ニテ候、委細略ス、此七八人共儀ハ、前条交易場所ヘ揚屋出来ニテ被遣候由、此節之舟ニ乗セ付被遣候由申事ニテ候、夫此事ハ否ハ不相知候、女計今様之科人ニ相成候儀モ如何可有之候也、

七月廿六日七日比ヨリ八朔之時分

諸所ヨリ過分ニ米廻米ニ付、田舎々々ノ囲米解方有之候由、米蔵ノ米多キ事大粧ナルモノニ候由、前条桂大夫ノ一言能通候ヤ、

一当分モ三盃入壱俵廿貫文位、壱俵付三貫五百文程直下リニ相成候、シカレトモ諸色ハ全ク不相分候、

六六二　小倉滞在園田彦左衛門届書

此節御進発之御模様并長州動静向、先達て御届後承得候形行左ニ申上候、

一此節御進発ニ付ては、長征之儀は素より被仰出候通之事ニて、迅速御所置ニも可相成之処、是迄御猶予之御模様ニて、乍漸先月廿三日岩國・徳山御呼出之時宜ニ相成候段は、先達て御届申上置候通ニて、是迄紛乱之国々も有之、畢竟幕威相衰候処より、右次第ニも成立候付、先此節は大兵を以浪華江被為在御入城、御伐長を専ニ被仰出、其勢ひを以、異論之国々自然と以前之通為致帰服、其機会を以御征伐不相成候ては、防長は兎も角も人心不折合との御論決相成、御下坂之上各国之形勢、彦根・會藩又は長崎御奉行等江手配を以、只管御探索御聞取之廉々を以、御深密周旋之御手数も有之、右様之処より筑前・久留米は勿論、因備等之儀も兵威を恐伏いたし、国論追々転変いたし候処より、尚更幕威再興之向ニ成立、既ニ筑前御所置も相変、過激之徒御取扱ニ相及、右一巻ニ付爰元出張、塚原より筑藩岡村文右衛門と申者召呼、尋問之上逐一聞届、美濃守様江何そ御贔屓申ニては無之候へ共、此上は筑前一統穏和可成立旨、別て褒賞いたし候由、

一長防之儀専外夷と和親之取沙汰有之、此節御再討ニ付、荷担之訳も可有之哉、精々及探索候処、於馬關一昨年来及戦争候儀は、甚日本帝王より攘夷之御命令有之候処、諸藩一統致蜘蛛居、長州は武勇之国柄ニて、一旦命令通及戦争候へ共、援兵等も無之、難致敵対処より和睦いたし候義ニて、全私戦ニ無之との趣致申分候由、然処右命令之趣意丈は相分候へ共、通船江暴発之次第聞得かね、夫故未和親を結ひ候と申程之儀は無之、尤償銀等もいまた不差出候付、此節御征伐之上、長防之地面幕府江御引揚相成候ハヽ、江戸表ニて償銀可相受取、自然諸大名之領地ニも相成候ハヽ、其向より為差出候儀共当然之事ニて、勿論四百万トル程は不相受取候ては不聞済含之由、尤御伐長ニ付、加勢いたし可呉承候趣も有之候へ共、合従国一統より日本政府江致約定候訳柄ニて、長州論議通ニは難応段、英人於長崎相咄候由、

一岩國・徳山御呼出之儀、先達て申上置候通、大坂詰藝州役々江御達相成候節、御沙汰之趣申達候上は、十五日・廿日位は出立日限御猶予被仰付度願出、其通御聞済ニて、当月七日右両所江は勿論、萩表江も右次第為心得相達候由、然ニ右之趣奇兵隊共聞伝、則監物を山口城江呼寄せ、数多之兵勢を以取囲、退城も不相成、今以滞留之由、徳山之儀は、当春戦争之節、徳山御世子を激徒共より討取、家臣共別て憤激いたし候へ共、奇兵隊勢ひ甚敷、無是非黙止居候訳柄も有之、此節上坂いたし候ハヽ、前条旁之次第も申立、弥以激徒共身上差迫り候儀と申談、是以吉川同様取囲居候由取沙汰いたし、監物・淡路（元蕃、徳山藩主）両人之心中はいまた分かね候へ共、基過激之者共ニは、昨年武田渓（耕カ）雲齋一列御取扱之先例も案内有之、縦令大膳父子御寛大之御所置相成候ても、奇兵隊之分は、迚も死は難遁存詰居候由ニて、御征伐相成候節は、城を枕ニ必死力戦可致外無之、当五月廿七日決議いたし居候由相聞得、右次第ニ付ては徳山・岩國之儀迚も可差出情合無之、左候て長防之儀激徒之支配と申程ニ相成、大膳父子末家等も手ニ難及向ニ被伺申候、

一長州江以前より相求置候蒸気船江、過分之米積入、当正月比より英国江相渉り、於彼地ニ右米并船迄も都て売払、右代料を以蒸気大船壱艘買求、英人五人程雇入致帰帆、当分萩表ニて大砲等鋳造いたし候由、

一石州津和野境江当春より陸台場筑造いたし候由、就ては御征長ニ付防戦之用意と相見得候段、同藩渡邊儀右衛門より承届申候、

一筑藩退役禁錮之者共ニも、いまた御所置は勿論、喜富(ヵ)岡(ヵ)相手も分りかね、其外格別相変廉も無御座候、

右通ニて、いまた不慥成ケ条も御座候へ共、承得候形行ニて此段御届申上候、尚相変義は追々可申上候、

以上、

丑七月廿七日　　豊前小倉

滞在

園田彦左衛門

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

六六三　出兵御賞詞

禁闕御守衛ノ儀、兼テ被仰付候処、当節柄付猶又人数為差登、追々京着ノ趣被聞食、神妙ノ儀御満足思召候事、

右七月三十日夕方伝奏ヨリ御呼出ニ付、内田氏被罷出候処、本文被相渡候書付写ナリ、

六六四　大奥取締令（藩令近衛家付ケ女中へ）

一大奥へ被付置候御役々ハ不及申、末々ノ者ニ至リ惣テ被定置候通、堅固ニ相勤、御広敷御用人ハ大奥へモ罷通、老女列座ノ席ニ於テ御用可相達、御広敷番ノ頭御用ノ節ハ、大奥へ可罷通候、御用ノ訳ニヨリ御広敷横目同番御広敷与力・御広敷足軽モ可差通事、

一御広敷番ノ頭ノ儀、被定置候通、御番堅固ニ相勤、御用ノ訳ニ依テハ、表使御末御鎖口へ呼出可申置事、

一酒女戒致忘却間敷候、惣テ役所ノ風格不作法無之様、堅固ニ相守、雑談又ハ口論ケ間敷儀一切可為停止事、

一大奥御鎖口朝五時明ケ、暮六時可鎖候、大戸口ノ儀朝五ツ時明ケ、晩七時可鎖、御用有之節ハ可為格別、鍵ハ当番御広敷番ノ頭可致格護事、

一近辺出火其外及騒動儀有之節ハ、大奥へ被附置候面々早速馳参、大奥へ罷通、時宜次第無遠慮可相勤事、

但騒動ノ節、軽キ者紛レ入儀有之事候条、随分可気付事、

一遠方へ出火有之候テモ、風筋悪敷節ハ、無油断其心得可有之事、

一女中病気付、大奥へ医師差通候節ハ、御広敷横目・御広敷番相付罷通、軽キ病人ハ御末迄、重キ病人ハ部屋

へ差通病症可為見事、

一大奥火廻リノ儀、御申居御半下兼テ気ヲ付罷在、昼夜共部屋々々可相廻候、風立候節ハ猶以度々相廻、表使承届老女若年寄へ時々相達候様、堅可申付候、乍其上御広敷番ノ頭、同横目同番足軽召列、部屋々々料理所辺火ノ元昼一度ツヽ、夜四ツ比一度可見廻候、風立候節ハ右外見合ヲ以可見廻事、

一女中宿下リ御暇往来日数六日ツヽ、一年ニ一度可罷下候、宿下リノ節ハ、其段老女ヨリ相伺、御広敷御用人へ可相達候、且又差当無拠用事付、宿下リ申出候節ハ、老女委細承届、是亦伺ノ上御広敷御用人へ相達、老女印形ノ書付御広敷へ差出、御広敷番ノ頭可承届候、宿元逗留ノ儀ハ、用事ニ応シ日数相定、可願出候、尤御暇帳へ委細可記置、帰候節ハ不暮内罷上リ候様可申付候、且又下女ノ儀ハ、年中両度往来三日ツヽ暇可出事、

一女中親所へ使遣候儀、一ケ月可為一度、其外無拠用事有之節ハ、老女承届書付御広敷へ差出、御広敷番ノ頭承届可遣候、宿元ヨリ使又ハ音物等到来ノ節ハ、被定置候通、於御広敷相改可差通、女中ヨリ遣候節モ可為同断事、

一惣女中親兄弟見参朝五時ヨリ夕七時迄ノ間、親類書ニ申出置候外一切対面不相成、下女ノ儀モ、右ニ準シ老女承届御広敷番ノ頭へ相達候上、可為致対面事、

一被定置候通御広敷へ罷出候女中、御申居御半下其外一切出間敷事、

一女中諸道具外へ出候節ハ、老女印形ニテ御広敷番ノ頭見届之可差通、下女道具大戸番人相改可差通候、不審成儀於有之ハ、無用捨申出候様、大戸番人へ可申付出事、

一女中下女迄猥ニ寺参等イタシ候儀、可為停止候、無拠儀有之節ハ、其子細老女承届候上差遣、早々罷帰候様可申付事、

附乗物ニテモ差越候儀、只今ノ通リタルヘキ事、

一女中外方へ差越候節、依時宜為締方御広敷御用人、又ハ御広敷番ノ頭・同横目・同番、応女中人数御広敷御用人見計、右役々可差越事、

一客女中有之候テモ、部屋へ差通候儀令停止候、自然無拠儀ニ付、不致対面候テ不叶旨申出候節ハ、表使ヨリ老女へ得差図、御広敷御用人承届可差通事、

一女中ノ内、御奉公方致疎略不勤ノ体、或驕ケ間敷儀見

及候ハヽ、心底相改候様、無用捨申聞、其上不用者ハ老女ヨリ可申出事、

一女中於中間、口論又ハ雑言・空言・贔負・偏頗、其外不行跡無之様可相慎、就中　御前向ノ儀、曽テ候外不仕様兼テ可申付事、

一此節別段御吟味ノ訳有之、御改革被仰付、非常ノ御省略被召加、　御膳部等御膳所調被相替、都テ大奥調ニテ、御役場迄モ御減少被仰付、其外何篇御取縮向、分テ被仰渡候ニ付テハ、老女初惣女中右　御趣意ノ訳深汲受、就中請持ノ面々尚更厚心得、精々御費筋相省キ可致精勤事、

右条々大奥女中へ申渡置、堅固ニ相守聊緩疎有之間敷者也、

慶應元年丑七月　　伊勢(朱)(島津)

右近衛様御裏　貞君様御方御附ノ老女初惣女中御広敷向へ申渡、

六六五　毛利淡路吉川監物上坂ノ上旅宿云々達書

〔第四巻（慶応二年）に全文掲載〕

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

慶應元年自八月至九月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執掌史料〔紙数九八枚〕」の記載あり〕

目録

〔鹿児島物価道島家記抄〕
〔長州進発ニ付テ風説〕
〔落首〕
〔佛国ニ於テ薩藩家老石垣鋭之助商社締結約条書〕
〔道嶋家記抄藩内ノ事情〕
舊邦秘録
薩州為替金事件
紡織取扱人ホーム雇ヒ書之事
鉄製軍艦誂文証書
種々機械及ヒ各種ノ事業開発
西郷吉之助ヨリ大久保蓑田ヘ書翰
〔西郷吉之助ヨリ大久保蓑田ヘ書翰〕
〔征長解兵一件〕
長州人上京探聞届書
毛利父子島津ヘ書翰
舊邦秘録大小監方ヨリ宍戸備後之介并諸隊ヘ御糺問之条目
〔京都飛脚便〕
島津兄弟御褒賞
市來次十郎英佛蘭三国ノ軍艦攝海ヘ廻航ノ報
舊邦秘録藩内事情
道島家記抄京都ノ説
薩州家来ヨリ建白
舊邦秘録
〔鹿児島雑報〕
蓑田傳兵衛ヨリ大久保一蔵ヘ鹿児島ノ形況ヲ報ス
蓑田傳兵衛ヨリ西郷ヘ送ル書
樺山資紀書翰

舊邦秘録藩内軍賦

西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門ヘ書翰

六六六　鹿児島物価（道島家記抄）

八月九日

一米直成八月初比ヨリ少シ相下、壱石ニ付五貫文位モ相下リ、当分廻米過分ニ相見得候由、都之城米又ハ百姓共出来秋ニ付、払出ノ評判ニテ候事、八月九日記、

六六七　〔長州進発ニ付テ風説〕

将軍長州御進発ニ付、京都ヘ御登リノ節、江州膳所御城ニ御泊之所、家来其外党徒之人申合、地雷火ヲ伏セ置、御着之夜将軍焼討之手筈之所、御泊リ前之日致露顕、一味之者共都テ公義ヨリ御召捕ニテ、俄ニ大津御泊ニ相成、夫ヨリ京都二條之城ニ御着相成候、御危急御逃レ之段、イマタ御運強ク被為在候ト申風説之由、将軍大坂御城ヘ御着有之候処、長州御進発之御模様相分リ不申候得共、只今ニテハ大坂ニテ御所置被為計、長州迄ハ御出陣有之間敷段風説有之、如何御座候哉、御供方日々登城陣羽織騎馬又ハ乗切ニテ、市中モ浮カ浮カト歩行難成、御陣場之心地御座候、然シ御旗本ノ事ハ、長州御進発至テ恐惶候、大坂限リニテ御取止被為在カシト、只々祈リ被居候、端兵ノ評判ニ有之候、

六六八　〔落首〕

八月十日

何者カ落首

慶應ト年号かへて御進発

逆からよめはおけ（応慶）といふなり

天下逆からよむへしニ、詳し有之かてんと申事也、

右之通丑八月十日吹田正吉ヨリカリ入写置也、

六六九　佛国ニ於テ薩藩家老石垣鋭之助商社締結約条書

薩州・大隅・日向三ケ国之　太守兼琉球国之領主島津家之全権石垣鋭之助、蒸気艦之指揮役關研蔵、出役兼英佛ノ訳官高木政二・白川建二郎、是ニモンフラン列会（Comte des Cantons de Montbland）シテ、貿易ヲ欲シ国ヲ開クノ為ニ、左ノケ条ヲ談決スル也、

第一ケ条

欧羅巴人ノ内商社シテ、薩摩ノ領分ニアル金・銅・鉄・

鉛等ノ山ヲ開キ、或ハ種々ノ鉄工・武器ヲ製造シ、又ハ絹・綿・茶・蠟・煙草等ヲ製スル諸機関ヲ組立、有益ナル欧羅巴之産物ヲ入輸シ、国ヲ富スニ要用ナル機関ヲ開クノ商社ヲ立ンカ為、モンフラン会盟シテ是ヲ助テ、以テ其益分ヲ得ルノ算ヲ以テ配分スル也、

第二ケ条

モンフラン是ニ会盟シテ、万事ノ世話ヲ成シテ諸件ヲ可頼(勤カ)也、

第三ケ条

利潤ハ商社之出重高(金カ)ニ応シ配分シ、損アル時モ又夫ニ可準シ、

第四ケ条

諸商社ヲ開キテ後、益分元金ノ二倍ヲ得シ時ハ、其機械薩摩ニ属スル也、

第五ケ条

薩摩領内ニ造営スル所諸製造場毎ニ、壱両人之勘定役ヲ置、諸出入厳重ニ取納ヘシ、

第六ケ条

於薩摩軍艦大砲、其外要用ノ諸件ヲ誂候節之所置、又ハ貿易ノ為設ケル処之規定ニ至ル迄、皆モンフランニ寄托スヘシ、

第七ケ条

琉球国之内ナハ(那覇)・運天、大島之内名瀬、此三港ヲ手始トシテ開キ、追々商社成ルニ随ヒ曠大ナル所置モアルヘシ、

第八ケ条

此商社ヲ組立シ上ハ、互ニ他之商社ヲ組立ヘカラス、

第九ケ条

宗門旨条其国ニ用ル処ノ宗旨アレハ、我カ宗旨ヲ主張シテ弘ルヘカラス、又アヘンノ輸入ヲ禁スル也、

第十ケ条

千八百六十七年、於巴理斯展観所、国産良好之諸品出サン事ヲ欲セハ、商社ニ談シ、又是ヲモンフランニ寄托スヘシ、

〔付箋〕「(後文欠失)」

第十一ケ条

此約条書ハ、日本及英佛三ケ国之語ヲ以認メ、互ニ取替可致候、勿論同文同意也トイヘトモ、英文ニ可基也、

第十二ケ条

右約条書之同案弐通ヲ相認メ、証文之目前ニヲヒテ商社会盟印鑑シテ、互ニ取替置モノ也、

於ブロスール(ブルッセル)千八百六十五年第十月十五日

日本慶應元年乙丑八月二十六日

石垣鋭之介〔新納久脩〕〇印
關研蔵〔五代友厚〕

今般家臣家老全権石垣鋭之助、蒸気船ノ指揮役關研蔵、欧羅巴周歴中ハ種々懇切ヲ請、国家開成ノ大策教示尽力給候段、逐一承達イタシ候、就テハ我等壱人ノ良幸ニアラス、国民一般ノ大幸不過之忝存候、則内条約イタシ置候通、都テ無相違為可取行、当年八九月(九十カ)比使節可差出候条、此末不相変御援助給候様偏ニ希候、於事業ハ家老中連判之証書ヲ以可申述也、

松平修理大夫

年号月日　　御書判

コント・デ・モンブラン江

六七〇　土持平八廣島ヨリ報告

毛利淡路・吉川監物御用召ニ付、御書取写相添、且長防之情実等、先達て御届申上置通ニて、藝州侯より徳山・岩國等江御使者被差立置候処、往復之使説萩様并右両藩家老等追々廣島江致参着、応接振旁承合候形行左ニ申上候、

一徳山家老福間式部・岩國家老吉川采女・用人長新兵衛等相揃〔銘々手廻リ、主従四拾人〕、去九日廣島江致着、藝州侯中老野村帯刀江取合使者申出之趣、此節御用召ニ付無異儀登坂不仕候て相済間敷、不軽訳柄ニて段々商議相約候処、昨冬既御伐長之期期ニ臨、惣督尾張老公江謝罪降伏仕候処より、公平之御所置を以御解兵相成候後、重て歎願書被差上候得共、夫成是迄為何御命令も無之故、大膳様御父子は勿論、諸士末々ニ至迄、半服安堵之思ひ難被致折柄、御再討被仰発候哉ニ仄ニ致伝承、諸隊殆驚動紛々之人気成立候を、専監物・淡路等致尽力、折角鎮撫方仕候場合両主御用召之旨被仰達、段々衆評ニ被及候処、上坂ニ付ては家来多人数不召列、藝藩より護衛可致との御達振ニ付、疑惑之廉も有之、尤少人数ニて登坂可致ニおひては、本藩諸隊等不得止脱走ニてもいたし、附添参度儀共様々及異論、不容易機会上坂仕、追々京攝江出浮、何様之変動到来之程も難計、乍此上御難題醸出候ては、大膳様ニは兎も角も天幕江奉対恐入御重大之事件ニて、

皇国之御為不宜、且は去冬御解兵ニ付ては、就中尾州老公之御高恩を受られ、其外諸大藩等江対しても、一言

申分無之、至情内外痛心ニ堪入、殊ニ当分監物・淡路共持病差発、少々煩付彼是懸念ニ有之、追て快方ニ向候欤、将諸隊人気折合付候程合ニ依ては上坂可致哉、方今之時機ニは迚も登坂難相整候、旁之微意御観察を以、此涯延引被為聞済候様、且昨年来幾度も歎願言上仕置候趣、猶亦宜敷御周旋被成下度、左候て上坂延引仕候ニ就ても、聊異心別儀共無御座候間、是亦不悪候様御聞取、其旨被仰上被下度、歎願之趣致弁解候処、帯刀相答候ニは、右形行具ニ安藝守様達御聴、其上何れ之筋被仰進ニても可有之申諭其場曳取、藝侯ニも段々御評議相成、中四日程滞留致し、追々談判ニ為及由候得共、其節々之議論一々相分不申候得共、右願意藝藩より返答難被致候処、使者より強て申含、無拠承引相成候形ニて、同十三日廣島曳取罷帰候、然処同日暮時分宍戸備前（親基 主従供七十人）同所江致着、右帯刀取合応接之趣、徳山・岩國御用召一件ニ付、安藝守様江御拝謁奉願、建言仕度致参上、併何そ大膳様より之御使者と申場ニては無之候得共、御末家并御家老中より御歎願有之候段申出、右帯刀則答難致、一応伺済之上復命可致申約置、是亦御評議有之候形ニて、三四日程御沙汰相待候処、申出通御許容ニて、同十五日備前致登城、三之丸ニて紀伊守様江御拝謁被仰付、言上之趣昨年来一方ならす御懇情ニ預奉り恐入罷在、然処又候此節末家之者御用召ニ付、御叮嚀被仰進候儀共重畳之次第言語ニ絶し候、然共此度御用召ニ付ては、直様上坂可仕様、猶本家より可申勧儀、的当之訳柄ニ候得共、昨年変動曳続、御国政向段々の入もつれ有之、当時第一監物・淡路等要路ニ関係致し、繁雑中登坂難被致との意味合、岩國等使者口上不相替、偏ニ藝州侯より御周旋被下度旨、紀伊守様江建言仕候由、御同人様難被黙止、御承諾被為在、左候て備前江御料理等被下、御叮嚀成御会釈ニて、同十六日廣島表曳取罷帰申候、

一岩國・徳山等之使者差越候前廉、去七日長藩梅田三郎・野村安之介等廣島江参着、当所政府掛植田乙次郎江面会談判之趣、監物・淡路御用召ニ付、本藩諸隊共評議相約候処、

皇国之御為不被捨置趣意柄有之、依て大膳様は勿論、御重役方御存知無之候へ共、要路之廟議ニ不抱有志之輩申合候事柄と、国挙て罷出申上筈之処、御領内江多人数入込候儀、如何敷奉存候故、我々共束て安藝守様

江御拝謁奉願建言之趣有之候間、其段御取持可給旨申出候処、右乙次郎相答候ニは、当分大膳様之御身上ニおひては、未御謹慎中致伝承候ニ付、公武江御伺不致、他藩江軽々敷御面謁相済申間敷旨、程能申断候処、然は迚白封之歎願書一通、安藝守様江取次可呉旨、無拠申ニ付請取、御同人様江差上、御承済之上右安之介・三郎当所曳取帰国仕候由、

但右之歎願書紀伊守様被成御請取、彼書取江御副札被差添、閣老衆江御届相成候賦ニて、未幕役江不為遂御披露内ニは、他藩江洩し難く、近々野村帯刀右御届ニ登坂仕候付、同人着坂之日限ニ応し、彼之写取可差遣旨、藝藩より無余儀承届候、依之此節迄は手ニ入不申候間、追て写取差上候様可仕候、

一右ニ付長国之情実等、猶亦承合申候処、藝国江説客使口上之趣、前段之通ニて、昨年御伐長之儀は、名義ニ依て無余儀も致降伏候得共、此節体御再討ニ付ては、無名之出軍ニて充分之申訳有之との国論ニて、諸隊一致憤怒掠上之有姿ニて、専必戦之致用意、且又京攝之動静、此表長国辺江布告之趣ニは、先月初加州・土州候ニも、大坂御曳払事情確証相分不申候得共、江府横濱夷館等江は、仙臺之藩中致暴動候儀共相聞得、長藩却て勢を得候形ニて、迚も御出軍難整れ致着眼候との風説も御座候、然処廣島江は追々幕府より間諜之者周旋方ニて相見得、当分彦根藩小西信左衛門其外一両人滞留、藝藩江幕威を説示し候故、頗因循之藝藩彼是恐惑之処よりして、信義之国論約兼、順を両端ニ計り候形ニて、前件長防之使者江応対ニ付、往復及遅滞、重大之事柄迅速之計難被尽哉と、長人ニも取沙汰致し候由、其通相伺れ申候、殊ニ此節長藩家老より紀伊守様江建言之歎願書、野村帯刀持参、御届之為登坂之賦ニ候処、格別急キ之儀共不相見得、漸々昨今乗船より出帆相成候由、

右通御座候、以上、

藝州
廣島滞在
土持佐平太

八月廿日

奥掛
書役衆

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

六七一　道嶋家記抄（藩内ノ事情）

八月廿五日

大夫桂殿（右衛門）、二丸公（久光公）へ今様諸色沸騰、米直成殊之外高料ニテ、市中全ク売米等モ無之、既ニ領地ニモ可及形勢ニ候間、御囲米解方イタシ、御救米差出可申トノ旨、細々被申上候処（決テ此上ハ段々ノ深義有之）、カモフナト被申候処、其時大夫ズツト席ヲ相進、加判役ヲモ被仰付モノニ、カモウナト被仰付候、何様之御心得ニテ被仰候也（ヤ）、其御心得不承候迄ハ、此処ハ相下マシク旨被申候由、当分出勤モ無之ヤト申事ニテ候（反対派中傷説）

但七月廿五日承リ、三日跡ニテ候由、右之事ニテ候ヤ、不日否如何、イヨ〳〵ノ事ナラハ頼母敷候ヘトモ、是ヨリモ異国交易之事不被申ハ、如何被相考候ヤ、心術木藤方ニテ候、

六七二　薩州為替金事件（赤松大三郎書翰参看）

六七二ノ一

一薩州士官為替金儀、支那シヤルゲーンメツテイソン商社ヘ相談ニ及候処、右士官近々帰国候付、其以前代払之儀、所置充分不相整候テハ不相叶候付、大粗之銀代書載イタシ置、

一メレチエストンイート商社木綿機械

代金一万封度

一ベルミンクハムシヲルト商社小銃短銃

代銀八千三百五十封度

一此内御談示申置候、彼ハ不買入候、

一小銃玉機関

代金四百五拾封度

右船積語文（証カ）ハコント・デ・モンブランヨリ可差送候、

一諸品八百二十封度位

但

小品ニ至テハ、逐一細々続不相分候ヘトモ、本文之事ニ過申候（衍カ）間敷候、

右品々代価書不相請取、船積之都合ニ至ル以前ニ慥成代銀高相分可申、

右為替銀始末候付、メツチイソン商社ヘ差送候書付、

乙（マヽ）之扣

（第十ケ条以下番号六七〇と同文により削除）

六七二ノ二（朱）

再約「（仝上ニ就テ）」

於巴理斯千八百六十六年第二月

我日本慶應元年乙丑十二月比義国王商社再約条書

和・英・佛三通之内
一於フロスル(ブリュッセル)チ千八百六十五年第十月十五日、ヱトワルト・テングレル及ヒアルソル・レニース両君ノ目前ニ於テ、契約セシケ条ニ左之変革及増補之約ヲ成ス、

第一ケ条

商社建立之為開タル諸港及諸市街ニ於テ、外国人民貿易ヲナスノ望アラハ、其政府ヨリ公然ニ願ヲナシ、規則ニ随フトキハ免スヘシ、

第二ケ条

千八百六十五年第十月十五日、契約十二ケ条ヲ約シタリ、然ルニ第三ケ条・第四ケ条ヲ変シテ、次之ケ条ヲ加ル也、

第三ケ条

薩隅日三州之国主・琉球国領主使之為メ、前広コント・デ・モンフランニ命シテ、商社誓盟之儀ヲ専任スルノ契約ヲナシ、亦コント・デ・モンフラン及社中之出銀ハ、上海普通之利金及口銭ヲ以テ、右契約之原主トナシ、同人取扱ヘシ、

第四ケ条

此四ケ条之加補契約ヲ三通ニ取認、同文同意ナリトイヘトモ英文ニ可基、為其巴理斯ニ於テ、千八百六十六年第二月三日同社中名判スルモノナリ、

大日本慶應元年乙丑十二月十九日

石垣鋭之助
關　研　蔵

六七二ノ三　仝上ニ就テ

琉球国領主ノ官吏ハ、コント・デ・モンブランニ若干ノ蚕卵ヲ送ルヘシ、コント・デ・モンブランハ、右運送之入費ヲ払ヒ、引受人ニ寄託シテ、於欧羅巴売捌也、又利益之半高ハ諸新用トシ、半高ヲ以フリスノ命ニ随ヒ、諸件之要務ヲナスヘシ、

千八百六十六年第十月三日、巴理斯ニヲイテ、契約書三通ヲ相認メ、替取置候モノナリ、

日本慶應元年乙丑十一月十九日

石垣鋭之助(朱)印「新納刑部」
關　研　蔵印「五代才介」

六七三　紡織取扱人ホーム雇ヒ書之事

薩摩之

太守要用之為メ、木綿紡織機関御領地之内御取建ニ付、拙者右司長タル旨承諾致候、壱ケ年洋銀五千枚御宛行被下候段難有仕合、就テハ千八百六十六年第一月一日ヨリ、右高一ケ年四度ニ御割渡シ被下度、左候テ居住所之儀、適宜之場所御設ケ被下候ハヽ、家財食物ハ自分失脚可仕候、此約条ハ千八百六十七年第十二月卅一日迄ニシテ終日也、其後ハ双方之和談ニ寄テ、壱ケ年ツヽ之約条ヲ改ムヘシ、故ニ双方書札取替置候モノ也、就テハ諸機関成就迄ハ、英国ヘ罷在、右機関ニ関ル諸件ヲ点検イタシ置候テ、機関組立之期ニ至リ要用トナルヘシ、随テ英国滞留中、前文之宛行過分ニ被思召候ハヽ、御減少相成候テモ故障無之候、此儀ハ貴下之決断ヘ任スヘシ、然ル時ハ日本国ヘ出航之日ヲ以、右約条ヲ取行之日限トスヘシ、拝具、

イー・ホーム

〔東京大学所蔵本にて校訂〕

〔朱〕「前文乱ス」右ハ比義国ヘ諸機関ヲ開キ、或ハ貿易ヲ成スノ商社ヲ営ンカ為メ、先達テ大粗之内条約取替置候ヘトモ、緩急之別不詳候ニ付、此節右之通順究置候、左候テ相洩候儀モ、追々商社中ヘ御談判可申述モノナリ、

日本慶應元年乙丑十二月二十二日、西暦千八百六十六年第二月六日

薩州欧行係書役

關　研　蔵〔朱〕「五代才助」

右同全権

石垣鋭之助〔朱〕「新納刑部」

コント・デ・モンフラン殿

六七四　鉄製軍艦誂文証書

六七四ノ一

一船積千八百五十頓

一蒸気馬力三百五拾疋

一長サ弐百弐十尺

一幅四十弐尺

一鉄板厚サ水平線緊要之処、四インチ半、夫ヨリ三インチ迄

一樫板厚サ九インチ位

一円形砲台弐ケ所

但

一ケ所大砲弐門ツヽ、

一大砲四挺

但
三百封度口込之アルムストロンクニシテ、玉薬ハ
実弾・着発弾其外欧羅巴普通之規則相添、
一帆柱ハ、船長コールス之発明ニシテ、船塀迄モ起伏スル趣向ヲ要ス、
右ハ米利堅戦争中、南方ヨリ英国ホルキンヘット造船家ヘ誂文イタシ、成就之上既ニ可差送候処、英政府ヨリ差止メ、当分英国之軍艦タリシ船名ワイウエルンヲ、我朝適宜之軍艦ト相考ヘ、至極懇望ニ付、此艦ヲ以取調候、併船之大小ニ依テ、代金之多小ハ相関候事候間、至当之御改正給候儀ハ、委任イタシ置候、左候テ代払之儀ハ、比義商社盟誓之上、相当之利足ヲ以、五ケ年府、品物又ハ現金ヲ以可相払候付、精ク速ニ製造致シ候様御誂文給度、為後証如件、
日本慶應元年乙丑十二月二十二日
西暦千八百六十六年第二月七日
關　研　蔵五代才助
石垣鋭之助新納刑部
コント・テ・白山殿

六七四ノ二
結約書
薩隅日三兼琉球国太守家老全権石垣鋭之助、海軍指揮役關研蔵同代トシテ、コント・テ・モンフランヘ託シ、別紙軍艦誂文ヲ約シ、代払之儀ハ専任ス、又別紙諸機関ヲ開ク商法ヲ営ン事ヲ、同人ヘ委任シテ取扱シムルモノナリ、
日本慶應元年乙丑十二月二十二日
西暦千八百六十六年第二月七日
石垣鋭之助
關　研　蔵

六七五　種々機械及ヒ各種ノ事業開発セムトス

蚕卵約条書一通、千八百六十五年第十月十五日、琉球国之領主トコント・テ・モンブラン契約シ、ケ条之内トシテ、次之ケ条ハ注意スヘシ、
琉球国領主之官吏ハ、コント・テ・モンフランニ、若干之蚕英商コロウル商社ト五ケ年之約条ヲ以テ、当分盛ンニ取行居候蘭商ホーウトイント年限ナク、同様之条約ヲ結候趣粗申送候ヘトモ、比義国商社会盟之上ハ、追テ変革之所置アルヘシ、

右七ケ条ハ最要用有益アル件ニシテ、拙者トモ帰朝之〔上脱カ〕ハ、速ニ使節差立、商社盟誓可致候、依之弥何月ニ使節可差出段、御掛合申趣候、商社中最早盟誓相成候事ニ相心得、前件七ケ条之機関ハ早々誂文製作御取掛約度候、

一動物館

右ハ我朝之国民最珍重スル事ニシテ、財ヲ不厭見物スヘシ、依之大坂之地ニ相開ク時ハ、我朝之中央ニシテ、見物之貴賤極テ多ク、曠大之有益アリ、

一川堀蒸気機関

右ハ我朝大坂之地ハ余多之流川有之、日々数百艘之商船出入ス、然ルニ川下流砂シテ漸浅シ、故ニ大坂街中之商民曠大之金ヲ出シ、流砂ヲ堀テ出入之商船ヲ弁ナラシム、故ニ此機関ヲ用ヒ、容易流砂ヲ堀、年々商民之出金ヲ取ル時ハ、曠大之有益ハ勿論、第一国民之大幸トナルヘシ〔朱〕「(淀川ニ仕用ノ見込)」

一蒸気飛脚船外車大形一艘

右ハ我朝九州・四国・中国ヨリ大坂ヘ往来スルモノ日々数百人、是迄我朝ノ少キ風帆船ヨリ往来スル事ニシテ、依順季此英国里法弐百五六十里之内海ヲ、十四五日之日数ヲ費シ、甚以不弁ナリ、依之蒸気船飛脚船ヲ以急便スルトキハ、国民之良幸ハ勿論、曠大之有益ナリ、

一大坂ヨリ京師迄之蒸気車及テレカラフ

但

英国里法凡弐十五里之間、平地ニシテ、間々小橋ヲ渡ス而已、テレカラフハ新発明之文字打出候機関ヲ要ス、

右大坂ヨリ京師迄之近路ハ、流川在テ小キ川船ヲ以テ往来ヲ弁ス、京地及伏見之人口凡百七八十万、日用之万物悉ク大坂ヨリシテ送リ弁ス、則佛国之ルアーブル(Havre)・マルセーユ(Marseille)ノ如シ、其他京師ハ我朝之中央ニシテ、東西南北之遊客常ニ多ク、殊ニ近来諸大名江戸ニ不行、京師ニ集会スル故ニ、追々繁栄驚クニ堪タリ、毎々往来スル処ノ貴賤一万ニ不下、蒸気車ヲ開クトキハ地代等下直ニシテ、無数之出金ニ不及、曠大ノ有益ハ勿論、普ク国民ノ矇昧ヲ照ス良策タルヘシ、詳細ハ帰朝ノ上取調可申述也、

右四ケ条ハ、我朝形勢次第、可成速ニ相開キ申度候、

一造船局
一小銃製作局
一大砲製作局
〔朱〕「(鳥ノ誤)」
一米着機関
一鋸機関
一ブランデ製局〔朱〕「(フランネル乎)」
右六ケ条ハ、来年ヨリ先キ可成速ニ相開度候、
一鉄製局
一金　山
一銅　山
一錫　山
一石炭山
一鉛　山
右六ケ条ハ商社盟誓之上、土質学之達人者ヲ相雇ヒ、国中普ク点験シテ、其場所ニ応シ至当之業ヲ可相開候、
比義商社建立可相開機械取調出
一砂糖製法蒸気機関五ツ位
右ハ琉球属島之内ニ組立、既ニ製法相開居候同様之機関ニシテ、帰朝之上絵図可差送候〔朱〕「(大島各所ニ建設シタルモノ)」
一紙製蒸気機関
右ハ当時欧羅巴専要スル処之機関相開度候、
一木綿紡織機関
右ハ此節於英国誂文イタシ、既ニ四ケ月後ハ成就、我朝へ積送ル筈ナリ、依之比義商社盟誓之上ハ、英商人ヨリ差出候勘定書ヲ以、商社中へ可差出候間、各機関代ハ追テ商社中ヨリ御出銀可給候、
一麻及真綿紡績機関
右之内紡織ハ、英国ハリハツクス・ヘーレン名人之商社ニ有之候同様之機関ニシテ、麻及真綿ヲ随意ニ績候弁別〔利カ〕之機関ナリ、織機ハ帰朝之上見本可差送候付、御吟味給度候、
一修船機関
右ハ鉄箱ヲ水底ニ沈メ、船適宜ニ相居候節、水底鉄箱ノ水ポンプヲ以テ抜取、船浮上リ候時、船底ヲ塗替修覆スルナリ、尤機関ヲ相開クトキハ、我朝之蒸気船凡三十五六艘アリトイヘトモ、一ケ所モ修船場ナシ、故ニ年月〔中カ〕無休閑修船スルナレハ、曠大之利益アリ、

一蠟製法機関

右ハ我薩隅之産蠟年々英斤七十万封度余アリ、故ニ此機関ヲ開クトキハ、曠大之有益アリ、

一日本国中之物産何品ヲ不論、貿易ニ益アル諸品ヲ買円、商社中ヘ相渡シ、損益ハ分明之算ヲ以テ、弐分スベシ、此趣法ハ我朝長崎ニ於テ、船都合ニ寄リ機関出来候テモ、船積出来兼候モ難計、然ルトキハ代金書ニ基キ代払被成度、代銀三度ニ割渡有之候、尤モ、初之二度ハ九十日目ニシテ、於長崎可入付候、終リ一度ハ六十日目ニシテ可相払事、

右等ハ所置并ニ談判能々了解有之、後日之為メ薩州士官名判相添候、又々追々申入候通、ガラハ商社五アロ（マ）銭（ニ）之儀、代価書付一同書載可有之候付、御払可給候、為換金相場之儀ハ、代銀払之時ヲ以テ相究可申、其他万端是迄之通也、

石垣鋭之助印

メッテソン商社へ

六七六　西郷吉之助ヨリ大久保蓑田ヘ書翰

御両殿益（様脱カ）御機嫌能被遊　御座、恐悦之御義奉存候、次ニ御揃御壮健御勤務之筈、珍重奉存候、陳ハ風説書并攻懸之書面諸藩江相廻候由、如何様幕府ニて内評共有之候て之事哉、方々江流布いたし候向ニ被相聞申候、つまらぬ事ハ触廻候得共、頓と評議之模様相分不申由ニ御座候、当年中も大坂江滞在相成候ハヽ、内の変を醸し候半欤、膳所之一挙ニさへ幕人数多相加候趣と相見得候へハ、内輪之混雑推て知られ候事ニ御座候、段々承候へハ、幕人諸浪士と結合候者過分之由、江戸城を二篇焼候も、幕人内応之者より火を挙候説ニ御座候、幕中之有志ハ悉く被退、其上浪士抔と内を謀候位之事ニ候得は、自たをれ候義無疑事ニ御座候、此度戦も不出来所置も不立候て、引払相成候ハヽ、迚も諸侯江令する事も何も相叶申間敷、第一策を失ひ候義ハ、外夷余程幕政之邪なるを悪ミ、人心相離候向ニて、益勢ひを失ひ候ものと被相聞申候、夫故異人江機嫌取ニ、兵庫開港を始め候欤も不被計候、取々之風説故、突留たる説一向承得不申候、此旨奉得御意候、恐惶謹言、

西郷吉之助

八月廿八日

大久保一蔵様

蓑田傳兵衛様

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

六七七　〔西郷吉之助ヨリ大久保蓑田へ書翰〕

先日定式飛脚被差立候以後、大坂も些動立候形勢ニ御座候、長州よりハ再征被　仰出候処江罷出候義不相合、昨年之御所置振ニ付て之義ニ候ハヽ、是非罷出候て如何様共御沙汰振可承事と之趣、藝藩江為申入様子ニ御座候得共、藝ニて余程秘事ニいたし候向と、被相伺申候、是以幕府より沙汰いたし候事欤と被相察申候、先ツ長州ニてハ、大坂まて不出掛向と相見得申候、畢竟威し掛欤ハ不知候へ共、来月廿七日限不罷出候ハヽ、断然之御所置可相成との趣ニて、大坂ニおひて、諸藩江相達口達を以、

御国許江も人数手当いたし置候様、阿部公用人より相達候由申来候付、出勢之義ハ国家之大事件ニ候得は、可討之罪を鳴し、屹と御書付を以、御達不相成候てハ、御国元江懸合出来不申旨、申取候様申遣候処、書面江ハ書記かたく候段返答相成、再押掛候義も出来不申、夫形頽込候位ニ御座候間、幕命を以相募候義ハ迚も出来申間敷、如何ニもして、

朝命を申下シ候手筋も難計候得共、名ニ立候廉、益なき様ニ罷成候故、期限を誤候事而已を申立候外ハ、有之間敷哉、第一条理ヲ失ひ候上、勢ひ迄も失ひ候てハ、迚も軍ハ出来申間敷哉と、被相察候得共、断然之所置を付るとの事候得は、無暗ニ戦を仕掛候欤も、不被計事ニ御座候、戦を始候ても、益々尾ハとれ申間敷事ニ御座候、誠ニ下手な事ニハ、関東ニてハ、長州家之墓ヲ悉発候由、大坂(虚説)ニて兵を屯シ置、長州江ハ弥増薬を与候と申者、其上人情不可忍之墓発をいたし、始終下手か先廻ニ相成候次第、可笑事ニ御座候、右様苛酷之手廻か先達候故、筑前ハ崩立居候付、五卿辺江手を掛候策有之間敷ものとも不被思候付、一隊か二隊かハ、警衛として御差出相成候てハ、宜敷ハ有御座間敷、若哉欺謀を以捕取候てハ、

御国之信義ニ相拘事候間、不容易場合ニ御座候、譬右之策有之候共、

御国元より御人数被差出候へハ、決て手出しハ相成申間敷事と奉存候、筑前之情実、奈良原幸五郎より得と承候処、中々六ケ敷勢ひニて候得は、此機会を以、俗論を挫候場も可有之事と奉存候付、得と御吟味之上、

此図を不抜之御計策奉願候、いつれ此度之一挙ニて、公卿方之義如何様とか捌可申候付、決て長ひ事ニハ有御座間敷候、御人数被差出義ニ御座候ハヽ、慥成人不被差出候てハ、相済申間敷義と奉存候、

右之通大意申上候、大坂ニて御用人方より相達候書面等ハ、御家老方より御遣相成候付、省略仕候、以上、

西郷吉之助

八月廿八日

蓑田傳兵衛様

大久保一蔵様

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

六七八〔征長解兵一件〕

戸田大和守様〔忠至、高徳藩主〕

高家

中條左衛門督様

京都町奉行

大久保主膳正殿

右三人へ板倉閣老談合、解兵論密々被相計、〔斉敬、左大臣〕二條公へ被仰上候得共、去ル四日之　朝議ニテ事ナラス、乍然越老公幸御在京ニ付、同公へ頻ニ説込、老公素ヨリ右之御所存故、橋府へ屢御直参、且御封中ニテモ被仰進候得共、四日已前ハ一点モ御請付無之、然処小倉表ノ変遷、細川家始藩々悉解兵ヲ聞、初テ真説相聞エ愕然歎息、橋モ頻ニ解兵ノ議論ニ伏シ、越老公ノ御出ヲ被願、段々御深切ノ議論ヲ不〔肯カ〕旨儀ヲ大悔、偏ニ尽力ヲ御頼、弥解兵シ論定ニ到リ、去ル十四日條公ヘ参殿、御詫被仰上、漸々御納得罷成、夫ヨリ〔朝彦親王〕加陽宮〔賀〕ヘ同断御上リ説込、會・桑ヨリ何様申上候テモ、決テ御請付被下トノ事迄被仰上、翌々十六日再　朝議ト罷成、其荒増〔晃親王〕山階宮ヨリ承知仕候形行左ノ通、

一十六日例之　宮公卿方、武辺ヨリ橋府・板倉侯参　内、小御所へ　出御、公卿御列座橋被召出候処、此内ノ議論ヲ申上、徳川氏実ニ統御ノ道ヲ失シ、諸侯命ニ不従、大ニ人望ヲ放失シ候故、譬朝命ヲ以令シ候共、ケ様ニ瓦解仕候上ハ外ニ可施道無御座、依テ大樹喪ヲ発シ、解兵被仰出、左候テ有名ノ侯伯ヲ被召、天下ノ公論ヲ以、討不可討ノ論ヲ定メ申度、長征而已ニアラス、是迄幕府失体ノ罪ヲ奉謝、以来天下ノ心ヲ以侯伯トモ〳〵尽衆議、政体ヲ変革仕度、依テ前日ノ非ヲ改正シ、

今日ノ変論ニ仕候儀ヲ御許容可被下旨、九拝頓首シテ被相願候由ノ処、表通ノ儀故、二條公ヨリ朝廷ヲ欺キ、且乍不肖モ関白以下ノ職掌ヲ愚陋シ、朝憲ヲ不憚、甚以不得其意トヤラノ御論返ノ処、一々御尤ノ御儀深恐縮仕候、乍然右申上候通、天下ノ人心相離、令命ヲ不用、譬テ申ナラハ去ル七日之暴風モ同然、風前迄ハ人家草木実ニ盛大ニ候得共、風後ニ相成候テハ、前日ニ引替タ有様同前ノ次第ニテ、実ニ愕然ノ仕合ニ付、変遷不仕候テハ所置難、無拠前日ノ論ヲ改テ歎願候旨、小児ヲ欺ク如ク弁解、板倉ヨリモ伝奏衆御取次ヲ以、橋ヨリ奉願候通、御許容被成下候様頻ニ奉願トヨ〳〵御許容之御決定ニ相成候由（再夢紀事参照）

一大樹公喪十九日ニ発候得ハ、三日ハ朝廷モ廃議（廟カ）被為在候由、左候テ跡目相続ニテ、徳川中納言ト被称候事候由、

一去ル十四日、橋府ヘ會・桑君侯ヲ招キ、一橋ヨリ被仰候ハ、各方ト倶ニ天下ノ統御ヲ尽候処、悉ク反シテ却テ御不為ト相成、実以心外ノ仕合、然処小倉表ノ変ヲ聞、迚モ此末ノ所置見留付兼候処ヨリ、無拠解兵ノ儀、大樹公依喪願替ノ方ヘ決定イタシ候、右ニ付両侯ノ処当分通ニテハ、決テ不都合ノ訳ニ立到リ可申ハ案中ニ付、　御沙汰無之内ニ各職ヲ辞シ、帰国被相願候方可然哉之旨ニ付、両侯答、我々共儀更ニ異儀無之候得共、家来共ヘ混ト周旋為致候上ノ儀ニ候得ハ、得ト申聞、何分可申上トノ事ニテ御退出之由、実ニ人面獣心トヤイハン、尤苦楽ヲ倶ニスルノ器ニアラス、虎狼ノ所為可悪ノ甚敷人ニ御座候、

一桑侯ハ不平ノ者両三輩ヲ同許ヘ被遣候処、一藩異論ナク、直様ヨリ橋府ヘモ御越有之由、會侯ハ君臣共甚憤激、乍去君侯之処兼テ家中ノ周旋過キノ御掛念モ為有之由ニ付、左程ニハ無之由ニ候得共、公用人辺（本マヽ）候処案外（迷カ）候儀ニ付、大ニ沸騰イタシ候由ニテ、十四五日方夜分賀陽宮ヘ説込、断然勅命ヲ以、橋之発途御催促ヲ計リタルヨシ候得共事ナラス、十八日朝會侯橋侯ヘ御越被成度ノ処、一人モ御供可致ト申者無之、無致方御止メニ相成候風聞、頻ニ賀（本マヽ）條公ヘ周旋方罷出様（候脱カ）ニ、歎訴仕候聞得御座候、是ヲ以迚モ詮立間敷候、賀陽宮之御胸中御察可被下候、先日村山下総参殿、　御所ヘ罷出候処、橋ノ愚陋モ困リ

物ニ候、詰リハヲレカ首モ切ラレルテアラフト被仰候由、余程御心配ト相見得申候、隠計ヲ被成候儀ハ、御自身モヲアキラメノ御事ニ被伺申候、一笑(加陽宮ノ不名)可被下候、

一十八日橋府榎本亭造(道意)・原市之進(忠成)ヨリ呼出有之、私罷出候処、同席梅澤孫太郎(亮)今日ヨリ尊藩并肥後・肥前侯ヘ為御使被遣候、蒸気船無之故、ハヤヨリ(小舟ノ名)佐賀關ヘ渡海ヨリ参上可参、何辺都合向相頼候トノ事故、其趣ハ別段以首尾書御家老衆ヘ申上置候、御案内トハ存候得共、一橋御用人ハ布衣以上ニ御座候、御会釈向ニモ相拘儀故、為念申上置候、原・梅澤等ハ御存通之奸臣ニ御座候、黒川嘉兵衛(雅敬)ハ関東ヘ此初方被差返、転役之由御座候、是ニ三説御座候、一説ハ私、一説ハ原・梅澤(本マヽ厚俱カ)、一説ハ過日一橋トカ石橋ト申者ノ娘美人ノ聞得有之、右ヲ妾ニ被召拘候付、今少シ早ク候得ハヨロシク、只今ケ様ノ形勢ニ立到リ不宜、今少シ御見合被成候方可然、時節ノ儀ハ、私共可申上候付、暫時御辛抱可被成旨申上候処、大ニ憤怒散々咄ニ逢、ケ様ノ暗君ニ仕ヘ居候テハ、イカ様之儀可有之モ難計ト言モノニテ、自ラ辞シタトモ申風評ニ御座候、私欲(本マヽ厚俱カ)ノ方相違有之間敷、梅澤等カ奸御見合ニモ可相成哉ト存申上候、随分此使抔トハ上手ノ仕掛ト思召テノ事カト察候得共、却テ穴カ見得ヲカシク御座候、

一御召ノ諸侯、肥後　肥前　阿波　土佐　因　備　藝　宇和島　此御方九藩ト申事ノ由、

一勝房州長ヘ行得被命、梅澤同日出立ニ御座候、

一将軍職ヲ辞候儀ニ好機会欤ト奉存候、此機ヲ失候テハ再有之間敷、天ノアタヘニ御座候間、断然ト　御許容ニ相成、有名ノ侯伯五六藩ニ御委任、王制ニ被為復度候得共、御尽力ナクテハ迚モ被行申間敷、深御賢計希所ニ御座候、譬徳川ニナルトモ、橋ノ大奸智ヲ退ケ、挫禿不申候テハ、諺ニ虎ヲ千里ノ野ニ放候モ同然、迚モ只今奸策ヲ以、一橋ノ名ヲ求候十分ノ四モ行ヒ申間敷、御賢計可被下候、弥御召ニ応シ諸侯来朝アラセラレ候テ、断然之御決策迄ハ御見居ノ上　御上京被為在候様念願奉存候、再ヒケ様ノ御場合有之間敷、ケ様ノ世態ニ罷成候テハ、何レ　王制ニ罷成、賢公方被仰談、豊家之五奉行ト申様ノ事ニ罷成、其外参政等ノ議モ、夫ヨリ諸侯方ヨリ被仰付候ハヽ、変革格別難事ノ場ニハ有之間敷、実ニ橋ノ大奸可悪ノ甚敷モノニ御座候、到茲ハ會ノ頑愚弥以ヌリヲ上ケ、御笑察可被下候、

一十七日　御前ヨリ御退座、八景ノ間ニテ賀・條御出、侯伯御召ノ儀ハ、幕ヨリ取計可然、又諸侯ヲ京地ニ会候テハ、跡ノ居リ六ケ敷トノ当座御咄ノ哉ニ、山階宮被仰聞候間、余リヲカシク、

皇国ハ朝廷ノ御物ニ候哉、幕ヘ御宛行切ニ候哉ト御尋申上候処、宮モ御笑ニ御座候、何様申上候テモ御疑申上候儀無御座候間、少々暴論モ申上置候、宮ハ能御弁ヘノ哉ニ被伺候、正親町三條卿(嵯峨実愛、議奏)ハ先日ヨリ御所労ニテ御引入ニ付、直様形行トモ申上置候、実ニ此度ハ、此宮卿之御正儀感服至極ニ御座候、十六日ニハ一橋於禁中混談ニテ、色々口ニ任セ上手申上ダル由、宮被仰聞候、

一一橋八日御暇参　内ニハ奉拝

龍顔、不容易　勅書相下リ、剰御剣迄モ拝領、尤男ノ議論成敗利鈍ニ不拘ノ申立ニ候処、忽変シ解兵ニ転シ候始末、鉄面皮ノ最上、其上倶ニ計候會・桑ヲ放スノ心根、実ニ人間之所為ニ無御座候、彼カ存意ヲ遂候様ニテハ、屹ト不相済儀カト奉存候、能々御工夫可被下候、

一賀陽宮二條公辺ノ処ハ、諸侯御召ノ儀ハ是非ヨリトノ思召ノ由候得共、其通ニテハ迚モ被応候諸侯ハ有之間敷、詰ル所

朝廷ヨリ御沙汰ニ罷成可申哉、其位ノ儀ニテハ、御上京相成候テハ、格別詮立候儀モ到来仕間敷、勿論

朝廷ニ為差御人傑不被為在候ニ付、稍々モスレハ名分条理ヲ御踏違ヘノ儀モ不少候付、此末迚モ到テ御頼少キ御事ニ御座候、乍去茲ニ実ニ再アルヘカラサルノ機会ニ御座候付、弥

朝廷ヨリ御召ト申筋ニ罷成、諸侯モ御上京ト申様ニ罷成候ハヽ、是非御尽力被為在候様有御座度儀ト奉存候事ニ御座候、イツレ追々見留ノ所ハ被仰越候ニテ、可有之候哉ト奉存候（久光公御上京ヲ云）

一會甚沸騰、橋ノ奸ヲ押ヘ不申候テハ、兵力ヲ以ナリトモ、尽サルヽ丈ハ尽シ、東下モ致シ度趣意之哉ニ風聞承申候、アノ位ノ儀候テハ、迚モ決策ハ至テ無心元儀ト存候儀ニ御座候、

一大樹公廿日卯ノ上刻(実ハ七月十九日)薨去ノ御届ニ及、諸藩江モ御触流シ昨廿一日御座候、一橋ハ十九日ニ乗切ニテ未明下坂、越老公ハ二十日ノ夕ニ御同様ニ御座候、長征大樹公依喪解兵丈ケハ、

朝廷ヨリ被仰出候御賦ニ承申候、乍併諸侯御召ノ儀モ、始リハ
朝廷ヨリ被仰出候半、追々形勢事情ヲノツカラ爰元ヨリ御問合相成可申候、先ツ今日迄ノ形行、私承及候大意丈申上候間、乱筆御推読可被成候、外ニ段々浮説流言モ御座候得共、皆トルニタラサル儀ニ御座候事、

六七九　長州人上京探聞届書

九月三日夜中着船直ニ上京
一長州家中二拾四五人
同五日朝四ツ半時上京
一同　野見何某上下拾二三人
　但京都留守居交代之筈ニ申居候得共、実ハ交代ニテ無之、重之ニ相成候ト申事ニテ、尤鑓印ハ不付候付、何国之家中トモ不分由、
右之通昨夜承届之候、此段申上候、尤右三日夜上京之者モ、屋敷ヘハ不立寄トノ事モ承候由、就テハ旅宿屋又ハ何此方辺ニ止宿之由、分リ候丈ケハ聞出候様頼置候、分リ次第ニハ可申上候、右等之由ニ御座候間、過日被
仰出候御固様之名目計ニテハ相済不申時勢ト存候、屹度厳重ニ洛中洛外共御調相成候様之御所置、有御座度儀ト奉存候、猶手ヨリ付置候、時々右等之儀ハ可申上候間、此段厳重御手付候様奉願上候、以上、
九月六日　　佐々政次郎
上田郡六様
井上彌八郎様
追申、過日拝借仕候御提灯返上仕候、

六八〇　毛利父子島津へ書翰

一書敬呈仕候、秋冷相募候処、愈以御父子様御安健被成御座候御様子、欣然罷居候、扨昨年中は、貴国と彼是不信之次第ニ立到り、千万御気毒之処奉存候、下拙微志も兎角不行届故、家来之者心得違も有之大ニ痛胸、今日迄打過申候、然処先年来於征夷府、対外夷候所置不行届よりして、人心之動揺ニ立到、乍恐
朝廷御威徳も御衰傾ニ可及と相考、憂歎之余不顧微力致周旋候処、諸事齟齬多く、赤心も貫徹不致而已ならす、今日之場合ニ立到候次第、何共残念之事御座候、

此度貴国江罷出候家来之者より御様子委細致承知、万端及氷解候、於貴国勤
王之御正義殊更御確守之由、実以欽慕之到候、
皇国之御為無此上と、乍陰欣躍致御依頼候、弊藩之処ハ前段之趣ニ付、日夜
朝廷之御様子懸念罷居候而已、心事何も御憐察是祈候、
委曲ハ上杉宗次郎〔土佐海援隊士〕江相咄候間、御聞取可被下候、先は
任好便如此御座候、恐惶頓首、

廣封
九月八日　敬親

尚々先日家来之者、貴国へ罷出候節は、彼是御懇切ニ被成下候由、難有奉存候、此後も可然致御頼候、
以上、

上封ニ

島津中将様　廣封
島津少将様　敬親

御直披

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

朱方印ヲ以テ封ス、

六八一　舊邦秘録 大小監方ヨリ宍戸備後之介并諸隊ヘ御糺問之条目

一大膳父子今以萩表寺院へ謹慎候哉、如何ノ事候哉、
一諸隊ノ内奇兵隊等折合候哉之事、当春於長国家臣共闘争相及候節、謹慎中長門出馬、且当九月三田尻浦迄同断、
一於馬關昨年来外夷舶等近寄、密商之聞得有之、如何之事候哉、
一外国へ使節差立候儀、如何ノ事、
一蒸艦夷人へ売払候聞得有之、是又如何ノ事候哉、
一山口城再ヒ築搆候訳如何ノ事候哉、
右通彼是聊ノ事件御尋問之由、ケ条洩タルモ可有御座候得共、御疑惑之廉々大略前条之通ニテ、長藩共ヨリ一々御答振等具ニ相分不申、乍然其場程能取繕、名義ヲ建申済候由御座候、以上、

九月九日　土持佐平太

六八二　〔京都飛脚便〕

丑九月七日
京都ヨリ飛脚着イタシ候由、当分モ将軍大坂へ滞坂ニ付、吉川御用召ニ不応上坂不致候、幕府ノ手ニテ本マヽ候ヤノ飛脚ノ由、

但夫ヨリ筑前ノ五卿ノ方ヘ、二丸御小納戸木藤覚大夫其外、明後日出立ニテ差越候由、又五卿モ幕府ヨリムリナル取扱可有之欤モ難計、殊之外恐縮被致、殊ニ寄リ候テハ、此方ヨリ一手ノ守衛被差出候モ可有之御模様候由、或人中原噺ニ候、幕府万一取扱ニモ相成候節ノ守衛ニ候ヤ、又ハ長州ヨリ五卿ヲ押込候節ノ手当ニ候哉ト申候得ハ、幕府ノ事ニテノ守衛ナラントノ噺ニ付、左候ヘハ徳川ニ腕押ノ姿ニテ候ヤト申候得ハ、夫ノ事也ト、何分ツマラン所置也ト噺合候事、

九月八日記ス、

六八三　島津兄弟御褒賞

丑九月十一日

禁中御仮建所江参上

島津備後（朱）「珍彦旧名」

昨年七月、長藩ノ士及暴挙候処、速ニ出張、凶徒ヲ追退候段、

叡感不斜、且長々滞京警衛、　御満足

思召候、今度願之通賜御暇候、依之陣羽織地二巻賜之候事、

島津圖書（朱）「久治」

昨年七月、長藩之士及暴挙候処、速ニ出張、凶徒ヲ追退候段、

叡感不斜、且長々滞京警衛、　御満足

思召候、依之陣羽織地二巻賜之候事、

今度島津備後願ノ通賜　御暇候、就テハ為代可然人体上京可有之事、

六八四　市來次十郎英佛蘭三国ノ軍艦攝海ヘ廻航ノ報

私儀御用有之、横濱表ヘ差越、神奈河駅ヘ滞宿致居候処、英佛蘭三ケ国之軍艦都合九艘、攝海ヘ可相廻哉承リ、召列候清水卯三郎ト申者承得申出趣、早々江戸御家老方並新納嘉藤二方ヘ申越候処、一昨日六ツ半町便ヲ以テ、其許ヘ申越相成候由、其後猶又右卯三郎ヘ為聞繕候処、英国アトミラルヨリ申ス趣ニハ、明十三日当所出帆可致旨、尤二艘ハ今日出帆之段承候得共、未タ碇ニハ不相分、攝海ヘ差越候趣意ハ、当時幕府之政令行ハレ兼候ニ付、関白殿下ヘ直談ニ及ヒ、約定書請

取、又ハ大諸侯ヨリモ、約定書相受取ト之趣ニ相聞得候、先日ヨリ水野和泉守様・酒井飛驒守様ヲ初、大小之幕役追々応接モ有之、大坂表ヘハ追々注進ニ相成、松平伯耆守様初御心配之由、其御地ニハ疾クニ事情可相分候得共、何分不容易御大事ニ付、極々急キ飛脚ヲ以テ此段申上候、御国許ヘハ其許ヨリ被仰越候様、御取計可被下候、以上、

丑九月十三日　　市來次十郎

従神奈河

六八五　舊邦秘録（藩内事情）

九月廿日比

一米三盃入廿弐貫五百文位ノ直成之由、九月五日・六日弐盃入壱俵ニ付六拾五貫文ニテ候、当分弐盃入八拾五六貫文、十月十六日、

六八六　道島家記抄（京都ノ説）

丑九月廿三日

朝赤池續ハ、一昨日京都ヨリ着イタシ候迚見舞大坂ヲ十四日ニ出帆、重留モ此舟ヨリ着ニテ候由、将軍当分（島津備後ヲ云）大坂御滞坂ニテ候処、十五日ニ上京之由ニ付、大急ニテ重留ニ舟ニ乗付レ候由、右将軍上京ハ何事ヤト相尋候処、実正ハ不存候得共、察スル処ハ大坂ヘ出張被成候処、長州モ勢ヒ強ク中々征伐当分出来申間敷、左候ヘハ跡返モ出来申間敷、夫故上京ヨリ直ニ江戸ヘ被罷帰候処欤ト被相窺候由、長州ハ如何ニト相尋候処、是ハ勢ヒ強ク、国境ヒニハ是ヨリ長州領トイフ境木相立、町人タリ共国境ヘ入来候ハヽ可打果ト、標札相立居候由、交易ヲスル聞得有之如何ト相尋候処、夫ハ全ク無之讒言ナリト申候、京都ハマツ無事ニテ、米ハ百文ニ付弐合五夕位ニテ、諸色モ高料ニハ有之候得共、御国程ハ無之トノ事ニ候、

六八七　薩州家来ヨリ建白（内田仲之助名）

此度兵庫表夷船来着ノ趣意柄、詳ニ承知仕候得共、過日阿部豊後守様（正外、白河藩主、老中）・松前伊豆守様（崇広、松前藩主、老中）御応接之上開港、且十日期限ニ被為究、右ニ付

大樹家不日ニ　御上洛、事件　奏聞被為在候哉ニ、内々承知仕候、就テハ兵庫表之儀

帝都近、殊ニ海内ノ要港ニテ、素ヨリ　勅許可被為在

候儀トハ不奉存候、墨夷初テ襲来後積年不被為在御動御儀ト、兼テ拝承仕候ニ付、乍恐聊苦心仕候儀ハ無御座候得共、自然依申立趣ニ、　御動揺

御許容被為在候テハ、

皇国ノ存亡未曽有ノ御永恥、千歳御取返ノ期有御座間敷、実ニ人心ノ向背ニ相拘、莫大ノ御後難此一挙ト奉存候ニ付、諸侯急速御召相成、建言被　聞食候上、

皇威顕然相立候様有御座度奉存候、左候テハ日間モ相掛候儀ニ付、強請申張、万一彼ヨリ軽挙ノ振舞モ候ハヽ、速ニ御打払被　仰付度、左候ハヽ、弊邸当分人少ニハ御座候得共、修理大夫（島津茂久）・大隅守（島津久光）兼テ申付置候趣モ御座候間、御先鋒相勤申尽死力、聊奉報

御国恩度御座候間、兼テ被　聞食置被下度、此段遮テ奉願上候様重役共申付候、

九月二十九日

六八八　舊邦秘録

長州御所置并隣国当分動揺向等左ニ申上候、

長州御処置ニ付テハ、先達テ大樹公御参　内ノ節、寛大之御取計有之候様、

勅言之趣モ有之候処ヨリ、末家淡路・監物御呼登、御詰問ノ上相当之御所置可被遊御趣意之由御座候処、両人共所労申立不致登坂候付、既ニ其節御征討之御運ニモ可相成筈之処、猶又人事ヲ御尽被遊、其上如何様共御指揮可有之トノ御評議ニテ、長府・清末且萩家老共之内、申合上坂イタシ候様被仰達候得共、是以登坂ノ姿ニモ不相聞得候処ヨリ、先月末比橋・會両侯二條家ヘ御参殿、長府等万一登坂不仕候ハヽ、此上被成方モ無之事故、無余儀人数御差向御追討可被成トノ趣、御伺相成候処、兵端ヲ伺候テハ、天下ノ人心動揺ハ勿論、被為悩

宸禁候付、猶又篤ト御勘考有之候様御返答相成、外ニ御取計之道モ更ニ無之、乍去

勅命ヲ以被仰下候ハヽ、決テ登坂可仕哉ノ旨、是又御伺ノ処、

勅命ヲ以末家被召寄場合ニモ難至、大膳御父子ヘ右通御沙汰ニモ相成候ハヽ、不致登坂直様上京願出候ハヽ、顕然ニテ、左モ成立候ハヽ、入京御差留ノ者故、人心尚又疑惑生シ、是以其通ニモ難被成トノ御事ニテ、其後追々堂上方御参殿、御評議有之候得共一決不致、何レ

切迫相成、討入之時機ニモ相成候ハヽ、其節ハ幕・長ヘ勅使被差立、平穏ノ方ニ御沙汰可相成トノ説モ有之候由、右通ニテ御運付兼候処ヨリ、大樹公当月十五日大坂御立、伏見御一泊、同十七日御参　内、尚廿一日御同断ニテ、御下坂之御賦之由御座候処、同十六日異船攝海ヘ乗込、右一条ニ付、去ル廿三日迄ハ、御滞京相成居候哉ノ取沙汰ニテ、御長伐御伺如何罷成候哉、イマタ右次第相分リ不申候、

一小笠原壹岐守様(長行、唐津藩世子)去ル四日、御老中同十四日、此節御兵発御供於浪華被仰付候由、右ニ付供方之人数為手当、同藩雨森小仲太ト申者、早追ニテ去ル廿四日爰許ヘ着イタシ候付、彼是承合候処、同十六日兵庫ヘ英船五艘、佛同三艘、蘭同壱艘都合九艘、右ノ内弐艘ハ天保山沖ヘ乗入、翌十七日於同所前壹岐守様御応接相成候処、此節長州御征討之御模様承伝、御加勢申上度含ニテ、渡来イタシ候間、彼地責口御渡被下度、次ニハ此内ヨリ願立置候兵庫開湊、御容被仰付度トノ書翰差出、尤阿部豊後守様ヘ御面謁イタシ度趣モ申出候由、然ルニ御同人様ニハ、大樹公御供ニテ御上京故、右之趣ヲ以、何レ御下坂、御評議ノ上何分御達可相成旨、御答相成候処、左候ハヽ其内陸宿イタシ度候付、寺院御貸渡相成候様、是又願立候由候得共、程能御断相成、御復命有之迄之間、兵庫ヘ乗廻候様被仰渡、当分彼方ヘ一所ニ碇泊イタシ、何ソ乱妨ケ間敷儀共ハ無之由御座候、

一長府・清末并萩家老共、期限通不致登坂段、イヨ〳〵相決候ハヽ、於幕府ハ天下ノ法令不相立候付、諸侯方ヘ討手被仰渡、御伐長ノ向ニ相聞得、右ニ付テハ於九州路ハ、肥後ノ儀ハ当春於江府御旗本御先鋒御願立ニテ、出勢被仰渡候ハヽ、君侯御名代良之介殿直様鶴崎ヨリ藝州路ヘ御渡海、同所ヨリ責入之御手当相成居候由、小倉侯ニハ馬關御先鋒勿論ノ事ニテ、柳川・久留米・中津・肥前・佐賀并嶋原・唐津藩抔、当所ヘ為探索方、追々相見得候付、差障無之様、此内ヨリ内密承合申候処、大概同論ニテ出勢被仰渡候ハヽ、何ツレモ無異儀出軍ノ向ニ承得、筑前ノ儀ハ追々申上候通、国論二派立、禁錮ノ人数モ有之、当分ニテハ折合居、出勢ノ向ニハ候得共、全体国論不突立事ニ臨候得ハ、如何様共人気転変イタシ候儀共多々有之、夫故是社ト申上候程ノ儀相分リ不申候、熊本ノ儀ハ四番手迄人数御手当相成居候由、尤モ不同ハ有之候得共、一手凡精兵三千人位

ノ由、

一長府・清末并萩家老共登坂ノ模様、段々承合候得共、今日迄モ何分相分リ不申候ニ付テハ、決テ上坂不致儀共ニテハ有之間敷哉、取沙汰ニ御座候、

一先達テヨリ申上候筑前幽閉ノ者共ノ内、伊丹真一郎・月形洗蔵外ニ拾人計身分被召放、当月中旬比入牢被仰付、筑紫衛ニハ同初比、座敷内抜出行衛不相知、船留等ニテ詮議有之候処、福岡辺川中ニ溺死イタシ居候筋、人気折合之為表向ハ申触候得共、内実ハ長州ヘ逃渡候由、其外々ノ者共ニハイマタ御所置ハ無之由、

一長人於長崎小銃七千挺買入候トノ趣ハ、先達テ御届申上置候通ニテ、其後挺数ハ相分リ不申候得共、大砲モ相応取入、右引合旁ハ勿論、交易筋ノ儀モ有之、英人カラハニモ近比馬關ヘ参リ、長藩桂幸五郎等ヘモ面会イタシ、彼方ヨリ余程叮嚀会釈、尤長人ニハ人気モ突立居候トノ趣、右カラハ賞美イタシ候由、左候テ下ノ關開湊イタシ、交易ハ勿論当世態ニ付テハ、第一兵器肝要ニテ、不備置候テハ不相叶事候付、右地面本藩ヘ為差出、運上銀等ノ儀ハ、是迄之通本藩ヨリ可相渡トノ計策有之、右ノ趣長府ヘ申渡候得共不致承服、評議区々イタシ候取沙汰モ御座候、

右通ニテ、異情ノ儀ハイマタ巨細相分リ不申候得共、兵庫開湊ノ儀ハ、此内ヨリ願立、既ニ当月中期限ニテ、一通リ之御達共ニテハ、容易ニ引払候儀ハ有之間敷、併於彼等モ兵庫ノ儀ハ、京都近ク御許容不相成儀ハ、最初ヨリ案内モ有之由候得共、要地之場所柄願立候ハ、無御拠、終ニハ馬關ハ御免相成候目論ヲ以、前文通申立候向ニモ承得、何分此節御評決御返答次第ニテ、開鎖ノ両道相分リ可申哉、不容易事件ニテ、精々探索仕候得共、御下坂ノ上何分御達可相成向ニテ、未タ委曲相分リ不申、尚追々可申上候得共、其内此段御届申上候、以上、

小倉滞在

丑九月廿九日　　園田彦左衛門

六八九　鹿兒島雑報

一　白濱・木藤外ニ七人〔朱〕「(各名)」

右砲術并西洋学為稽古江戸ヘ被差出候、岸良彦七英学稽古トシテ長崎ヘ被差出候、

大坂ニテ御老中方御面会、佛蘭西国皇帝全権ミニスト

ル・レオンロセス、

口達

此度某各様方得御面晤、可議所ノ大事件ニ付、吾隊ノ支配頭カショント申者へ、先其趣意ヲ遂可申上候様申付候、就テハ同人演述中ニ、万一申落シ等モ可有之哉ニ心付、別紙ノ通則書取ヲ以差上申候、御熟覧ノ上可然御存意可仰聞候、以上、

慶應元丑年九月十九日　佛蘭西全権ミニストル

御老中様

六九〇　蓑田傳兵衛ヨリ大久保一蔵ヘ鹿兒島ノ形況ヲ報ス

京都

大久保一蔵殿　蓑田傳兵衛

平易要答

去ル廿日大坂より仕出町飛脚より之貴翰、今日相届忝拝見仕候、於此御地

御両殿様御始、

御惣方様御機嫌克被遊御座、奉恐悦候、

中将様御儀、去ル十六日より為御湯治指宿へ

御光越被遊、御相応候段追々申来、御同慶奉存候、貴所様無異儀御着京、益御安泰被成御勤務、則より彼是と御配意御尽力之儀、恐慶奉存候、随て野夫無異相勤居申候間、乍憚御降意可被下候、扨今般其御地之事情細々被仰下、早速

御両殿様達

御聴候様可仕候、攝海異舶数艘来着之一件ニ付ては、早速彼地之情実西郷氏より被申上越、何分不容易事件到来仕、未応接之次第も委細分兼候へ共、終ニ此期ニ至り

皇国之御安危差迫り、別て重大之一件ニ御座候得共、御示諭之通、却て得機会之事ニも候半、乍然於

朝廷第一公平正大至当之御所置無之候ては、彼か術中ニ陥り、受汚辱候儀も難計事御座候間、必至ニ御尽力之所、呉々も奉禱候、依時機ハ西氏も上京之段申参候間、疾ニ其通ニて御談合相成候半と奉存候、御書面之趣を以は、

朝議別て危実ニ歎息之至、此節社　皇土之大地盤相居り不申候ては、頓と挽回之期有之間敷、只々賢兄等之

御尽力を奉禱より外無之、追々模様次第ニは急飛等を以、被仰上候半と奉存候、爰許格別相替儀も無之、先静謐向ニ御座候、懸隔之事ニ御座候間、細事ハ難尽筆頭御座候、今日定式飛脚出立ニ付、御用向御返事、且御着之御恰旁如此御座候、恐惶謹言、

九月廿九日　　蓑田傳兵衛

大久保一蔵様

奉復

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

六九一　蓑田傳兵衛ヨリ西郷へ送ル書

大坂ニて

西郷吉之助様　　蓑田傳兵衛

平易要答

追々之貴翰、且去ル廿日仕出之町飛脚より之御用封、今日相達、忝拝見仕候、於爰許

御両殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦御同意奉存候、貴所様御安泰被成御滞坂奉欣賀候、然は今般兵庫江異船数艘渡来之事件、早々被仰越、実以不容易重大之事件、彼是御配意御尽力深察仕候、御書面各通共、則

太守様達

御聴、

中将様御儀、当分指宿

御光越中之御事ニ御座候間、則飛脚差立達

御聴可申候、今度之事件

皇国御安危界、兎角公平至当正大之御所置ニ依テ、大地盤相居り候所、則より必至之御尽力、依時機は御上京之賦、追々事情相分候ハヽ、被仰上越可被下候、何分

朝議も危次第、苦心之至御座候、桂・小松大夫も御揃無御別条候、先般被仰越候岡崎御屋鋪一条も、至極御同意之事ニて、小松君より委細御掛合相成賦ニ御座候間、小子よりハ相略申候、此御地当分は先静謐、格別申上候程之事件も無之候、今日定式飛脚被差立候間大略御用答如此御座候、巨細は後便可申上候、恐惶謹言、

九月廿九日　　蓑田傳兵衛

西郷吉之助様

奉復

今度異舶渡来之儀は却て大機会ニも候半哉、

皇国大基礎相立候所、呉々も御尽力之程奉禱候、小笠原出職、大久保御用召之由、御同慶勝房州御引出之所

此機会ニては第一と愚考仕候、御尽力伏て奉希候、〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

六九二　樺山資紀書翰

去月十三日付ノ貴札忝致拝読候、其爾来愈以テ御安泰御奉職被成御座、殊ニ艦途無御恙御出府ノ由、重畳目出度万々奉欣然候、二ニ鄙夫ニモ無相異勉居申候間、乍余事御省念思召可被下候、　京攝辺如何ノ形勢ニテ御座候哉、未平穏ノ姿不相分、去ル廿六七日岩國・徳山御用召ノ期限相立、愈其通ナクテハ、直チニ親征ニ相成賦ノ由巷説御座候、既ニ左候テハ今頃ハ何分決着御所置モ相付候半、自然干戈ノ動ク所ハ無覚束、御沙汰通公武ノ間、一向ハ一橋公周旋ノ由、イツレナク寛大ノ御所置被召付ハ、案中ト奉存候、長藩モ矢張確乎タルモノニテ、決心ノ外無之、余程見居ヘモ深ク御座候半、尤此已前ヨリ西洋ヘモ疾渉居、最早何篇手モ相付居、尤モ　御方様ヘモ窃ニ先頃ハ参リ候、且崎場〔崎陽カ〕辺ヨリ小銃過分此御方ヨリ御世話被成下候由、ヲノツカラ彼是疾細大御詳達被為在候ハン、扨亦大脇矢兵衛ニテ不侮ノ仕合ニテ、黒田様等方御心配ノ由、定テ貴公モ御立障被成候半、実々残多次第、御互ニ奉存候、横濱辺御周旋ノ由、当分ハ何方御在勤ニテ候哉、定テ軍艦一条欤ト奉窺候、御繁多中自由ノ儀御願申上候処、愚母腰差ハ草々御取入御差下被下、至極似合ノ品御アツラヒ被下候処、愚母ニモ大鎗喜コヒ、殊ニ又結構ナル喜世留迄御恵投被下、重畳恐入忝、深々御礼申上呉候様トノ儀ニ御座候間、左様思召被下度、就テハ御礼ノ験迄、煙草二巻愚母ヨリ進呈仕候間、御掌握可被下、尚代金二部〔分〕、是又早速差上申候間、先方可然様御代払旁ヨロシク御取計被下度、万々奉願候、将亦野拙鼻紙袋御注文、去ル七月飛脚ヨリ代金一両一部相添御願申上候処、最早疾御詳達被成下候半、打重ネ近頃申上兼候得共、御繁多中不顧恐奉願上候間、何卒代金似合ノ品、御アツラヒ御差下シ被下度奉合掌候、被差下候節ハ、御地詰同席ノモノ共ヘ、御用封ヨリ差遣呉候様、彼是御面働恐入御座候得共、万々可然様御取計被下度、是又奉伏願候、御閑暇ノ折ハ御地ノ形勢何卒御洩シ被下度、奉伏願候、申上度儀モ山々御座候ヘ共、取込故書綴兼、先ハ御着府ノ御祠詞、且御礼答迄乱筆如此、尚書余ハ奉期後〔音カ〕候、謹言、

九月廿九日　　樺山覺之進〔朱〕「資紀旧名」

柴山〔道館〕良介様

参人々

追啓、乍筆端伏見大黒寺寄附金ノ儀ハ、色々御面働罷成、早速御納金被成下、受取書迄御遣シ被下、安堵仕申候、愚兄ヨリモ別段御礼答ハ得不申上候間、可然様申上呉置候様トノ儀ニ御座候間、不悪様御汲取被下度、万々奉深謝候、住僧ヨリ色々申立候由、存寄モ御座候へ共、何分心事ニ不任次第、ヲノツカラ追々永田様トモ都合モ可有御座、何篇貴公ニ任セ上、御笑止ノ儀モ被為在候半奉存候、シカシ色々申立候ハ、俗僧ノ習ハシニテ、十分ニハ行届兼申候、彼是御世話罷成、何共々々恐入不知所謝奉存候、

六九三　舊邦秘録藩内軍賦

六九三ノ一

西目

一番出水一陣

一五百目野戦砲　七挺　出水御渡付

一右仝　壱挺　高尾野拝借

一弐百目右同　壱挺　阿久根右仝

一七百目右同　三挺　右仝所御台場御備付

右銘々要具相添

二番隈之城一陣

一五百目野戦砲　二挺　串木野御渡付

一七百目右同　壱挺　市來右同

一五百目野戦砲　壱挺　市來御渡付

一右同　壱挺　久見崎右同

右銘々要具相添

一右同　二挺

但要具相添

右高城郡高城ノ内、西方并水引へ被渡置候内ヨリ被相渡候、

一七百目右同　壱挺

右集成館御在合ノ内ヨリ要具相添被相渡候、

三番指宿一陣

一七百目野戦砲　壱挺　指宿御渡付

一五百目右同　弐挺　右同

一七百目右同　壱挺　頴姓石垣浦御台場御備付

一五百目右同　壱挺　右同所御渡付

一五百目右同　壱挺　山川右同

一七百目右同　壱挺　右同所右同

一五百目右同　弐挺　谷山右同
一右同　壱挺　川邊右同
一右同　壱挺　川邊郡山田右同
右都テ要具相添
四番加世田一陣
一五百目野戦砲　壱挺　加世田小湊浦御渡付
一右同　壱挺　右同所片浦台場御備付
一弐百目右同　壱挺　伊作拝借
一五百目右同　壱挺　阿多右同
一右同　壱挺　田布施右同
一七百目右同　壱挺　坊泊御台場御備付
一五百目右同　弐挺　右同
一右同　弐挺　久志秋目右同
一七百目右同　壱挺　右同
右都テ要具相添
五番國府一陣
一右同　壱挺　國分拝借
一五百目右同　弐挺　右同
一弐百目右同　壱挺　清水右同
右銘々要具相添

一五百目右同　弐挺
一七百目右同　弐挺
右弐行集成館御在合ノ内ヨリ要具相添被相渡候、
六番蒲生一陣
一三百目野戦砲　壱挺　蒲生拝借
一弐百目右同　壱挺　帖佐拝借
右銘々要具相添
一七百目右同　四挺
一五百目　弐挺
右弐行集成館御在合ノ内ヨリ要具相添へ被相渡候、
東目
壱番大口一陣
一三百目右同　壱挺　大口拝借
右要具相添
一七百目右同　四挺
一五百目右同　三挺
右弐行集成館御在合ノ内ヨリ要具相添へ被相渡候、
弐番小林一陣
一弐百目右同　壱挺　小林拝借
一五百目右同　壱挺　加久藤拝借

右銘々要具相添

一七百目右同　三挺

一五百目右同　三挺

右弐行集成館御在合ノ内ヨリ要具相添へ被相渡候、

三番高岡一陣

一五百目右同　三挺　高岡御渡付

一弐百目右同　弐挺　右同

一五百目右同　壱挺　穆佐御渡付

一弐百目右同　壱挺　綾右同

一弐百五十目右同壱挺　山之口右同

右都テ要具相添

四番志布志一陣

一五百目右同　三挺　志布志御渡付

一七百目右同　弐挺　右同

一右同　壱挺　内ノ浦御渡付

一五百目右同　壱挺　右同

一右同　弐挺　高山御渡付

一右同　壱挺　串良右同

右銘々要具相添

一五百目野戦砲　壱挺

右壱行志布志へ被渡置候内ヨリ、福山一陣へ可譲渡候、

五番小根占一陣

一七百目右同　壱挺　小根占御渡付

一五百目右同　弐挺　右同

一弐百目右同　弐挺　右同

一百五十目右同　壱挺　右同

一五百目右同　三挺　佐多右同

一七百目右同　大根占右同

一五百目右同　壱挺　鹿屋右同

一右同　壱挺　大姶良右同

右都テ要具相添

六番福山一陣

一七百目右同　壱挺　櫻島御渡付

一五百目右同　弐挺　右同

一右同　壱挺　敷根右同

一弐百目右同　壱挺　右同拝借

一五百目右同　壱挺　牛根御渡付

右銘々要具相添

一五百目野戦砲　壱挺

右集成館御在合ノ内ヨリ要具相添被相渡候、

一右同　壱挺

但要具相添

右志布志ヘ被渡置候内ヨリ被相渡候、

右ノ内御渡付拝借有之候得共、此節都テ惣物主ヘ御渡付被仰付候ニ付テハ、諸物主申談組合郷ノ内、他領境目海岸要所、又ハ郷ノ大小ニ応シ、分配且手続稽古旁ノ儀共、惣物主見計ヲ以テ、弁利宜敷様、可被取計事、

一大砲并玉薬ノ儀ハ、集成館銃薬方ヨリ被相渡、左候テ右ノ内実弾・霰弾ハ、当分御在合丈相渡、其余ハ追テ出来ノ上可被相渡候、打薬ノ儀ハ百発都テ被相渡、火薬箱ノ儀ハ、一陣ニ付八挺分ツ、所調被仰付候付、右箱見本用トシテ、十二陣ノ内ヘ三方ヘ相分、銃薬方ヨリ郷次被差廻候間、寸法無間違写取留ヨリ返納可有之事、

但打薬嚢ノ儀ハ〔以下欠文〕

一七百目・五百目ノ大砲ハ、壱挺ニ付実弾七拾・霰弾三拾発ツヽ、三百目以下ハ都テ実弾ニテ百発分、銘々要具相添被相渡候付、非常用可被備置候、右ノ外春秋両度調練ニ付テハ大砲八挺、壱挺ニ付打薬十発ツヽ可被相渡候ニ付、是迄ノ振合ヲ以可被申出候ニ付テハ、兼テ格護方ハ勿論、時々気ヲ付、拭磨等厳重行届候様可被取計候、左候テ痛損等有無ノ届、惣物主ヨリ取束、

二・八月可被申出候事、

但要具不足ノ場所ハ、集成館銃薬方ヨリ被相請取、厳重備置ル可ク候、

一百五十目野戦砲　壱挺

一装薬　百発

但壱発ニ付弐拾目宛

斤ニシテ壱合弐勺五

弐貫目

拾弐斤五合

一急火管　百弐拾

内弐拾浮キ

一急火縄　弐拾本

但拾発ニ付弐拾本宛

一薬包　百拾

内拾浮キ

一弐百目野戦砲　拾壱挺

但壱挺ニ付百発ツヽ

一装薬　千百発

但壱発ニ付三拾目ツヽ、
斤ニシテ壱合八勺七五
貫ニシテ三拾貫目
斤ニシテ弐百六斤弐合五勺
一急火管　千三百弐拾
内弐百弐拾浮キ
一急火縄　弐百弐拾本
但拾発ニ付弐本ツヽ、
一薬包　千弐百拾
内百拾浮キ
一弐百五拾目右同　壱挺
一装薬　百発
壱発ニ付四拾四匁ツヽ、
斤ニシテ弐合七勺五ツヽ、
貫ニシテ四貫四百目
斤ニシテ弐拾七斤五合
一急火管百弐拾
内弐拾浮キ
一急火縄　弐拾本
但拾発ニ付弐拾本ツヽ、
一薬包　百拾
内拾浮キ
一三百目野戦砲　弐拾
但壱挺ニ付百発ツヽ、
一装薬　弐百発
壱発ニ付四拾六匁ツヽ、
斤ニシテ弐合八勺七才五ツヽ、
貫ニシテ九貫弐百目
斤ニシテ五拾七斤五合
一急火管　弐百四拾
内四拾浮キ
一急火縄　四拾本
但拾発ニ付弐本ツヽ、
一薬包　弐百弐拾
内弐拾浮キ
一五百目野戦砲　六拾八挺
但壱挺ニ付
一実弾　七拾発ツヽ、
一霰弾　三拾発ツヽ、
一装薬　六千八百発

壱挺ニ付八拾目ツ、
実弾霰弾八拾目ツ、
斤ニシテ五合ツ、
貫ニシテ五百四十四目
斤ニシテ三千四百斤
一急火管　八千百六十
内三百六十浮キ
一急火縄　千三百六十
但拾発ニ付弐本ツ、
一薬包　七千四百八拾
内六百八拾浮キ
一七百目右同　三拾壱挺
壱挺ニ付
一実弾　七拾発ツ、
一霰弾　三拾発ツ、
一装薬　三千百発
但壱挺ニ付百拾弐匁
斤ニシテ七合ツ、
貫ニシテ三百四十七貫弐百目
斤ニシテ弐千百七拾斤

一急火管　三千七百弐拾
内六百弐拾浮キ
一急火縄　六百弐拾本
但拾発ニ付弐本ツ、
一薬包　三千四百拾
内三百拾浮キ
占装薬　壱万千四百発
銃薬　九百三拾九貫八百目
斤ニシテ五千八百七拾三斤七合五勺
合急火管　壱万三千六百八拾
合急火縄　弐千弐百八拾本
合百五十目薬包　百拾
合弐百目右同　千弐百拾
合弐百五十目右同　百拾
合三百目右同　弐百弐拾
合五百目薬包　七千四百八拾
合七百目右同　三千四百拾
右薬包ノ儀ハ惣テ木洋布仕調
惣合薬包壱万弐千五百四拾発
生洋布凡三百二拾壱反程

壱反ニ付三拾九発賦リ

六九三ノ二

当世体ニ付テハ、海陸トモ武備充実無之候テ不相叶候処、大砲製造方等十分ニ至兼候処ヨリ、海岸要所ハ勿論、西目・東目十二陣、大砲不足ノ場所モ有之候ニ付、此節御吟味ノ訳有之、別冊ノ通リ、一陣惣物主ヘ御渡付被仰付候条、諸物主申談、組合郷々致配分候儀ハ勿論、兼テ手続稽古相用、調練ノ節ハ郷々ヨリ持寄リ、且又一陣ノ内一隊、親軍其他ノ五隊ヲ以テ、大砲隊繰込、春秋両度ノ調練一度ツヽ、相勤メ、万一出軍ノ節ハ、其当番ノ大砲隊ヨリ可相勤候、左候テ玉薬等ノ儀ハ惣テ別冊ニ基キ可相請取候、此旨惣物主ヘ申渡、諸物主再集成館・銃薬水車方・掛見聞役其外可承向ヘモ可申渡候、

九月　但馬

此節西目・東目一陣惣物主ヘ、大砲等被相渡候趣ハ、別段申渡通候、右ニ付打薬用嚢ノ儀ハ、木洋布ニテ製造被仰付候条、大砲発数ニ応シ取調申出候様、銃薬方掛・見聞役ヘ可申渡候事、

丑九月十九日

表御用人取次

川上正十郎

一大砲装薬壱万弐千五百四拾

但東目・西目諸郷御手当拾弐陣分

生洋布三百弐拾壱反

右各砲薬包賦リ高

一大雷帽子三拾弐万四千発

但壱人ニ付弐百発賦リ

内拾発ニ付二ツヽ浮キ込ル

右御城下御備組三陣分

但千三百五十人

一右同弐万六千六百四十発

但書同断

右陸小姓百十三人分

一大雷帽子弐万千六百発

但書同断

右水軍兵士九十人分

一右同四百七十五万弐千発

但書同断

右諸郷并私領四十陣分

一右同弐千五ツ

但御台場各砲三拾発賦リ浮キ込ル
右御城下七ケ所御台場御手当
一右同十八万位
但諸人申請分五百ツ、
一右同弐万位
但調練其外諸方御手当御続ケ用見賦
惣合　五百四十二万二百九十発
右出来賦リ
銅鈑千六百弐拾七貫八百八拾七匁
斤ニシテ壱万百七拾四斤弐合九勺三七五
雷帽子殻一ツニ付三厘ツ、

六九三ノ三

京師救応隊
一手人数七十五人
発数壱万五千発
但壱人ニ付弐百発賦リ壱発ニ付三匁五分割剣銃薬
小銃施条砲四万発
内壱万発　胴乱弐百七ツニ五拾発ツ、入付ノ賦リ
三万発
火薬簞笥入附
但簞笥壱荷入付玉付左ノ通リ
占火薬簞笥拾荷
大雷帽子壱万八千
壱人付弐百四拾ツ、
占入樽拾挺

惣物主　島津主税
調合役

右同大砲賦リ
一十二拇小船忽砲　弐挺
一装薬　弐百発
壱発　八十目ツ、
炸薬　百九十五匁
壱発　四十目ツ、
木管　百九十五本
鷲管　弐百弐拾
火薬簞笥

什長　法亢　英助
調所多左衛門

一六封度施条砲　壱挺
装薬　百発

壱発　百三十三匁ツヽ、
鷲管　百拾
火薬簞笥

什長平田李右衛門

一三封度　弐挺
装薬　三百発
壱発　九十目ツヽ、
銅管　三百三拾
大雷帽子　三百三拾
火薬簞笥

什長町田八郎左衛門

有馬休八

一三封度施条砲　壱挺
装薬　百発
壱発　百四十目
鷲管　弐百
急火管　百
急火縄　拾本
火薬簞笥

什長川村與十郎

外ニ用心持越
十二挿小船忽砲薬包四拾
三封度右同　六拾
三封度施条砲右同弐拾
六封度右同　弐拾
銅管　百
大雷帽子　百
十二挿木管　三拾本
急火線　五拾筋
急火縄　五拾本
急火管　百
薬計　四通り

玉薬差引

税所四郎左衛門

六九三ノ四

写

一御城下七ケ所台場、各砲ニ応シ火薬庫ヘ非常御手当相成居候、装薬発数并火薬簞笥等不同有之、右通ニテハ要具賦方煩雑ノ訳ニ候間、以来台場御備付ノ各砲壱挺ニ付、拾発ツヽ被備置、其余ノ装薬ハ、先度被定置候

通ニテ、非常ノ節繰出等無混雑様可被取計候、此旨銃薬水車方掛・見聞役へ可申渡候、

丑九月廿八日　但馬

右ニ付装薬ノ儀ハ、各砲ニ応シ袋ニテ入付置、火薬ハ別段樽入附ニテ、銅鈑調ノ薬計、壱挺ニ付二ツ、出来相成候テ備置、可然トノ評議ニ候事、

六九三ノ五 御城下七ケ所御台場拾発賦リ

調練場

一拾八封度　七挺　装薬七拾発
　但壱挺急火管打　但壱挺拾発ツ、
　六挺銅管打
一急火管拾五　内五ツ浮キ
一銅管九拾　内同断
一大雷帽子九拾　内同断
一急火縄三拾本　壱本弐発ツ、
一弐拾拇忽砲　壱挺　装薬三拾発
　但急火管打　同断
一急火管拾五　内五ツ浮キ
一急火縄五本　壱本二発ツ、
一百五封度　壱挺　装薬拾発
　但銅管打　同断
一銅管　拾五
一大雷帽子　拾五
一六拾封度　壱挺　装薬　拾発
　但鷲子管打　同断
一鷲子管　拾五

大門口

一弐拾拇臼砲　壱挺　装薬　拾発
　但急火管打　同断
一急火管　拾五
一急火縄　五本
一六拾封度　壱挺　装薬　拾発
　但銅管打　同断
一銅管　拾五
一大雷帽子　拾五
一三十六封度　三挺　装薬　三十発
　但銅管打　同断
一銅管四十五
一大雷帽子四十五

一十二封度　壱挺　装薬　十発
但銅管打
一銅管　十五
一大雷帽子　十五
一十五拇忽砲　壱挺　装薬　十発
但急火管打
一急火管　十五
一急火縄　五本
辨天波戸
一六十封度　弐挺　装薬　弐拾発
但銅管打
一銅管　三拾
一大雷帽子　三拾
一八十封度　壱挺　装薬　拾発
但銅管打
一銅管　十五
一大雷帽子　十五
一五十封度臼砲　弐挺　装薬　弐拾発
但急火管打
一急火管　三拾

一急火縄　十五本
一三十六封度　拾挺　装薬　百発
但銅管打
一銅管　百五拾
一大雷帽子　百五拾
一六十封度　壱挺　装薬　十発
但嗟発管打
一嗟発管　十五
新波戸
一六十封度　壱挺　装薬　拾発
但鶯子管打
一鶯子管　十五
一三十六封度　装薬　五十発
但三挺銅管打
弐挺急火管打
一銅管　七十五
一大雷帽子　七十五
一百五十封度　壱挺　装薬　十発
但銅管打
一銅管　拾五

一大雷帽子　拾
一弐拾拇臼砲　壱挺　装薬　十発
但急火管打
一急火管　十五
一急火縄　五本

祇園洲

一十五拇忽砲　壱挺　装薬　十発
但急火管打
一急火管　十五
一急火縄　五本
一八十封度　壱挺　装薬　十発
但銅管打
一銅管　十五
一大雷帽子　十五
一弐十四封度　三挺　装薬　三十発
但銅管打
一銅管　四十五
一大雷帽子　四十五
一三十六封度　弐挺　装薬　弐十発
但銅管打

一銅管　三拾
一大雷帽子　三拾
一弐拾拇臼砲　壱挺　装薬　拾発
但急火管打
一急火管　十五
一急火縄　五本
一六十封度　壱挺　装薬　十発
但鵞子管打
一鵞子管　十五

東福ケ城

一弐十四封度　壱挺　装薬　十発
但銅管打
一銅管　十五
一大雷帽子　十五
一拾八封度　壱挺　装薬　十発
但銅管打
一銅管　十五
一大雷帽子　十五
一拾弐封度　四挺　装薬　四十発
但銅管打

一銅管　六拾
一大雷帽子　六拾
一弐拾拇臼砲　壱挺　装薬　拾発
但急火管打
一急火管　十五
一急火縄　五本
一拾五拇忽砲　壱挺　装薬　拾発
但急火管打
一急火管　拾五
一急火縄　五本
風月亭
一拾弐封度　弐挺
但銅管打
一銅管　三拾
一大雷帽子　三拾
一六封度　弐挺　装薬　弐拾発
但銅管打
一銅管　三拾
一大雷帽子　三拾
以上

合装薬　六百五十発
合銅管　七百五ツ
合木管　〔ママ〕
合炸薬　〔ママ〕
合大雷帽子　七百五ツ
合急火管　百八拾
合急火縄　九拾本
合鵞子管　四拾五本
合嗟発管　拾五本
合入樽　〔ママ〕
丑九月

六九四　西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

御安康奉賀候、陳ハ小弟不快有之、暫ハ平愈之体ニ無御座候間、被相下置候陸軍方之諸書付類、貴兄江御願申上候付、伊勢様（諏訪）江差上被下度奉合掌候、此旨乍略義以書中御願申上候、頓首、

〔慶応二年カ〕九月廿五日　西郷吉之助

黒田嘉右衛門様

要詞

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

慶應元年自十月至十一月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執掌史料」（紙数八二枚）」の記載あり〕

目録

舊邦秘録阿部松前謹慎云云之照会
道島家記抄当時鹿児島ノ形況
舊邦秘録肥後人吉藩内訌
肥後国求磨紛乱事実大口郷地頭談合役木脇次郎右衛門探偵届書
五代才助巴理斯ヨリ桂右衛門へ書翰
吉井幸輔ヨリ西郷蓑田へ報告
蓑田ヨリ西郷大久保へ書翰
小倉在勤土岐新兵衛探聞報
内田仲之助兵庫開港不可建言先鋒願
攝海へ異船渡来云云藩令
道島家記抄鹿児島ノ情況
拙修蠖睡へ英国ヨリノ書翰
英国ノ事情報告五代才助
在英国關研蔵書翰
幕府ヨリ尋問ノ節御答振ノ大略前紙ノ別紙
道島家記抄江戸邸引払説
關研蔵英国龍動府ヨリ野村壮七へ書翰
西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛へ京坂ノ事情ヲ告ク
在廣島土持左平太探聞報告
田沼攝海へ来ル云云西郷ヨリ黒田へ書翰
仝上（十一月七日）
黒田嘉右衛門ヨリ西郷吉之助へ書翰福岡内訌ヲ報ス
琉球国領主トモンプラント契約
薩隅日三州兼琉球国太守家臣石垣鋭之助等白山ト条約
在廣島土持佐平太防長事情探問報告
於横濱木村道之助古屋作右衛門ヨリ直話承候次第

小倉在勤土岐新兵衛報告

六九五　阿部松前謹慎云々之照会

大樹公今朝六ツ半時御供揃ニて、還御之旨御達有之候段、今暁丑下刻比田二兵衛より申越候、

一昨二日四時、御供之万石以上以下之面々不残登城有之候由、右等之議論有之候儀ニも可有御座哉と奉存候、

一阿部豊後守様（定外、白河藩主）・松前伊豆守様（崇広、松前藩主）先日御慎可被仰出之処、御疑惑筋も相分、不及其儀旨被仰渡候趣申上置候、然処右御両人共、昨暁七時御役御免之旨被仰渡候半、然処今朝別紙之通、松平周防守様（松井康美、棚倉藩主）御留守居近藤次郎右衛門より、黒田彦右衛門へ内々しらせ越候付、右添差上申候、右之通申上越候間、御披露可被下候、以上、

丑十月三日　　大坂　木場傳内

内田仲之助殿

（大久保利謙氏所蔵本にて校訂）

六九六　道島家記抄（当時鹿児島ノ形況）

丑十月三日比

風説ニ兵庫へ英舟・阿蘭陀・魯西亜三国ノ舟数艘入津、町飛脚差越之由ニテ、二日ノ日蓑田傳兵衛指宿ニ着越候由、当分二丸公指宿二月田へ被差越居、来ル六日御帰之由、三日ニ御通達相廻候、　太守公ハ朔日ヨリ櫻島へ御狩ニ被為入、二日ニハ磯之様ニ御差越之由、

但異舟ノ事ハ、兵庫ニ商館造方来年限リトノヨシ、其事ナラン、未慥成事不相知候、

一三日ノ夜入過大砲相聞得、蒸気船入津カト申合候処、五ツ過萩原長左衛門殿セキ被込、西郷吉兵衛被罷帰候由、定テ前件ノ事ナラント申事ニテ候、尤西郷直ニ指宿へ差越筈之由、御用部屋書役得能（良助）トノ直ニ彼へ差越候由、太守公ハ十四日ニ御帰殿也、十月四日比記ス、

六九七　肥後人吉藩内訌

覚

先月廿五日頃、求磨城下へ何欤騒敷為有之段相聞得候間、聞合方トシテ差遣承得候形行左之通御座候、

一求磨之儀、是迄砲術荻野流仕来候処、到当時西洋流之儀ヲ致流行、荻野流衰微相成候付、当主ヨリ荻野流宜敷候間、西洋流取止実戦無益候トテ、多人数申合弥信（候様申渡相成候処、西洋流熱心ノ輩荻野流脱ス）

用致シ、七挺カラクリ之船来筒等相求致誓古、是非西洋流盛ニ相用賦ニテ候由、然処右之〔人〕吉ヨリ当主為致隠居、先君之御息子幼少成ヲ相立含ニテ、若哉当主納得無之候ハヽ、〔舎〕合殺害段密ニ致談合、来ル廿六日之晩殿中ヘ押入賦迄、訴入為申出由、右ニ付当主ニモ甚タ立腹ニテ、廿五日之夜俄ニ士・足軽ヘ、鎧着用ニテ致登城候様、被申渡、西洋流信仰人数ヘモ御用申渡、早速致登城候処、家老ヨリ此節相企一条ニ付テハ、思召ニ不被為叶候付、罪科被仰付候旨相達、即座ニ相捕、直ニ城中ニテ被行死罪候人数、

大目付

高三百石　井口宇九郎〔兎〕
高三百石　松下量市〔了〕
高　百石　豊永泰三郎〔寅〕
三百石　轟半之助〔介〕

右子

同　享一郎〔小〕
二百石　中村友輔〔支〕
二百石　新宮本次

同　藤五郎〔常〕
百石　菱刈堅蔵
百五十石　今村衛一

作事奉行

百石　田代甚兵衛

右甚兵衛事、当座ヨリ逃去、城之口ニテ切腹イタシ候由、

物頭

日野佐市

右佐市儀ハ登城不致候付、士・足軽召列、相良家御役付挑灯ニテ討手ニ差越、寝間ヘ打入切掛候処、両手ニテ二人ヲトラヘ、庭ヘ投出候得共、後ヨリ切付薄手二ケ所為負候処、君命カト尋候付、上意ト答候得ハ、即畏居候処ヲ、直ニ打果候由、右之妻声ヲ高ニ呼候得共、右女並三歳之男子即座ニ為殺由、右母子ニハ無罪之儀ニテ、米六俵・銭一貫文葬料ニ被下候由、

一大洞党外ニ四拾人余相揃、牢込ニ相成候由、

用人

高六百石　米良源次〔小源次カ〕

物頭

高六百石　　米良道酒〔遣〕マ、

右両人儀、当分長崎へ差越居、呼返シ相成、死罪之風聞御座候、

一江戸御屋敷トモ四十三人計有之、家老用人交代トシテ被差越候由、

一右次第ニ付テハ、最初砲術一件ヨリ事起リ、暫時之騒敷為致候由候得共、其後無何儀モ静謐之由御座候、

右之通承得御形行御座候間、此段御届申上候、

丑十月九日

曖

井畦覺左衛門

大脇八郎

松永傳兵衛

地頭用達

川上覺之丞殿

六九八　肥後国求磨紛乱事実大口郷地頭談合役木脇次郎右衛門探偵届書

一肥後国求磨人吉城下ニ於テ、〔九〕月廿五日ヨリ騒動起リ候聞得有之、探偵之為メ彼地ヘ差越、承得候形行左之通御座候、

一人吉之儀ハ、是迄砲術ニ荻野流・天山流両派伝来之処、近頃ニ至リ西洋流行ハレ、従テ荻野・天山ノ二流衰微致シ候ニ付、当主ヨリハ荻野流ヲ主張セラレ、西洋流ハ取止候様申渡相成候処、西洋流熱心ノ輩申立ニハ、和流ノ儀ハ実戦ヲ経ス、攻守ノ業甚タ麁略ニテ、実ニ無益ノ流儀ナル旨申出、其上右人数申シ合セ、愚人ニ諭サンカ為メ、六眼銃ノ舶来品ヲ買入レ、諸所ニ於テ調練等相企、洋流盛大ニ相開候賦之処、元来当主荻野好之事候得ハ、迚モ西洋流盛ニナスノ期ハアルヘカラス、準養子之事候ニ付、若殿ハ早ヤ志学ノ年齢ニモ近ク候故、当主ハ隠居為致、先君之御遺子薩摩屋敷ト云フ処ニ住居アルヲ、家督ニ取立候ハ万事可宜ト申合セ、若シヤ当主納得無之ニ於テハ、押テ為致隠居、且毒殺等ノ計モ企候由、其事ニ付密会数度ニ及ヒ、或ハ去ル廿六日ノ夜、城中ニ押入リノ企モ致候由、其段家老奈須四方介聞知リ、其前免役相成リ、遠村蟄居被申付、右奈須カ一類ノ人数モ多数有之、右ノ輩企之趣密ニ言上ニ及ヒ、夫ヨリ俄ニ評議ニ相成リ、去ル廿五日ノ夜俄ニ士・足軽等ヘ命シ打手トシ、其人数ハ鎧又ハ着込

等ヲ用ヒサセ、西洋流主張ノ人々御用召申渡候処、右輩ハ右通手当ニ相成居候事ハ露知ラス、常体ニテ登城致候処、家老初メ役々列席ニテ申達ルニハ、容易ナラサル企ニ及候ニ付、罪科被仰付トノ趣相達、即座ニ召捕リ、直ニ城中ノ後堀ニ於テ死刑ニ行ヒ候由、其名左ノ通御座候、

高三百弐拾余石　大目附　井口卯郎(ママ)九郎
高二百石　用人　松元了一郎
高百石　若殿付側取次　豊永泰三郎
高三百弐拾石　給人　東伴之介
御側　同　小一郎
高弐百石　勘定奉行　中村支輔
御側　同　文助
高百石　神宮本次
同　常五郎
高百石　菱刈堅蔵
高百五拾石　給人　今村衛一
高弐百石　物頭　日野佐市
同　人妻
同人男子一人
高百石　近習役　日野貫蔵
高畠清一郎
高百石　物頭　田代甚兵衛

右田代ハ自宅逃出、一里位東西(ママ)ノ方、神宮寺ト申ス所ヘ差越切腹致候由、其途中田町ト申ス所ニ家来居住致候所ヘ参、弥上意ニ候哉承届、右寺ヘ参リ、一間ニ走入リ、数通書付致居候処、右家来馳セ来リ、弥上意ノ旨申シ候処、泰然トシテ讒言御信用無是非ト申シ、切腹致候由、

一日野佐一(市)事ハ、登城延剋ニ及候ニ付、士・足軽等打手ニ遣サレ寝間ヘ押入候処、元来剣術ニ達シタル者ニテ、左右ヨリ切掛候ヲ受ケ止メ、庭ヘ飛ヒ出、上意ナラハ謹テ畏ルト申座居候ヲ、其侭打果候由、右ノ妻ハ当惑シ、盗人人殺ト呼ハリ候ヲ、アヘナク子ト共ニ打果シ候由、其次第聞クニ忍ヒサ(ス)惨酷ノ事ニ御座候、然シテ君公モ後ニハ後悔ノ向ニテ、葬式料ニ米六俵・銭壱貫ツヽ被下候由、

高百石　御側　菊池覺次郎
高百五拾石　右仝　富森吉太郎
高百石　給人　赤坂静衛

高百石　　肴奉行　恒吉良助
高百石　　御側　白坂彦吉
二人扶持　　塩硝方　稲留三郎右衛門

右ノ人数ハ、廿五日夜ヨリ廿六日朝迄ニ召捕入牢ノ処、十月二日出牢帰役相成候由、又田代甚兵衛書置ト、此出牢ノ面々カ申分ト合候由ニテ、出牢帰役相成候由、

一右了一郎、支輔〔ママ〕介ハ君公首実検モ被成候由、

一右ノ輩ト同腹ナル米良小源次・米良造酒外一、外ハ長崎詰ニテ候処、赤坂孫六・志波才助ハ、呼ヒ返シ相成候由、

一右造酒嫡子並山北寛之助・加藤新三郎三人ハ、江戸詰ニ候処、早々呼ヒ下シ相成候由、

一寺田幸平・椴木卯之助二人ハ、熊本ヘ参居候処、呼返シ入牢ノ由、

一右通和流・洋流ノ争ヨリト、表向ニハ申シ候得共、内実ハ君公廃立ノ企ニ候由、実情委シク相分リ不申候、追々相糺御届可申上候、

打手ノ人数左ノ通

高三百石　　内田清一郎
高三百石　　内田隼治
同　慶市

此三人ハ君公連枝家之由

高百五拾石　　那須主計
高三百石　御側　菊池萬之助
高百石　御側　神宮行衛
同　嘉膳
高三百石　用人　田代忠助
高百五拾石　物頭　久保山尉蔵
同　尉之助
高百五拾石　片岡一二
高三百石　御側　菊池溜市
同　良太郎
高百石　阿川貞右衛門
高弐百石　赤坂孫六
高百五拾石　志波才助

右ノ人数ハ那須四方介ト一同荻野流党ノ由ナリ、

一日野佐市ハ家族モ皆殺サレ、老母一人残リタリト云フ、

一此騒動ハ火急ノ事ニテ、村々迄モ大騒キニ相成リ、然シテ此事他領ヘ不洩様ニトノ事ニテ、諸所ノ道口ニ張番所出来、昼夜往来ヲ改メ候、右ニ付旅人ハ切〔一切〕立入ル

コト不相叶候、

一私帰リ掛途中ニテ女ニ行キ逢ヒ、薩摩人ハ参リ居ラスヤ承候処、不存ト申候、

右承得候形行御届申上候、以上、

丑十月九日　　大口郷談合役

木脇次郎右衛門

六九九　五代才助巴理斯ヨリ桂右衛門へ書翰

八月廿二日龍動府を発し、ウェルギー国都府より獨逸列国・孛漏生都府・和蘭諸所相周、去月廿八日佛国都府巴理斯へ参着、無異周旋仕居申候、乍恐御休念被遊被下度奉願上候、偖は当府之形勢は、龍動府へひすれば三分一位も可有御座候得共、一体繁花美麗にして不至なし、海軍は英国に不及と云へとも、陸軍は英亦不及、当時於欧羅巴諸学問の開ケたるは、佛国の右に出るなし、英人と云へとも依学問其極ニ至れば、佛書ニ依て講すると云々、故に佛国は下に人才多く在て、国政を討論する事多く、国政甚不容易、譬佛国は私式之才力を以動し与ふとも、英国は難動、是を以て、英佛之情体を御推覧被遊被下度候、其他一般欧羅巴之形勢国政之大意と云ふものは、富国強兵之順序を相守、詳に出入を計りて事業に及す、国政公平にして、貴賤を不論、高論あれば則是を用ひ、人を挙るに愛憎を以せす、才力を論して各其機を以専任して仕ふ、海軍は海軍局に学ひ、陸軍は陸軍之学講に入る、其他の講学と云へとも、各隨意之学講に学ぶ、亦貧人は貧院を立て養ひ、病院は病人を療治せしむ、捨子は養院に養ひ、馬鹿院・唖子院を立て、適宜至当之職業を教へ、罪人と云へとも無益に籠舎する事なく、其局中に放置て、各得意の職業を以、種々の製作をなさしむるの類、実に不至処なし、欧羅巴諸州に於て尤公平なる仁政は、第一英国、第二ウェルギー国也、其他佛国・獨逸列国・和蘭等は、公平之内ニも国法と云へるありて、英・ウェルギー国の如にあらす、御熟知之通、英国は我朝同様之孤島にして、物産土質ハ我朝に難比候得共、富国強兵共に成て地球上を横行し、英国の右に出るなし、我朝は人質強慢にして地球上之広を不知、国内之動揺に空ク年月を費す、井中之蛙か井口より蒼をあをひて広とするに似たり、今形ニては北に魯西亜あり、西に英佛あり、東に米利堅ありて、終ニ彼之沓を取るに至

るへし、嗚呼其期ニ至り慨歎斃るとも益なし、故に遠久之大患を見通して、速ニ蒙昧を照し、国を開き、富国強兵の尽力なからさるへからす、是迄我朝之形勢を推候処、先便も申上候通各自論を主張して、如何なる高論と云へとも快とせす、異論紛々、更に国政決定するの期限なし、適患国之士不少と云へとも、我朝内部之形勢動揺而已を注目して、井中之蛙論多く、主張する処の議論異にして、　皇国之全力を尽す不能、故に開鎖を不論、公家方・諸大名を始列藩之政務に関係する全権を撰び、或は攘夷家之挙魁と共に、欧羅巴之形勢見せしめ、我彼れの国体政務の得失を目下に決論し、天下列藩志を一にして、国政の大変革を起し、普く緩急之別を立、富国強兵之基本を相守、国政を振起せば、拾余年之功を不待、亜細亜に獨歩すへし、此節遠行人数之内ニも、過半は攘夷の挙魁たる人物有之、地中海へ参る迄は種々強慢之愚論多、見聞も不忍様御座候処、地中海マルタ島港に着、始て欧羅巴之開成強大なるを実験して、忽蒙昧を照し、是迄主張せし愚論を恥、歎慨して不止、刑部様私共ニも、是迄欧羅巴之事情粗観察仕居候得共、斯迄はあるましく相考居候位ニて、遠航以来段々愚存も相変、以御蔭此度格別之講学を仕り、日々諸件を見聞して、只々憤発慷慨而已ニ御座候、勿論欧羅巴は我朝之形勢を以及熟考申候処、未た遊学生等を差出之階級に無御座、如何となれば譬へ学生成功帰朝いたし候ては、上に立官吏蒙昧なれば不行、勿論下より上を仕ふ不能、則当時佛国之形勢同様ニて、下に人才多して、上愚なるか故に、国制は甚以不容易候、国を開に緩急の別著して富国之功不成バ、良法ありと言へとも行ひ難し、故に乍恐　太守公御一番に被遊御踏出、上よりして下を開くの御所置こそ奉専念候、次ニは御国許而已相開ケ候ても、普　皇国に及す不能候付、前件ニも申上候通、公家方は勿論、列藩の諸侯欧羅巴に航して、形勢実験無之内は、御国政御決定之期、断然無御座候付、此議論は是非々々御同意被遊被下、可成速ニ相開候様御尽力奉願上候、右之外申上度儀は筆紙難尽、何れ不遠御目通仕候節、可尽申上候、至誠敬白、

丑十月十三日　　〔五代友厚〕関研蔵拝

〔桂久武〕右衛門様

侍史中へ

追て奉申上候、御国許も追々整財之御手略被召付哉之趣伝承仕り、就中南島ニ於てガラバ江之御談判、香港之鎮台ちと不承知之由、ガラバ商船よりホームへの書状に相見得、於爰許歎息仕る事ニ御座候、欧羅巴之形勢実験仕候処、愈以富国之策略切迫と罷成、段々趣向相付申候処、別て能キ都合ニ相運ひ、此策普く相行候ハヽ、百万両弐百五拾万両之御金繰は、如何様とも御出来相成可申候、此始末は運航中第一之御土産と奉存候得共、大略申上候ては、反て御疑惑ヲ被述候付、帰郷之上と申上残候、尤此外差急申候事件も御座候間、精々差急帰郷之賦御座候間、来二月中ニは拝謁可仕哉奉存候、毎度乍恐乱筆御推覧奉希候、敬白、

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

七〇〇　吉井幸輔ヨリ西郷蓑田ヘ報告

私事去ル二日夜半宇和島(愛媛県)着舟、則御家老松根圖書ヘ面会之儀申遣候処参り候付、此節攝海夷舶来入、且長征一条等、旁以内外御危急ニ付て、伊豫守様御上京奉願度、是迄御一致御尽力之末ニ付、宜被仰上給候様一通申述候処、いつれ御直ニ申上呉候様との事ニて、同六日拝謁、大久保氏(一蔵)より朝廷江建言之次第、且夷舶一条之事共委細ニ言上、是非共御乗出之儀申上候処、猶又篤ト御勘考之上、御返答可被仰出との御事ニて退出いたし、翌七日罷出候様致承知拝謁仕候処、篤ト御熟考被遊候処、如何ニも議論之処ハ同意ニ候得共、唯今致上京候ても如何尽力可致哉頓と目途不相立、尤大樹公御在坂ニ付てハ、一先於大坂及談判、其上上京不致候ては、不都合ニ候、此方も幕府之嫌疑ヲ受ケ居候得は、迚も議論之相立候訳ニ無之、併御国之御策も大概ハ何と欤可相立候間、夫を御承知之上、御同意ニ付ては、共々御尽力可被遊、遙々此方を頼ミに罷下り候段ハ、幾重ニも忝、尤趣意不相立空ク罷帰候処ハ、甚御気ノ毒被思召候段被仰聞候付、成程御尤之御事ニ奉存候、併此節ハ内外之大変皇国之御大事此時ニ限り候御場合ト奉存候、御目途も被為立間敷候得共、ケ様之御大難ニ臨ミ、御傍観ハ如何ニも不被為済御場合ニてハ被為在間敷や、事の成否ハ兎も角も、何卒御出張被下度申上候得共、何れ此後追々変態、又機会も決て有之候ニ相違無之旨、被仰聞候付、無致方退出、八日出立掛松根宅ヘ罷越、佐賀之

關ニて蒸気舟を相待、今一左右可申上候間、夫ニて御決し被下度談判いたし候処、何分御直ニ可相窺呉との返答ニて、拝謁右之段相窺候処、昨日被仰聞候通御変り被遊候御事も無之、容堂・良之介(細川)なとハいかゝと被仰候ニ付、どふそ御出被下度、此御方様より御使者ニても御差立被下度申上候処、御国之御策略承候上、至当之御着眼と存候ハヽ、容堂ニも可申遣との御事ニ付、何れ佐賀之關より欤、又は京師より欤、今一左右可申上旨申上、即日出立佐賀之關江罷渡候賦ニて、出舟仕候得共、風并不宜大ニ時日を延シ候付、又引返シ大洲迄陸行、漸々昨十八日帰京仕候、然処当地も其後も大ニ変態之由、追々飛脚も被差立候由御座候間、御承知相成候半、長征も出来候丈ニ無之、今一応見込相付候様、

朝廷より武辺へ被仰出候由、是も致方なき所より内々願出候半、朝ニ変し夕ニ替り、紛々擾々可笑事ニ御座候、尤四国辺ニて承候得は、迚も此節ハ人数差出間敷、松根なとも申居候、藝州も余程長州を助ケ候者多候由、肥後さへも不容易企と申儀、慥ニ不相分候へは、不繰出所ニ政府ハ治定相成居候由、阿州も君公ト世子と両立、藩中ニも様々之由、土州も役人中は一定之由候得共、下ハ混雑之様子ニて、容堂公ニも御込り之由、長征ハ迚も出来候丈ニ無之、右之通

朝命も相下り候付、尾老公張出シと申場ニ至りそふな事と推察仕居候、永井主水も被用候由、どふ欤向も相替り可申、大久保(一翁旧名)越州ハ弥病気ニて引入候由、

右形行為可申上如此御座候、以上、

十月十九日　　吉井幸輔(友実)

蓑田傳兵衛殿

西郷吉之助殿

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

七〇一　蓑田ヨリ西郷大久保へ書翰

御両所様弥御堅勝被成御奉職珍重御儀奉存候、於爰許御両殿様益御機嫌好被遊御座恐悦御同意奉存候、扨大久保様より追々御問合被仰越承知仕候、則御書面を以、御両殿様達

御聴置申候、其以後之形勢大ニ致変態、何共歎息驚愕之仕合奉存候、長征一条付必死と御尽力之趣致拝承、直様越藩迄御踏越之趣も被仰越、是又一々達

御聴置申候、其後屢変態ニ付ても、御周旋之御事と深

察仕候、野生ニも今般、
中将様御上京御供被仰付、実以難有仕合奉存候、老骨無略之愚夫出京之上は、只義之有之所ニ随ひ、動静相動申度奉存候間、旁御憫察被下、宜御引廻可被下候、折角御手当最中ニ御座候、井上大和も早着、早速拝謁被仰付、委細奉申上候儀ニ御座候、西郷様御健気御早着候半奉祝候、則より彼是御尽力之儀と奉存候、開聞丸及遅着、漸明日出帆之都合相成、嘸御待遠と奉存候、追々其御許之情実被仰上候半と奉存候、帯刀様へ別段御伺不申上候間、宜被仰上可被下候、乍大略御答礼且御伺如此御座候、恐惶敬白、

十月廿日　　蓑田拝

西郷君

大久保君

人々御中

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

七〇二　小倉在勤土岐新兵衛探聞報

肥前佐賀中老伊東外記事、去ル廿四日大坂出帆、今日当所へ致着船候付、直ニ致面会、京摂ノ形勢承得候次第、其外隣国ノ取沙汰ニ左ニ申上候、

長州御征伐ニ付、　大樹公近々御下坂ノ筋御決定ニテ、永井主水正殿御目附御復職、不日ニ藝州御下リノ由、然ニ長州家老上坂之聞得有之、大坂近辺ニテ御行逢之節ハ、御引返シ相成候様、御行逢無之候ハヽ、順々藝州へ御出張ノ筋相聞得居候、取沙汰ノ筋相聞居候取沙汰ノ由、

一一橋公御儀、　大樹公御輔翼、大納言へ御官位為被為蒙仰候由、然処御輔翼丈ハ御請ニテ、御官位ハ御辞退ノ御願被為済候由、其外板倉侯御老中御復職之御模様ニテ、御京着相成居候得共、未タ御請ノ段ハ承知不仕旨、右外記ヨリ承得申候、

一長州家老宍戸備後之介・井原主計今度致上坂候者共ニテ、去ル十七日藝州へ致着、十九日藝藩今中大江所致護衛、上坂ノ向ニ相聞得候折柄、藝藩中村關右衛門・兒玉藤右衛門、去ル十九日国元出船ニテ、廿六日当所へ致着候付、直ニ細ニ承合候処、右宍戸・井原両人共ニ十九日迄ハ不致着由、尤十八日宍戸家来大津四郎右衛門ヲ以テ、近日藝州へ致着トノ趣意ヲ為申趣由、其外昨今藝州ヨリ当所へ着船ノ者共へモ、細々承合候得共、今ニ不致着段承得申候、

一筑前藩中月形洗蔵・伊丹新一郎等、此内士分被召放、牢込被仰付置候処、右両人ハ勿論外ニ拾四人、去ル廿三日死罪ニテ、其外幽閉被仰付置候、加藤司書・尾上総助外ニ拾六人切腹被仰付候向ニ、専致取沙汰候得共、未慥成儀ハ承得不申候、

右通承得申候間、為御見合此段申上候、以上、

小倉滞在
唐物締横目
土岐新兵衛

丑十月晦日

生産方掛
御裁許掛衆

七〇三　内田仲之助兵庫開港不可建言（先鋒願）

此度兵庫表夷船来着ノ趣意柄詳ニ承知不仕候共、過日阿部豊後守様・松前伊豆守様御応接ノ上、開港且十日ノ期限ニ被相究、右ニ付、　大樹家不日ニ　御上洛、右事件奏聞被為在候哉ニ、内々承知仕候、就テハ兵庫表之儀、帝都近ク殊ニ海内ノ要港ニテ、素ヨリ勅許可被為　在御儀トハ不奉存、墨夷初テ襲来後、積年確乎不被為在　御動御儀ハ、兼テ拝承仕候付、乍恐聊苦心仕儀ハ無御座候得共、自然依申立趣ニ、　御動揺　御許容被為在候テハ、

皇国ノ存亡未曽有之御永恥、千載御〔取返〕ノ期有御座間敷、実ニ人心ノ向背ニ相拘、莫大ノ御後難此一挙ト奉存候付、諸侯方急速　御召相成、建言被聞召上、

皇威顕然相立候様有御座度奉存候、左候ハヽ日間モ相掛儀ニ付、強情申張、万一彼ヨリ軽挙ノ振舞モ候ハヽ、速ニ御打払被仰付度、左候ハヽ、弊邸当分人少ニハ御座候得共、修理大夫・大隅守兼テ申付置候趣モ御座候間、御先鋒相務尽死力聊奉報　国恩度御座候間、兼テ被聞召置被下度、此段遮テ奉願候事、

右慶應元丑十月摂海ヘ英船・佛船来着、兵庫開港ノ儀申立候節、於京都御留守居内田仲之助ヨリ朝廷ヘ差出候書附也、

七〇四　摂海ヘ異船渡来云云藩令

慶應元年乙丑九月十五日、摂海ヘ異艦拾壱艘渡来候条、小蝶丸ヨリ十月三日着帆ニ付、右之段相達候処、左之通被仰渡候、

異艦攝海江渡来之旨御達候、不容易
皇国ノ御大事ニ付キ、天気御窺且ツ非常御警衛之為可
被遊
御上京旨被　仰出候条、此旨表方へ致通達、奥掛御勝
手方へモ可相達候、
十月　　帯刀(小松)

七〇五　道島家記抄（鹿兒島ノ情況）

丑十一月二日夕方、両御小姓只今御用ニ付、於御本丸
両御側役六人(島津求馬・山之内作次郎・伊藤彦助・谷川次郎兵衛・囊田伝兵衛・伊集院平治)、其外御家老
衆出席ニテ、余リ鬢カ大キク候付相当ノ鬢形ニナリ、
小鬢モ少シハ立、袴抔モ相当ニ相用、白湯手不相成ト
ノ被(裕カ)仰出候、其外何カ重立タル儀モ為在由候、殊ニ森
岡善助・山口鐵之助・松方助左衛門(正義旧名)逗塞赦ニテ候ヨシ、
何ノ事ニテ右次第候哉、今日迄ハ不相知候由、
十一月三日記ス、今日ハ御下リモ八ツ時分ニテ候、
但二ノ丸今一跡(ママ)相済候様被相達、御家老衆其他、下
会所ニテ被相許候処、是迄ノ事ト替、全ク跡形ナ
キヨリテン(ママ)言ニ為申候由、子細ハ足軽共ヨリ右通
申出候処、被相触候処、当難凌キノ為申上タル事
ナリ抔ト、色々ト噺有之候得共、大(本ノマヽ)イタシ其後
委シク可記候事、

七〇六　拙修蠖睡へ英国ヨリノ書翰

乍不敬文略、我々列去ル二日夜四時分佛地出立、明六
前ロントン之様ニ着、然処又々十三日比より、メンテ(Manchester カ)
エストンと云所江往キ、一七日計之賦ニて参り候筈ニ
御座候、夫より罷帰り、十四五日之滞在ニも候半、直ニ
英地出立帰帆之趣き候賦ニ御座候、是迄折角差急き候
へ共、存之外ニ隙取、何共心外之至候、乍然是も決て不
都合之向きニて、不運共之訳ニては曽て無候、何欤と
不謀御都合向ニて候、ハたと何事も巨細ニ相認メ御同
慶を顕度と山々候へ共、何分懸け隔り紙上ニ尽かたく、
何も帰着ニ相残し置申候、偖川内近々存慮之趣承り、
且貴君江呈札之草稿も時々見セ申候、何事も御心得之
一端ニも候半と存、折角進メ置申候、偖又英国より各
国江密談之趣は、決て慥成出所ニ御座候間、此儀も無
御疑も御聞取可被成置、此地もケ様之儀も存知之者要
路之向而已、夫も多人数も迚ても有間敷候、不遠兵庫
開港も近寄、是が期限欤と存申候、○偖西洋参り何も

差て困入廉も無御座候へ共、唯々通弁計ニ御座候、アジヤより英国迄は、英語ニて十分御座候へ共、ヨーロッパ諸州何れも佛語ニ無之ては、何も相分不申候、実ニ英佛とは能云たるものと、今更現事ニ感心罷在候、夫故先度も相認申候通、よき通弁者御雇之所、当時之大急務と存申候、且又以来諸生遙行存し、能々御評儀所欤、小子初メ年輩之向き、多人数之かた宜と存罷在候処、ケ様ニ乗出シ申候へは、誠ニ案外之事共不少、現事ニ旁見聞ニ及候へは民衆も大き心配、必竟多人数ニて、夫々年輩之向き故申候而已、此儀は実ニ意味有る事ニて、紙上ニは尽かたく御座候、夫よりは要路人は基より、公子初メ御見置之為メ遙航肝要ニ候半、外ニは何も望ミ無之、唯英佛之二ケ国一見ニて宜候、乍然是迄蘭航も相断れ来申候間、是は見置第一申候、此三ケ国ニて何も現実相分り申候、蘭国此節は一見実ニ承候如く、水底の国ニて、都て土手を築き廻し、海水ヲ防き居、引塩ニ成リ海開き候、満汐之時分地面より遙欤ニ海水高く、夫故都て田地之如く水計、先田地之アゼ人路ニ同し、夫故多く堀を通し、川水ヲ流し、其堀決て流る事無之故、クサレ土ヲ取上ケ日ニ乾し、是ヲ以テ炭ニ用候、ケ様成所も有之欤実々驚入候、乍然貿易は誠ニ盛、是計ニて今日之生業も出来申候半、何欤と相認度事も、余り長く罷成申候、先筆ヲ止メ候、二月中ニは拝顔旁可申上候、謹言、

我十一月八日　〔往久武〕　〔新納久脩〕拙修

蠖睡君

〔清成旧名〕吉田巳二写真一枚一寸入御覧候、相揃何れ勉強近々昇進之由、

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

七〇七　英国ノ事情報告（五代才助）

英国万政（ハラミ）全権領事館（ミニストル）パームストント申者、今五十日計前致病死、跡代リ是迄外国事務領事館（ミニストル）ノロスル人名ニ被命シ、以来魯細亜・孛漏生・和蘭・佛蘭西ヘ密使ヲ以テ談判セシ趣ニ、

日本国ハ人質強慢ニシテ、条約ヲ不守道理利相諭候テモ詳解スル不能、今形ニテハ往々和親実益普ク相行レ候期限無之故ニ、速ニ其権ヲ以テ強慢ヲ強シ道理ヲ照シ、国家ヲ開カシムルノ外所置ナシ、英国ニ於テハ、兼テ亜細亜諸州ヘ差出置候数拾艘ノ軍艦相遊居候付、此内ヨリ差向ケ、及一戦兵権ヲ示シテ、随意ノ開港ヲ成ス

ベシ、勿論必勝無疑候付、軍用之雑費ハ追テ日本ヨリ可相請取候間、別段出金ニ不及、国民之総論ヲ不待、領事官中之権ヲ以テ可計、御同意可給哉ト云々、

一魯細亜・孛漏生之返答ニ、日本国ト和親条約ヲ結フト云ヘトモ、未タ商民等相渡リ貿易ヲ成ニ不至、兵権ヲ示シテ蒙昧ヲ照シ、譬ヘ随意ノ開港イタシ候テモ、国家ヲ益スルモ功ナシ、御内談ノ趣御尤ニハ候得共、御内意難致云々、

一和蘭国ノ返詞、三百年来和親旧交ノ国柄ニ付、譬ヘ条約ヲ不守ト云ヘトモ、不得止事内情モアルヘケレハ、兵権ヲ挙ケテ襲フニ不忍ト云、

一佛国ニテハ、魯細亜・孛漏生同様ノ趣ニ返答イタシ哉ノ内、於英国難黙止時機ニモ相成、出艦有之候節ハ、何時モ応対可致ト云々、

右各国ヨリ返答イタシ大略ニテ、其後英政府ニテ如何様ノ所存相懐居候共相分(事脱カ)候、勿論ケ様ノ密談ハ各国政府ニテ互ニ相秘候儀ニテ、容易ニ不相洩事候処、幸ニシテ承得候、尤此以前英国万政全権パームストンハ、天生穏カナル所置ヲ相好候人物ニテ、横濱ヘ相勤候ミニストルアルコック帰英ノ節、右パームストンハ建言イタシ候趣ニ、日本ハ兵権ヲ以テ条理ヲ不示ハ、難開トノ云々申立候処、パームストン信用セス、必竟夫故アルコツクハ支那北京ニ遣候始末ノ由、然ル処ニ此節パームストンノ跡ニ成候ロスルハ、益々アルコックノ説ヲ信用イタシ居候由ニテ、速ニ各国ヘ密談ヲ始候事ト被察申候、且又今更ニ候得共、鹿兒島戦争前、若薩摩ヨリ償金ヲ不相渡節ハ、蒸気船ヲ可奪ト横濱ミニストルヘ命ヲ下候モノモ、右ロスルノ所置スル所也ト云々、

此壱枚ハ草稿ニシテ、念ノ為差上申候、表向石垣様(新納刑部変名)ヨリ御連名ニテ御差贈相成候由、

七〇八　在英国關研蔵書翰

遠行以来今ニ御模様不奉承知候得共、弥以御勇栄御連勤可被成御座、恐悦至極奉存候、次ニ爰元一統無異、初生中ニモ追々勉強昇達相成申候、私共ニモ当月三日、佛国都府巴理斯ヨリ龍動府ヘ引取、無異罷在申候、乍恐御休念被遊可被下候、

一我朝ノ形勢モ一向不相分、穏方ニテ可有之カ、支那新聞紙上ニ、横濱ヨリ各国領事官兵庫開港カノ事件ニ付、

大坂辺迄出掛候哉ノ趣相見得、始末如何ト遠思罷在申候、且又欧羅巴モ格別珍事ハ無御座、別紙急報幸ニシテ承出、石垣様御方ヘ壱枚差出置候得共、草稿尚又差上申候、別紙之通英政府ヨリ各国ヘ致内談、各国同意之姿ニハ無之候得共、英政府ニテ我朝ノ形勢ヲ見抜候上ハ、爾来兵庫開港ハ勿論、何ソノ物議ニ付ケ込、必ス襲来可仕ハ案中御座候間、当分ノ内御所置向御評決被為在度奉存候、御条約各国ノ内、英国ハ頻ニ兵庫ノ開港ヲ懇望イタシ居候様子ニテ、佛国ハ渡来之商民等相少ク、譬ヘ開港イタシ候テモ、夫迄ノ国益ト難申、反テ償金ニテモ、相金ニテモ相請取、開港不致ヲ相好候模様ニ候得共、亜細亜ニテハ英国ヲ押候儀不相成、英国ノ下ニ付、佛国ハ周旋仕候由御座候、当時横濱在留ノ英ミニストルハ、尤モ強情ナル人物、本国ニテハ別紙ノ通相醸、何分ニモ兵庫ノ開港ハ、御開港以来第一ノ御難体ニ御座候、イヤト云ヘハ勿論戦争ニテ、京攝ノ地十日モ難保、又開港相成候ハヽ、天下ノ人心難治、如何ナル知者モ所置スルノ道ナシ、此以前内田仲之助殿ヘ、欧羅巴ヨリ愚札ヲ以テ申上候、天下列藩諸大名ノ公子、又ハ政事ニ関係スル全権、及ヒ三條・中山

如キ暴論家ヲ集テ英艦ニ頼ミ、欧羅巴ノ形勢ヲ見セテ後、兵庫ノ開港ヲ可談トノ云々、市橋公自信義ヲ尽シ、応接相成候ハヽ、十ニ七八迄ハ承引可仕哉、苦心ノ余ノ余計之義迄申上越候、

一幕使柴田日向守（剛中）列上下十人来佛、四ケ月計滞留、使命ノ趣ハ、第一佛政府ニ和親水魚ノ交ヲ乞ヒ、軍艦製造ニ要用ナル諸蒸気機関ヲ求メ、江戸石川島カ、金澤辺ニ軍艦製造局ヲ打立、或ハ佛国ヨリ陸軍士官ヲ相雇ヒ、普ク海陸軍ヲ盛ニシテ、幕府ノ権勢ヲ興復セントノ着眼ノ由、其他遠大之深意有之哉ニ相聞得候得共、深長ニシテ短書ニ難尽、御直ニ申上残候、

一柴田等此御方ヨリ多人数ノ学生来英、且私共諸所周旋、諸製作機関所等ヲ見聞、専整財ノ着眼セシヲ伝承シテ、頻ニ不快ヲ懐キ居候由御座候得共、所置スルニ道ナク、帰朝ノ上如何申開可致哉ノ苦心而已ニテ、薩人ヘ面会ヲ乞ヒ来候半カト、余程恐レ居候由、勿論柴田ハ至極ノ俗物ニテ、種々愚説多ク、幕府モケ様ノ人物ヲ欧羅巴ニ遣スハ、皇国ノ悪命ニシテ、歎息ニ堪ヘ不申候、種々奇説モ御座候得共、是以難尽、御直ニ申上残候、

一柴田等帰朝イタシ候ハヽ、依時機何等ノ用アリテ欧羅

巴へ差出相成候哉ノ趣、幕ヨリ尋問仕候儀モ難計、御答振等ノ儀ハ、疾思召モ可被為在奉存候得共、御見合ノ端ニモト愚存之趣、別紙(法失)ヲ以テ申上越候、始遠行ノ折ハ、可成御名不相知様トノ御趣意ハ、細々承知仕居候得共、余多人数ノ遊学故、誰云フトモナク御有名ニ相成、新聞上抔ニハ至極御名宜、就中佛国ニテハ、中将公(久光公)ヲ古有名ノナポレヲンニ恐多モ奉比、日本国ヲ開ク人ハ、中将公之外ナカル可トノ御名誉ニテ、難有事ニ御座候、就テハ幕ヨリ尋問イタシ候節、左様ナル儀ハ無之抔トノ御答ニテハ則横濱ニ相洩レ、直ニ欧羅巴ノ新聞紙上ニ出、欧羅巴ノ風俗トシテ、恐多モ御名夫レ切ノ御事ニテ、爾来欧羅巴ヘ対、御手相伸不申情合顕実見聞仕候間、別紙ノ趣意宜御取直有之、断然之高論ヲ以テ御答切相成候様奉存候、尚此情合ハ不遠拝謁、御直ニ可申上候、

一御国許ノ儀、御金繰御難渋ノ段ハ、追々伝承仕リ、於爰元モ整財ノ策略、段々尽力苦心仕候処、既ニ弐三ケ条ハ成就仕リ、此度ハ格別ノ御土産有之候賦御座候間、折角御待被遊可被下候、勿論差急候趣意モ有之、折角相仕廻申候間、来月中旬ニハ登皇ノ運ヒ相付可申、左候ハヽ、来春三月中旬ニハ、拝謁万端御直ニ申上尽度奉存候、外ニ申上度儀ハ、山海実以筆紙難尽、先ハ此段奉得意度如此御座候、恐惶謹言敬白、

於龍動府

丑十一月八日認発ス　　關　研蔵拝

蠖睡尊大人(朱)「桂右衛門雅名」

侍史

追テ奉申上候、蓑田氏ヘ書通仕度存申候得共、何分寸閑ヲ得不申、此書御覧済ノ上、御廻シ被遊被下度奉願上候、洋紙・洋筆・洋墨ヲ以テ、乱文ヲ相記、御推覧ノ程奉希候、以上、

七〇九　幕府ヨリ尋問ノ節御答振ノ大略　前紙ノ別紙

国許家来共今般欧羅巴ヘ罷越候始末ハ、近来天下之形勢日ニ致動揺、御国政御決定ニ至リ兼候処ヨリ、追々奉勅命、　大隅守登京数々参　内被　仰付、折柄ハ於内裏　大樹公・市橋(一)公其外諸大名ノ御列席ニ罷出、御国政向御相談之蒙　仰、腹臓不申上モ反テ恐入奉存候付、追々存慮建言仕候儀ニ御座候、然ル処当時御国政向重立候ケ条ハ、開鎖ノ事件ヨリ専夷人御取扱向ノ儀ニ

テ、於　幕府ハ追々欧羅巴ヘ使節ヲモ被差出、和蘭国ニハ多人数之学生御差出相成、時々夷情御見聞被遊候儀ハ勿論、長崎・横濱・箱館等ニテ異人御取扱等ニ付、自夷情被遊御熟知候御儀ニ御座候得共、国許ノ儀ハ是迄御国禁之儀故、家来共随意ニ航海仕候儀不罷成、長崎・横濱等ニテ符逢不仕候ニ付テハ、顕実異情ニ暗キ大隅守、御国政向ノ奉　御相談、存慮申上候節、御取用被下、万々一モ其事件異情ニ難応事ニ罷成、夫ヨリ御国家ノ御大患ヲ醸出候儀共有之候テハ、天下国家ノ御為不容易重大ノ儀、甚以テ恐入奉存候間、是非夷情探索不仕候テ不叶時機罷成、則受　御免許、家来共欧羅巴ヘ差出度存候得共、未開鎖之議論御決定相成兼候折柄、譬ヘ奉願候テモ、実御免難被仰付形勢ニ付、暫黙止罷在候得共、尚及熟考候処、御国政向御相談之蒙仰候儀ハ、前件申上候通、最至大之成ニ付、御国禁之儀ニハ御座候得共、軽重勿論難較不得止事、夷情探索ノ為ニ、家来共欧羅巴ヘ罷越候、第一ケ条ノ趣意ニ御座候、次ニハ軍務筋ノ儀ハ追々以御厳命被　仰出趣モ有之、積年国力ヲ傾ケ調務仕置候得共、一昨年於鹿兒島英夷ト及一戦候処、些七艘ノ軍艦サヘ一艘モ打沈メ得不申儀、遺憾千万ノ至リ、必竟ハ海軍ノ不開ト当時ノ軍整ニ拙故トモ可申、夫ヨリ国中ノ士民激動憤発シテ、講学ノ手略ヲ尽候得共、海軍及利機製造又ハ大小砲調練之儀ハ、専彼ノ長スル処ニシテ、於
我朝研究難致候付、異情探索ハ本意トサシ、寸閑ヲ以テ、彼カ長スル処ニ講学為仕候弐ケ条ニ御座候、第三ニハ、追々海軍ヲ開キ砲台ヲ築キ、大小砲ヲ備ヘ、武備充実セシメ候ニハ、日ニ千金ノ費有之、常例旧式ノ国力ヲ以テ、実充分及シ兼候処ヨリ、欧羅巴諸州ニ於テ整財弁利ノ機械ヲ求メ、或ハ彼カ専好スル処ノ物産ヲ探索シテ国中ニ開キ、普富強兵ノ礎基相立候様ノ趣意ヲモ申含越候第三ケ条ニ御座候、
右三ケ条ノ儀ハ、当時国家興廃ニ相関係焼眉至迫之急務ニシテ、片時モ黙止難罷在、　御国禁ヲ破候儀ハ、重々恐入奉存候得共、御国家ノ御興廃ヲヲモヒ候得ハ、軽重以難比不得止事、家来共欧羅巴ヘ罷越候始末ニ御座間、何卒前文ノ趣意得ト御熟評被下、寛大ノ御所置奉願候外無御座候、乍併御国禁ニ相背候儀ハ、只々奉恐入候ト云々、
右愚存ノ大略申上越候、就テハ当時我朝ノ形勢ニ依テ、

趣意相思候儀ハ、勿論ノ御儀ニ奉存上候付、何卒御熟評ノ上、可然御取直被下、依時宜ハ幕府ヨリ尋問不仕内、断然此御方ヨリ御届切ノ御手段モ可被為在哉奉存候事、

七一〇 江戸邸引払説（道島家記抄）

七一〇ノ一
江戸引取ノ事、猶又梅北宗右衛門殿、十一月九日見廻リテ相尋候処、九月廿四日ニ早相返リ、何事カト申合候処、其晩肥後七左衛門、何レ何々ノ事ナラントイフヲ、壁越ニ承居候間、貞候(本ノマヽ)テハ被相知候得共、早ク返候儀ニハ無相違、左候テ翌廿五日御勝手方ヘ出候処、江戸引払ノ筈ニテ是ハツマラント、何事カト人々首ヲ低レテ、潜ニ嘶居候付、夫ハウソナラン、夫程俄ニ被引取候テハ、出立モ出来不申候ヘハ、イツレモ其事也トノ挨拶ニテ、夫ヨリ互ニ申合、出立日限相究、翌々廿九日ニ出立イタシ、十日京都ニ着イタシ候処、モフヤ異舟モ一昨日方出帆ニテ、十二日為差御用モ無之候間、罷下候様致承知段承候、右ニ付御国許ヨリハ引取ノ下知ハ無之、何方ヨリ被仰渡候儀全ク不相知、イツレ京都ヨリ被申越候半ト相考候処ニテ、不審不相晴模様ニ候、

但三原藤五郎(経礼)殿ニモ、昨晩蒸気舟ヨリ着ニテ、江戸着ハ勿論、京攝ノ間モ別テ静謐、諸大名ハ一人モ在京ハ無之、長州征伐ノ人数ハ、攝伏見ノ間ハ宿一軒モ明キ候処無之由、十一月十日元山新兵衛嘶ナリ、

七一〇ノ二
如何サマ給仕人クツレノ所置モ不行届候哉、桂殿ヘハ一七日計逗塞、關山糺殿ハ大目付ニテ御勘定奉行勤ニ、十一月十六日転役、御裁許掛谷村彦八郎ハ寺社方取次、横目ノ岩元六右衛門ハ勤方被差免候、如何シキ事ニテ候ヤ、

七一〇ノ三
松岡十大夫、大島白砂糖方ニテ差越居候処、十一月初方罷帰候由、ガラバ何分掛念ニ付、大島ヘ差越、着帆ニテ候ハ、殊ノ外大粧ノ仕立ニテ、是ニテハ、中々補ヒ方余程六ケ敷候様ニ、取仕建ニハ不及トノ事ナリト、返ス〳〵モ為申由、其節、狩ヲイタシ呉候様トノ事ニテ、狩イタシ候得共、一ツモ取得無之候ヘトモ、右ノ謝礼トシテ、金七両差出候由、島人トモ一ツモ取得無

之候付、是ニハ不及段辞退イタシ候得共、夫ハ少モ不苦候間、是非請取呉候様無和利申事ニテ、松岡氏モ承届受用イタシ、何分過分ノ金子貰ヒ候付、是非狩イタシ可遣旨申談候処、大宍二疋取得候テガラバヘ遣候処、大ニ歓ヒ西洋布二十五疋呉候由、皆々過分ノ金子被遣候付、其謝礼ニ付テノ事ト申テ差返候処、持合ノ品ニテ少モ不苦候間、是非受取イタシ呉候様、頻リニ申事ニ付、是モ松岡ヘ申出候処、左様ナラハ受用イタシ候テモ不苦旨申事ニテ、受納イタシ候、島中大評判ニテ、今ハガラバ様トテ大ニ喜ヒ入候由、是モ人ヲナツクル術計ナラン、シルヘシ〳〵〳〵、

但

此白砂糖方一件ニ付、最初ガラバヘケ様ノ製法可致候間、何分引受呉候様相談有之候処、返答ニ政府ヘ御届ノ上ノ事候ヤト申事ニテ、左様ノ儀ニテ全ク無之段申候処、当分政府ヨリ方々ヘ聞合方至極厳密ニ手ヲ付居候間、イツレ政府ヘ御届ノ上ニテ無之候テハ、後難到来可致トノ事候間、夫ハ少モ不苦、万一難事到来ノ時ハ、夫限リノ事ナリト返答有之候処、左様ニ御決義ノ事ナレハ、随分御世話可致、我々ハ一日ナリトモ商買イタスカ職分ナリトノ事、或人ヨリ承候、如何ナル事ニテ天狗ノ入ケリ置所候ヤ、強チ大島一島ノ出産ヲ以、七十万石ノ古国ヲ被相発候儀、驚入次第ニ候、余リ珍敷事潜ニ記置也、

七一一　關研蔵英国龍動府ヨリ野村壮七ヘ書翰

關研蔵英国龍動府ヨリ来翰、此關ナル者ハ本藩士五代才介カ変名ナリ、

九月十四日之尊札、十一月十日晩龍動府ヘ相達、愈御壮栄中略　爰元初生中ニモ、追日昇級御同慶ナリ、小生ニモ当月三日、佛国巴理斯ヨリ龍動ヘ引取リ無異ナリ、勿論発足ノ仕廻最中ナリ、両三日中ヨリ英国シュンチユスト申ス処、及ビブレメンクハムト云フ処ニ往来、十日許差越買物スル也、而シテ五六日龍動ヘ滞在シテ、帰朝発足スヘシ、又佛国都府ヘ十日許モ滞留、夫ヨリ飛脚船ヘ乗ルナリ、欧羅巴内ヲ出ルハ、極月廿六日ノ飛脚船定日ナルヘシ、然レハ来春三月中旬比ニハ帰着スヘシ、御待可被下　中略、欧羅巴中モ珍事ナシ、先度モ申上候通リ、幕使柴田日向守列十名、佛国ニ来テ四

ケ月許滞留セリ、使命ハ諸機械ヲ買ヒ、江戸石川島又ハ金澤辺ニ軍艦製造所ヲ立ルト云フ、又佛国政府ト和親ヲ深クセン云々ナリ、此始末深長ナリ、遠カラス拝謁御話可申上候、幕府モ愚ナリ、富国ヲ不知シテ強兵カ可出来モノカ、段々愚論聞クニ忍ヒサルナリ 中略、我朝ノ新聞紙ニ、各国ミニストル攝海ニ兵庫ニ開市場ノ論アリ、定テ今時分ハ応接六ケ敷成立候半、イヤナレハ直ニ兵端ヲ開キ、京坂ノ地十日ノ内ニハ焦土ニ可変、又開港スル時ハ、天下ノ壮士不承知ナルヘシ、実ニ知者モ術ナシ、生カ持論ノ通、大名ナリ公方様ナリ欧羅巴ノ形勢ヲ見テ後、兵庫開港ヲ談ス可キナリ、此度各国ミニストル攝海ヘ行クハ 中略、別紙ヲ以テ彼是ヲ推候処、何分兵庫開港ハ難題ナリ、シカシ戦フテモ開ヒテモ、終ニ開国ノ外ナシ、諸大名大ナルモノハ皆疲弊、国家ノ全力ヲ以テ開国スルコト能ハストハ、実以テ歎慨ノ至、今更急速ノ整財モ六ケ敷 中略、欧羅巴ニ於テ、国家ノ基本タルモノ二アリ、インヂストレード・コンメンシアーレト云フ、インヂストレードハ種々ノ機械ヲ開ヒテ、万物ヲ随意ニ製作シテ、蓄財ノ基トスルコトナリ、又コンメンシアーレトハ貿易ナリ、此二ヲ以テ国力ヲ充タシ、強兵ニ及ホスコトナリ、貿易ハ商民ノ活業トナツテ我朝モ異ナルノミ、当時列藩各信用スレトモ、インヂストレードノ道尤モ開ケス、欧羅巴ヘ参リ種々ノ製作所ヲ見ルニ、其弁ナル、実ニ驚クニ堪ヘタリ、其内我朝ニ尤モ便ナル機械五六種アリ、是ヲ開クトキハ、必ス一ケ年ニシテ本金ヲ可取返、今三四十万ドルノ本代アラハ、是ヲ求メテ帰リタシ、其利要御推察アレ、

極密報

英国万政全権ミニストルハームストントト云ヘルモノハ、今二ケ月跡ニ病死、其跡役是マテ外国掛ミニストル官ロスルト云ヘルニ命セラレタリ、然ルニ則チロシヤ・プロイセン・和蘭・フランス国ヘ、密使ヲ以テ談判ニ及ヒタル趣ハ、左ノ通リ、

一日本ハ人民ノ性質強慢ニシテ、約定ヲ不守、道理ヲ以テ論シテモ難解、故ニ兵権ヲ以テ強慢ヲ治シ、随意ニ開港ヲナシ、然シテ国家開ケ行ク道ヲ可教ト云フ、又英国ニテハ、兼テ亜細亜諸州ヘ差出置候数十艘ノ軍艦遊ヒ居候ニ付、此内ヨリ差向候ハ、別段出金ノコトニモ及ハス、故ニ国民中ノ惣論ヲ乞フニ及ハス、ミニス

トル中之権ヲ以テ可取計御同意ニ候哉、云々、

一右ニ付ロシヤ・プロイセンノ両国返詞ニ、日本ト条約和親ヲナスト雖モ、未タ商民等ヲ差渡貿易スル場ニ不至、故ニ兵権ヲ以テ随意ニ開港ストモ、国家ノ益スル程ノ功ナシ、御内談ノ趣ハ御尤ナカラ、御同意難致候、

一和蘭国ニテハ、三百年来和親旧交ノ日本故、条約不守ト雖モ不得止事ノ内情モアレハ、兵艦ヲ以テ襲フニ不忍トノ趣ナリ、

一佛国ニテハロシヤ・プロイセン同意ニテ、黙止シ難キ時機ニモ相成、御出艦相成ルニ於テハ、何時モ応戦可致トノ趣ナリ、

右通各国ヨリ返答致シタル由ニテ、其後如何様ノ評議ニ相成候哉、更ニ相分リ不申候故、ハームストント云ヘルハ、当時欧羅巴ニテ人物ナリシ由、横濱ヘ相勤メ候ミニストルアルコツクト申モノ帰国ノ節、日本ノ形勢ヲ述ヘテ、兵権ヲ示サスハ、日本ハ開ケ難シトノ趣ヲ以テ、ハームストンニ論シ候処信用セス、夫故アルコックハ支那北京ヘ遣シ候由、ハームストン其跡ニ出候ロスルハ、活発ナル生質ニテ、是迄外国掛領事官相勤候内、横濱等ニ掛引キ致シ、日本ノ内情ハ追々熟知之上、アルコックヲ借用致居候人物ニテ、ハームストン死スルヤ否ヤ、直ニ其跡ニ出候、直ニ各国ヘ談判ヲ始メ候由、勿論ケ様ノ密事ハ、其職掌ノ外ニハ決シテ不相洩事ノ由候処、幸ニシテ承得申候ニ付、一昨日ノ飛脚便ヨリ、御国元要路ヘハ掛合相成候、兄ニモ一緒ニ御洩シ可申上ノ処、繁用不得其儀、遺憾ノ至ナリ、故ニ汾君（汾陽次郎右衛門、当時長崎御附人職ナリ）ヘ御洩シノ後ハ、可談人物ノ外ハ見スヘカラス、小生思フニ、当時各国領事館攝海ニ行キ、本国ニテハ右ノ意アル時ハ、爾来忽然ト兵権ヲ以テ、襲フノ理ナシト雖モ、時変物議ニ乗シ、襲来無疑モノナリ、此国患ノミ苦心シテ策ナシ、恐多クモ我朝ノ形勢彼等ノ見通ニシテ、現実御国許ト長藩ノ確証アリ、不得止事偶然トシテ、天運ニマカセ候外ナカルヘシ、其内御公家様諸大名欧羅巴ニ行キテ、国家ヲ開成スルノ兆ヲ見セルヨリ趨進スル策ナシ、併人望ノ奇策コソアラマホシク存申候、爰元初生中ニモ、追々蒙昧相開ケ愚論ナシ、何レ富国強兵ナラテハ、国家難保ト云ヒ、各富国整財ノ議論多シ、頗ル攘夷家征夷家ト云フ挙魁ナル吉田（清成ヲ云）如キモ、御国許発足ノ折ハ、速ニ海軍ヲ講学シテ、軍艦大砲ヲ求メテ征夷スルノ議論

ナリシカ、英着ノ上ハ、暫クノ内ニ議論一変シテ、富国論トナリ、富国ハ諸器械ノ道不相開シテハ不相成トテ、機械学ヲスルトノ相談開キタリ、可然ト答置キタリ、其他奇説多シ、御直ニ可申上候、兼テ愚論ヲ咄候通リ、欧羅巴ノ形勢ハ未タ初生ヲ出ス急務ト思ハス、先ツ夫々要路ノ人々航海シテ、地球上ノ弘ヲ知リ、夫ニ応スル国政ヲ言上シテ、下ヲ開クノ次第、順序ヲ不踏ハ益ナシ、生等モ此度ハ帰国ノ上ハ、充分ノ建言モ致度中略、今日寸暇ヲ得テ思出シ、乱文ヲ認ム、宜シク御推覧ヲ希フ、勿論倶ニ談スヘカラサル人物ニハ見スヘカラス、緊要ノ件ハ書テモ難尽、反テ疑惑ヲ生スヘケレハ、遅クモ来春三月頃ニハ出崎、積話相尽シ申度楽居申候、此書状相達候時分ハ、早ヤ印度ノ炎沖中ナラン 下略、

於龍動丑十一月十一日相認　關研蔵

野村兄（野村壮七ヲ云フ）

二白、欧羅巴内発足ハ、極月廿六日ナルヘシ、然ラハ四十七八日ニシテ香港ヘ可着、香港ニ五六日ハ滞留致シ、廣東ヲ見ルヘシ、廣東ハ香港ヨリ毎日火輪船往来シテ、半日モカヽルナリ、香港ヨリ福州・上海ヘハ両日ニテ差越候儀モ可有之欤、生等モ整財ノ策相付候内、一ケ条ニ付至極差急キ候ニ付、精々差急ク筈御座候、

七一二　西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛ヘ京坂ノ事情ヲ告ク

御両殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御義奉存候、陳ハ守衛之人数御繰出相成候処、大ニ勢ひを張、進退去就之速なる処、出没不被計との趣大ニ申触らし、恐れをなし候模様ニ御座候、攝海異人之談判と申ものハ、余程奸計為有之由ニ相聞られ申候、表通兵庫開港之義ハ、御差止と申事故、是を絶切ニハ、いつれ三港丈ケハ御免し無之候てハ、迚も不相叶と申訳を以申立、内輪兵庫も異人とハ取究居候由ニ被相窺申候、其上港を開丈ケハ

勅許ニ相成、条約之義不宜廉も有之候ニ付、衆評被聞食候上ニ、御所置可被遊との事ニ候得共、条約迚も取結候趣と相聞れ申候、皆跡事ニ相成次第、言語ニ絶し候訳ニ御座候、一・會・桑之作略も皆崩立、天下之人心も相離れ、無致方処より、頻ニ会人此御邸江出て、

媚ひ候事共不堪笑候、是迄幕府之術、強藩と申せハ直様嫌疑を掛、色々之流言をはなち、内輪混雑を成さしめて、其虚ニ乗し、好言を以解破候手段ニ御座候処、今ヤ手術を失ひ、あきれ果たる様子と被相聞申候、長征之事ニ付ても、頓と策を失ひ、永井主水正等廣嶋迄差遣、詰問ハ不相叶、伏罪致したるとの一言を為謂度との賦ニて、段々媚を求め候様子ニ御座候、一向宗寺之光西寺と欤申坊主ハ、長家江由緒有之寺ニて御座候処、是以橋・會より相頼、伏罪いたしたるとの一言を申て呉候様、相頼候由御座候へ共、坊主不肯由ニ被相聞申候、此夏時分被召捕候長人赤根武人等之者を、永井ハ召列参たる由ニ被相聞申候、是等ハ至極幕中之秘事と被相聞申候、実ニ危然たる向ニて、橋・會・桑困窮之事ニ御座候由、いつれ

大樹公ニハ大坂より逃下り之模様と被相窺申候、橋・會より

関白殿下江、大坂より被罷下候方ニ申上候との説も有之事ニ御座候、大坂ニおひても粮食も乏敷、当年中相支候義も六ケ敷、況ヤ西ニ兵を進め候義、万々無覚束事と被相聞申候、攻口等之義各藩江通達相成候へ共、人数を繰出せと申義ハ無之、手数迄之計ニて、退口之謀と被相察申候、此上戦ヲ初出し候ハヽ、直様紛乱之勢ひ眼前ニ相見得申候、幕府ニおひて攝海異人之談判ニ益不条理を顕し、

朝廷を欺き、人心之憤怒を重ね、長征ニて兵勢之衰を示シ、条理を失ひ、且勢ひを失ひ候てハ、如何之作略を用ひ候ても不被行、如何なる智者ありとも、引起候義ハ無覚束次第ニ御座候間、此時ニ当りてハ理を尽して進ミ、勢ひを詳ニして動へき事と奉存候、当分之処一言発すれハ、名分大義を明ニし、義を以立、確乎として不動、諸藩を圧倒いたし候姿も有之候付、変ニ入ル入らぬ之境肝要之場合ニて、至極謹慎を加へ、評議を尽シ候事共ニ御座候、此旨大略如此御座候、小説紛々ニ御座候得共、取ニ不足事共ニて文略仕申候、頓首、

西郷吉之助

十一月十一日

蓑田傳兵衛様

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

七一三　在廣嶋土持左平太探聞報告

萩様御家老井原主計〔親章〕・宍戸備後介〔璣〕等登坂之賦ニて、先

達て廣島迄出浮、然処右備後之介中途より病気差発、又候延引罷成候一巻有之、先月廿九日附を以御届申上候通ニ御座候処、同廿七日於京都、小笠原壹岐守殿より藝藩中老野村帯刀(景種)御呼出ニて、長藩登坂之儀は、何分御沙汰有之迄之間、差扣候様被仰渡、左候て別紙写之通被仰達趣有之段、当月五日大坂表より飛脚致到着、翌六日藝侯番頭黒田彌五左衛門・寺西盛登、右為御使者萩表江被差越、いまた罷帰不申候得共、御達之旨大膳様御父子様ニも被成御承諾ニて可有之哉、当所逗留備後之介并大津四郎右衛門より申出候由、左候て長藩追々出張、昨日萩様御側用人木梨彦右衛門(恒幹)、一頭奇兵隊廿四人程召列致参着候、且大目附永井主水(尚志)正、御目付戸川伴三郎(安愛)・松野孫八郎(幹)既去六日大坂発足相成、来ル十五日比廣島差入之段被仰触、当所御城下町弐丁目筋ニ御宿割等有之、諸事御手当向等混雑之形ニ相見得申候、右ニ就ては最初之程長藩容易ニ出坂之方ニは、御国論約兼候機会之処、専植田乙次郎説得より弥被差登候筋ニ御評決相成、依之右主計・備後之介等前段之通此表江出掛候場合之処、備後之介病気旁ニ付、一応乙次郎浪華江罷登、彼表滞在右帯刀江猶亦及計議、長国御所置振等内々

幕意奉伺度趣等有之哉ニ伝承仕申候処、大目附衆御差下シ相成、始終致変化、然は幕役御下国ニ付ては深御趣意も御座候欤、且帯刀并乙次郎等より打合致周旋候処より、右時機至り申候哉、其辺之事件同人共帰国不仕候故巨細分兼、将当所政府方之者段々行違ひ罷成、京攝表ニて御廟議旁具ニ相分不申、併不遠乙次郎等下着之筈御座候間、追て彼是之情実分明仕可申哉、勿論幕役御来着之上は、自然御所置之実行相分可申儀と奉存候、一先当時之形行此段早々御届申上候、以上、

但大樹公今以二條江御在城之由御座候処、近々御参内被遊、夫より御関下之御模様風説有之段、去五日当所着大坂飛脚便より問越相成候段承得申候、且先達て攝海江渡来之外夷艦始抹旁之儀は、当国より遠路懸隔、其後夷情之程更ニ相分不申候得共、方今京攝表先平穏之形ニ取沙汰御座候、将又長国ニおひても、暴徒御鎮撫行届き、当時諸隊之折合宜敷形ニて、過激之異論等何そ承得候儀無御座候、此儀も御見合之端ニ不取敢申上候、以上、

藝州

廣島滞在
土持佐平太（綱幸）

丑十一月十一日

奥掛

書役衆

（島津忠承氏所蔵本にて校訂）

七一四　田沼攝海へ来ル云云　西郷ヨリ黒田へ書翰

田沼玄蕃頭（意尊、若年寄）蒸艦ヨリ攝海江乗廻候由、事柄不相分候得共、兵庫開港之義、欺謀ヲ以異人ト約条イタシ候故、関東ニ於テ、大ニ物議沸騰之様子ニ被相聞候付、其等之事欤、又ハ迎船共ニテハ無之候哉、何等之事欤、御探索被成下度奉合掌候、

大樹公上洛トカノ説ハ、御当地ニテモ流言イタシ候得共、是ハ虚唱ト被相察申候、此段奉得御意候、頓首、

十一月十四日

西郷吉之助

黒田嘉右衛門様

七一五　仝上（十一月七日）

御安康奉賀候、陳ハ明日ヨリ大坂江被差越事情、探索方可被成御内定相成居、明朝表通可被仰付候間、其含ニテ御仕廻置被下度、細事ハ明日可申上候付、為御心得奉得御意候、頓首、

十一月七日

西郷吉之助

黒田嘉右衛門様

七一六　黒田嘉右衛門ヨリ西郷吉之助へ書翰

（福岡内訌ヲ報ス）

御問合之趣拝承仕候、田沼玄蕃頭一昨日蒸艦ヨリ着坂相成候得共、事柄未タ全不相分、追テ探得次第可申上候、又大樹公上洛之儀、於爰許モ巷説喧敷相唱候得共、是以突留候正説ハ、未承得不申候、征長人数ハ、別紙之通追々出立、来月十日限藝州廿日市迄押掛ル筈ト欤申シ、騒居申候処、永井主水正・戸川鉾三郎ニハ、去ル六日爰許出立ニテ、明十六日廣島着之賦、余程遅寛之宿割ト申事ニ候、藝州藩士モ申居候、永井発足之砌、赤根武人・淵上幾太郎・峯軍之介三人出牢為致、藝州へ引越候由、左候テ此節ハ、諸向ト申談シニテハ無之、折角丁寧説得之趣意相含、差越候様永井へ密達有之候由、然時ハ内ニハ無事寛典ヲ好ミ候ニ相違無之、右通人数

繰出シ、騒敷ク表向ニ見セ掛ケ候ハ、例之婦女子ヲ畏ス虚唱ト相見得、却テ笑ヲ取候仕形ニ御座候、偖又筑前之形勢近来言語同断、大音兵部益暴威ヲ振ヒ、櫛橋内膳トカ申者ヲ、先達テ差登セ、今度幽閉セシメ候者共之所置ヲ窺ヒ、密ニ幕府之内命ヲ得テ、黒田播磨・矢野相摸両人ハ永牢、加藤圖書・吉田主馬・建部武彦・近藤登・中村釧・月形洗蔵以下六十余人割腹斬首、野村助作ヨリ承候、尤モ右人々ノ母・妻子マテモ遠流、其他有志ノ輩ハ不残候由、先日平戸藩士、上坂掛ケ宰府ヘ立寄リ聞取来候、彼藩態々之談ニ承得候、誠ニ慨嘆ニ不堪次第ニ御座候、別紙閣老ヨリ夷人ヘ被相渡候書付、既ニ御覧ニ相成タルカトモ奉存候得共、手ニ入候侭写取差上申候、尚此後追々承得次第可申上候、以上、

丑十一月十五日

大坂ヨリ

黒田嘉右衛門

西郷吉之助殿

七一七　琉球国領主トモムプラント契約

千八百六十五年第十月十五日、琉球国之領主トコント・デ・モンフラン契約セシケ条之内トシテ、項々ケ条マ、立段ヤト、

琉球国領主之官吏ハ、コント・テ・モンフランニ若干ノ蚕卵ヲ送ルヘシ、コント・デ・モンフラン一石運送之入費ヲ払ヒ、引受人ニ寄托シテ、於欧羅巴買揃也、亦利益之半高ハ諸雑用トシテ、半高ヲ以テフリンス之命ニ随ヒ、諸件之要務ヲ成スベシ、

千八百六十六年第十月三日

巴理府ニ於テ契書弐通ヲ相認取替置候也、

日本慶應元年乙丑十一月十九日

石垣鋭之助

關研蔵

七一八　薩隅日三州兼琉球国太守家臣石垣鋭之助等白山ト条約

於比義国都府西暦千八百六拾五年第十月十五日、我国君ノ家臣石垣鋭之助、蒸気船ノ指揮役關研蔵、ェトワルトテンレル及アルブルレラ両士之目前ニ於テ、国家開成之為拾弐ケ条ヲ契約イタシ、其千八百六十六年第二月三日佛国巴理斯府ニオヒテ、再同人等増補変革之

約条ヲ成候通、断然ト我国君之名号ヲ以、今般都テ無相違取行候条、当年九十月比我国開帆、比義国其他ヘ和親条約取結ノ為使節可差遣候、就テハ兼テ内条約イタシ置候商社営立之儀、最早条約盟鑑相成事ニ相心得、機会不失様早々諸機関ハ、別紙之通致誂、又夫々出銀給儀ハ、則ヨリ御用意可給候、依之家老中連判之証書如例、

薩隅日三州兼琉球国

慶應　年　月　日　　太守家全権

西暦千八百六十六年第五月何日

コント・デ・モンフラン殿

七一九　在廣島土持佐平太防長事情探問報告

大膳様御父子御伏罪之儀、御疑惑之廉々有之、右為御糺大目附等廣島表江被差向候段、藝州侯江御沙汰之趣、去十一日附を以御届申上候通御座候処、同十六日弥来着、且先達て攝海渡来仕候外夷艦之情実、其外段々京攝表風説等承合候、当時之形行為御見合左条ニ申上候、

一大目附永井主水正（尚志）、御目附戸川伴三郎（鉄）・松野孫八郎外ニ、御徒目付両人・御小人四人付添、当十六日申刻廣島江到着罷成、然ニ右主水正一人は乗馬ニて従卒三拾三人、伴三郎弐拾九人、孫八郎拾六人程召連、尤両人は乗輿ニて、供方之者都て陣笠・小袴着服致し、勿論為持筒等聊之事ニて、行粧廻至て手軽之形ニ相見得申候、将当分此表萩様御重役宍戸備後之介・大津四郎右衛門・松原音蔵（貼紙一）・廣澤東右衛門等致滞留、左候て井原主計ニも、先達て当国江出浮申候処、一旦岩國迄曳取、其後大膳様江御伺之一条有之由ニて、山口表江立帰り、夫成今以相見得不申、就ては右代り外ニ被差越筋ニも御座候哉、又々同人罷出可申哉、両端御評議之次第相分不申候、然処此度大目附等被差下段、安藝守様江閣老より被仰達候趣を以、為御使者番頭黒田彌五左衛門・寺西盛登当月六日山口表江被差遣候処、同十四日罷帰、猶亦承合候処、御末家并諸隊御呼出之御旨、大膳様被成御承諾、乍然御大藩中御末家之面々御領所遠方懸隔、且諸隊等段々行違ひ之者も有之、一統山口表江御呼寄、御達之趣も被為在候付、迅速運兼、乍然来ル廿九日限ニは、当表江被差遣ニても候哉、御復命之由、依之去十八日大目附より藝藩御用召ニて御内命之趣ニは、長藩御糺問之儀、一度哉二度では迚も相済間敷御事柄ニ付、一先只今出張之宍戸一人（貼紙二）ニても被召出、両日中御

糺試被成候御模様之段御沙汰有之由、猶追々諸隊等不遠到着次第御詰問之上、自然治乱興廃相分可申儀と奉存候間、追て臨機之形行御届可申上候、

〔貼紙一〕
本文大津は御使者勤、松原・広沢両士は周旋方ニて出浮諸事致都合、芸藩等始終取会談判筋等有之由、然ニ長藩惣督宍戸ニて、都合八拾人程当分滞留ニ御座候、木梨彦右衛門ニは曳取申候、

〔貼紙二〕
本文宍戸備後之介江両日中御糺問有之御模様之段伝承仕候処、今廿日午刻時分より大目附永井、御目附戸川・松野、國泰寺江右備後之介一人御呼出、御糺方御座候由、尤寺中人払ニて御小人・御徒目付等警衛ニて、藝藩等も附越不相成、就ては迚も右糺問之廉々、即今容易ニは相分申間敷候得共、可成探索仕、追々内分相洩可申候段、右乙次郎より唯今承得申候間、今日之形行以張紙此段申上候、

一右ニ付長国御所置振ニ付、御内々　幕意奉伺度所存ニて、植田乙次郎事、先月廿四日急ニて出坂仕候処、其節最早幕役御差下之御論相決、御内命之趣ニは、長藩浪華表江御呼出之段、被仰達候得共、攝海江先達て夷艦等渡来候一巻、旁御混雑中ニ付、御吟味之御訳被為在候付、大小艦御差向相成候段御口達之由、然ニ乙次郎より何そ周旋之路も不相叶、其侭彼表曳取、当十二日致下着、左候て当所出張、幕役方江同人折節致伺候候得共、長国御所置振之儀は一切仄ニも御洩無之由、

一当分廣島表江は　幕長之人数大小入込相成候迄ニて、右外他藩より出勢無之、然共近々関東之御人数、紀州侯并井伊・榊原侯等出勢之段、先触見得来候由、尤人数等相分不申候得共、紀州侯人数は、当御城下より北ニあたり、四里程相隔可部と申村中寺々町家等江参集之賦と相見得、右外宿陣等之場所もいまた相分不申由、

一大小艦等御糺問之場所は、当御城下西寺町國泰寺ニおひて、御評定之賦ニて、町内左右江新番所造営ニ相成、勿論長藩共当分右末寺之内ニ滞宿仕申候、

一長防昨年来国境諸所江炮台築拵等充分行届、尤当分諸隊都て山口陣屋江致屯集、併当時ニ至りてハ、先ツ過激之暴論令主張候輩、稍御鎮撫之姿ニ御座候得共、今度御糺問之上、御所置振ニ依ては不得止事、東軍江致敵対度国論ヲ要し、然ニ御譜代之臣子ニおひては、是非平穏之路〔ロカ〕希居候得共、脱藩人・奇兵隊共、是迄之功労も氷解と存し、勝敗も不顧致闘争度真意と相見得申候、依之大膳様は勿論、吉川等実ニ御痛心被遊候由、取沙汰ニ御座候、

一先達て
大樹公被遊　御参内、去三日浪華江御入城之由御座候処、其節一橋様ニも、御供ニて御退京之御賦ニ候折柄、不図
此御方様御人数弐千人余被御差登、就ては右御真意之程分兼、　幕役等より彼是御嫌疑之廉有之、夫故一橋侯御残御在京之趣風説有之、如何之御模様候哉之旨、内分私江打合可然段、若年寄辻（雑賀、芸州藩士）将曹より國枝與助を以申承候儀有之、尤其節迄は附足軽竪山武右衛門ニも参着不仕内之事ニて、勿論右辺之御訳柄不奉存候得共、夫成難黙止則答仕候趣、御国元之左右相絶、更ニ何も不相分取約難申述候、併兼て非常御警衛之御為、已前より聊之御人数御差登相成候へ共、今度攝海江夷艦渡来紛擾之形勢、長征処ニは無之云々、当国江致布流候事件、御国許江も彼表より疾相響キ候処より、為御念重て御人数被差登候哉、且又
天気御窺旁之御為
太守様　御上京被仰出候哉ニ、於当所取沙汰之通、自然無御延引被遊　御上京候ニ付ては、何れ御多勢御召連ニも相成候故、御供方御人数之内、御先ニ御差登被成候事共ニ可有御座哉、両件顕然之事ニて、曽て御疑念之訳有之間敷候、将蒸艦より弐千人出京と申も、浮説と相聞れ、迚も千人ニも不至候哉と致推量候、然ニ多人数罷登、御疑心着眼之程何分承度申試候処、其趣意柄は不相分候へ共、幕府而已ならす不審抱キ候国柄等も有之様子之段、彼表より極内申越相成候間、御互ニ無隔心、何事ニ不寄御心得之端ニも相成候事実は、御内通可致、藝侯一藩当時之国論ニ応し、不取敢早々相洩し可然、右将曹より内々承知之上罷越候段申承、御懇情之程不浅旨、挨拶等仕置候、尤此末之処も宜敷頼入置申候、
一先達て攝海江渡来候夷艦之始末等、当国より彼表之情実分兼申候得共、仄ニ伝承仕候ニは、
御国様并萩様江致密商候廉を以、兵庫開港之儀共願立候由奉恐縮候、就ては乍不及是迄、夷情旁段々探索仕候折柄、本筑前様御内、当分脱藩川上左太郎と申者、当七月廣島ニおひて致面会、色々雑話承合候処、横濱滞舶夷人之一説ニ、先年来攘夷之御論被発たるは、乍恐
御国様并萩様と奉存居候処、此内御両国ニおひて及炮

戦、其後遂御談判申候処、殊之外信義之御国柄と心得、然ニ彼等横濱諸港江通商相開候てより最早年月相経、夫迄之間関東方之政府約条筋ニ付、始終虚言取繕、大小表裏之意不少候処より、畢竟夷人を始、各藩之人心折合不宜哉と、方々近比幕府見放し候趣、横濱港ニて浮浪士共致布告候由申承、併何ぞ確証無之事ニて、信用仕難く候様御座候得共、将当閏五月於馬關和蘭コンシュル并セネール両官、長藩江応接書別紙之通、長国真義至誠之国と申答、然共即座之巧言ニ申たる欤ニも難計候得共、右太田某一説之通長州之処は稍致符合、且亦当九月兵庫江外夷艦碇船等致し候時分、藝国蒸艦江戸下りニて致汐繋候場合、英人五六人端船より漕来、右船は吾国ニて見覚有之、致見物度申参、尤英国より廣島江御買求之船ニて、申出通乗船為致候処、藝藩江差向、段々及雑談ニ候件、帰国之上船頭共より当所役々江申出相成候趣ニ、長門太守暴動之所為有之、去冬軍勢御差向相成候処、伏罪之証拠顕れ一旦御解兵有之候処、再ひ伐長之論を起し、

将軍末家等之諸勢引卒し、浪華江御在城、屢軍議整へ方々旌旗進んと欲ると聞伝候、其外九州之諸藩追々出勢し、小倉江は　幕役致出張、就中小笠原家共今度は大キニ致主張候由、藝藩ニも長征之役ニ当候欤、且廣島江東軍何万騎程参集候哉と及尋問、藝藩相答候ニは、我々関東より唯今帰帆掛之船ニて、国許之様子更ニ不相分段致弁解候処、如何様左も可有之と応諾いたし候儀共御座候由、成程禽獣ニ等キ卑劣之醜夷ニは候得共、各国之形勢等具ニ致観察候形ニ相見得申候、然は先達て於攝海　閣老衆と夷人共と御談判之条目ニ、恐多も此御方様并長州様御国名等出し候次第覆勘仕候処、前条信義之御国と相唱候、発口齟齬仕候気味も有之、何分夷情之程量得難く奉存候、尤前段外夷評論旁謀実之処は相分不申候得共、若又御見合之端ニも罷成可申哉奉存候間、於馬關夷人江長藩より問条書写壱通相添、此段申上候、

但

小笠原壹岐守殿并板倉伊賀守殿より、藝州侯江被相渡候御書附之写壱通相添差上申候、

右通御座候、以上、

藝州

廣島滞在

丑
十一月廿日　　土持左平太

奥掛
書役衆　　〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

〔別紙一〕
写

一丑閏五月廿四日和蘭コンシュル官・セネール官両人と、於馬關応接之条件英人士官之者同席先達て於神奈川港　幕使柴田日向守より尋ニ付、貴国より長州之事申立之筋有之、右応接之書宇和島侯より弊国江伝達ニ相成令一覧候処、書中之実意甚以不得其意候件々有之、御尋問致度候、

問

一弊国より欧羅巴諸州江使節差立候段、応接有之儀は、何等之証拠を以申立候趣、於此方は更ニ覚無之、外国江使節差立候儀は、第一朝廷之命無之、弊藩自己之了簡を以取行候訳無之候処、如何之儀ニ候趣承度候、

答

一去年馬關戦争後、長州より止戦和議之挨拶として、横濱滞在外国全権まて使節被差立候節、　幕府より尋ニ預り、申答之儀は、其節長州より外国江使者差立可申之処、於和蘭其使節引受可申哉之趣、否尋申候就、決て曳受申間敷段申答候、

問

一横濱江両人差越、外国公使江及密談候段申立有之由、如何之儀候哉、近来横濱江差越候覚無之候事、

答

一両人横濱江参候儀は、去年戦争後止戦之為挨拶ニ罷越候節之事ニて、其節長人江応接ニ及候段申答候、

問

一貴国軍艦馬關通行之節、日本政府之為ならす筋及応接候段申立有之由、此方ニおひて日本之不為と相成候事相謀候覚毛頭無之、甚以不得其意候、弊国ニては和蘭より之媚言と存候事、

答

一右様之儀決て和蘭より不申立候、昨年止戦後は於和蘭毛頭対長州仇怨無之、真実至正之国と相心得候段毎々老中等江及応接候得共、元来　幕長之間不和生し居候事ニて、右様之儀を以て戦争を起し、和蘭も　幕府同様ニ長州江不和ニて、　幕府之援兵を出し申抔風説可

有之候得共、右様之儀は一切虚説ニて、御信用被下間敷候事、

問

一昨年尾州老公下向、其節三大夫処厳科、右問罪関係之儀は、一旦始末相済居候処、此度重て将軍自ら兵を帥ひ来、吾国を討之論何共其意難解、然ニ世間之評ニは、右全く和蘭応接之趣ニて、再討之論相起候事と風聞有之、於此方全貴国之虚言より相起候事と相心得候事、

答

一此度重て討長之論相起候儀は、外国舶馬關港滞泊之事ニ付、小倉より縷々幕府江申立候事より相起、右申立之書面共、老中より請取写取置候就、可入貴覧候得共、唯今船中所持致候否詳ニ不相弁候事、

問

一左様候得ば貴様より承知之次第を以、小倉表江詰問致し候ても不苦候哉、

答

一拙者より申立候段被仰越不苦候事、和蘭ニおひて対長州、昨年止戦後は毛頭関係無之処、斯御疑念ニ候ば猶委細説弁可致候間、明朝軍艦江御越可被成候、追々老中并外国奉行江及応接候次第、且小倉より差出候書類船中所持ニ候得ば、逐一可入貴覧候事、

以上

〔別紙二〕

写

一筆令啓達候、毛利大膳父子伏罪之儀、御疑念之廉々有之候付、右為御糺大目附永井主水正・御目付戸川鉾三郎・松野孫八郎藝州表江被差遣、大膳末家并家老之内、且奇兵諸隊之者同所江呼出、御糺之上時機ニ寄惣御人数被差向候間、藝州口一之先心得を以、十二月十日限人数差出、其方ニは国許相守、臨機之取計可被致候、尤御軍目附松野八郎兵衛被差遣候間、其段可被相心得候、松平近江守儀も其方附勤被仰付候間、可得其意候、且又攻口御割込、別紙之通相達候間、是亦可得其意候、此段可相達候、依　上意如斯候、恐惶謹言、

十一月　　小笠原壹岐守　名乗判
　　板倉伊賀守

右同

松平安藝守様

以上

本文

御攻口等之儀は、昨年冬被仰出候通之由御座候間、別段写取差上不申候、以上、

（島津忠承氏所蔵本にて補正）

七二〇　於横濱木村道之助古屋作右衛門ヨリ直話承候次第（寅正月三日廻ル）

一先達テ外国ヘ御使節トシテ被差出、柴田日向守殿彼地ニテ御評判不宜、御帰リモ難相調、横濱在留之夷人共唱ヘ候由、傍薩州ヨリ異国ヘ渡候人ハ、乗舟之砌横濱ニテ拾万トル（三万弗ナリシトニ）計借入、其余夷船小使ニハ金ヲ廻シ、余計ニ財ヲ出候段、何国ニテモ客十分ニ跋扈ト、相矯ニ相聞候事、（新納刑部・岩下方平等ノ一行）

右等ニ付、横濱在留之異人共ヘ、道ヨリ無御取締、諸藩私ニ夷国ヘ渡リ候テハ、御為メナラサル由、申立候由也、

一此度条約之儀、御許容被為在候処、不服之者有之、如何様之所業相働候程モ難計ニ付、妄ニ外国人往来等不致、用心致スベキ旨御触達相成リ、夷人共ヨリ右不服ト申者、何人ニ候哉問合候処、浮浪之者ニアラス、薩士ニテモ無之、反逆之徒ナルヨシ被仰聞候也、

一薩州ヲ夷人トモ厳信服ノ体ニ有之、先達テ上国ニ於テ、彼御藩ヨリ御先手可仕旨、建白致候事申聞候トハイヘトモ信用不致、追々ハ横濱ヨリ鹿兒島ヘ異艦相廻程ニ聞モ有之、其主意聢ト不相分候得共、此節之　幕府ヘ難明程之密議モ可有之ト、木村道之助抔ハ相察シ候趣、先達テヨリ英夷三十人計御雇入ニ相成、砂糖之製法ヲ伝ヘ候様ニ申唱候得共、内実ハ海陸軍ノ調練等伝習イタシ候趣、終ニハ独立候勢有之様、夷人共ニモ見込候由ニ御座候事　（真否交々中ニハ稍事実ニ近キモアリ、後条ニ参照スヘシ）

一木村道之助此度小笠原侯ヨリ御召ニ相成、既ニ出立致候処、英ノミニストルノ留主居ユウステント申者ヨリ、道之助ヲ被召候ハ何ノ御用ニ候哉、横濱幸行迄聞合候処、如何成御用向欤不相心得旨、答ニ相成候得ハ、左候ハヽ今日江戸表ヘ罷出、御老中様ヘ御直ニ相伺可申、右道之助ハミニストルヨリ拝借致シ候人ニテ、ミニストル留主之中ヘ御出ニ相成候テハ、留守居職不相立候

ト申出候ヨシ、急便ヲ以追掛大磯ヨリ引返シ、以後何等之御沙汰モ無之、其侭ニ相成候由、

右道之助儀、先達テ夷艦攝海ヘ相廻候節、英ヨリ願出同船致シ、罷越候者ニテ、尓来ミニストルヘ和言ヲ伝居候者也、京師ヘ罷越候時ハ、兵庫以来之取扱向モ詳ニ相分、御都合宜筈之所、右之者罷出候テハ、御掛之御役人御不都合ニ可有之、尤同人之見込ニ、薩州夷人ト入説イタシ申候様申唱候、

一先月廿八日ヨリ、水野候横濱ニ御立越、当月朔日比御帰府ニ相成候、其節之御応接ニテ、兵庫開港之儀ハ、御取消シニ相成候様承リ候処、英夷ニ於テハ、都テ右之応接有之候義、相并ヒ不申、此度俄ニ開候義ハ、御行ニ相成候得共、兼テ御条約ニ相成候期限ニ到リ候得共、開候積之由、尚為(脱字カ)於兵庫、屹度誓(マヽ)モニ致来候、以後夫等之御談判モ無之趣、尤先達テ以来度々応接有之候ハ、仏人而已ニテ、後国ヨリハ如何様申出候欤難計候得共、英之ミニストルハ、当月四日限上海ヨリ家族ヲ召連、横濱ヘ帰港致シ、其節留主ニテ一度モ御応接ハ無之、以後迚モ同様之趣ニ御座候由、

右ミニストル兵庫ヨリ上海ヘ廻候節、下之關ヘ碇泊致候長州之家老ニ出会、

朝廷ヨリモ御許容ニ相成候、然ルニ先年妄ニ発砲致候ハ、如何成儀ニ候哉不審ニ候処、於其儀ハ何共申開無之、後悔致候段相答候也、

一此度佛蘭西ヘ百文銭六十万貫御渡シニ相成候、既ニ江戸ヨリ横濱ヘ御廻シニ相成候事(地金用ナリト云)

右文銭ハ外国ニテモ稀成銅ニ候由、上海辺ニテモ一貫文一両余ノ直段ト申候由ノ処、如何成御評議振乎、矢張一文之相場ニテ、御払ニ相成候由、諸事夷人ニハ欺レ候迚、横濱ニテモ専ラ誹評致シ居候事(該説事実ナリ)

一酒井飛驒守様、当月十二日比ヨリ横濱ヘ御立越、

大樹公永々御滞坂莫大之御入費ニ付、長州戦争之償金第三度目、当年中御渡之筈之処、右之御都合故、右何卒年延ニ致呉候様御談判ニ相成候得共、当年中兵庫ヲ御開ニ不相成候故、難差延旨申出候由、彼地調役丹彼(波カ)金三郎ト申人之説ニ、此度兵庫御開ニ相成候得ハ、償金モ御除ニ相成候筈、期限通リ御開ニ不相成候得ハ、償金ヲ払尽シ候時分御開之都合ニ至リ、御無益之事故、何卒急ニ兵庫ヲ御開ニ相成、可然様申唱候由、総テ横濱詰之者共ハ、右様之説ヲ立、此迄之条約ハ都テ御許

容ニ相成候様、相心得候義ニ御座候、

一日本ニ於テ夷人旅館・商館毎ニ、其国々之徴ヲ立候得共、外国ニテハ絶テ無之事之由、且横濱ヘハ英・仏人共軍卒ヲ出シ置候、是亦余国ニハ無之事、尤近世浮浪之徒沸騰致シ候ニ付、　公辺ニテモ種々御取締ニ相成候得共、万一御手ニ余リ候程モ難計ニ付、相応之人数ヲ以警固致シ候様、閣老方ヨリ御頼ニ相成候由、依テ右軍卒之仕置或ハ遊興之道抔御開ニ相成候テ、莫大之御入費ハ、悉ク公辺ヨリ御仕払ニ相成候由、此節モ騎兵隊馬乗場トテ、沼ヲ埋メ居申候ノミニテモ、四万両程之御費ト申事也、

丑十一月廿一日

七二一　道島家記抄御封書写

七二一ノ一

一筆令啓達候、毛利大膳大夫父子伏罪ノ儀、御疑惑ノ廉ニ有之候付、右為御糺大目付永井主水正・御目付戸川鉾三郎・松野孫八郎藝州廣島表ヘ被遣、大膳末家并家老共ノ内、且奇兵諸隊中ノ者ヲ同所ヘ呼出、聞糺ノ上模様ニ寄、惣人数被差向候間、下ノ關口一之者ノ心得ヲ以十二月十日限小倉表ヘ致出張、差図相待可被申候、尤将軍目付安藤治右衛門被差遣候間、其段可被相心得候、細川越中守・小笠原左京大夫・小笠原近江守・小笠原幸松丸儀モ、其方同様被仰出候間、可被得其意候、此段可相達旨、依上意如此候、頓首、

十一月七日　　小笠原壹岐守
　　板倉伊賀守

立花飛驒守殿

右ノ通丑十一月廿六日御上京事ニテ、潜ニ相写候、

七二一ノ二

伊地知壮之丞ニモ出崎ノ筈ノ由、是ハガラハヘ借金延ノ由、彼方ヨリ決算可致旨申出候由、凡四十万両位ノ借銀ニテ候由（汽船及大小砲代等）

七二一ノ三

砂糖三千挺位、北国辺（専新潟）ヘ被遣候由、送状ハ御留守居ノ宛ニテ態ト落下ノ由、是モ奸計ノ所置、大坂銀主カ聞付候ハヽ、信義難相立六ケ敷候半、

但未右ノ舟不罷帰候由、

七二三　小倉在勤土岐新兵衛報告

当時京攝并長防之形勢承得候形行左ニ申上候、

大樹公此度長防御所置ニ付、大小監察藝州江御出張之上、御模様次第播州姫路迄御進発之由、

一先月五日二條之御城ニて被為在 御内話候は、去ル二日之夜阿部・松前之両人窃ニ御前江罷出、今夜半是非共御乗船 御東帰有之候様、左様無御座候ては、迚も御尊命は被為在間敷、私共両人御同船ニて御供可仕段、頻ニ申立候付、可被遊 御陸行旨被 仰候処、橋・會二侯伏見ニて御拒可申上は差見得申候間、其節は歩兵講武所ニて防戦之内、 御通抜 御東帰被遊候様申上、万一京地江被為入候ハヽ、尚亦 御尊命御危誠ニ歎ケ敷奉存候趣も申上、余程 御掛念被 思召候処、伏見ニて橋・會二侯拝謁、懇ニ被仰上候趣有之、大ニ 御安心被遊候由、然ニ尚亦京地ニて御所向之御事、橋・會・桑御周旋筋御了解、豊後・伊豆ニ甘々と被誑、口惜事と、頻ニ御歎息ニて、 御内話被為在候由、尤御参内は 御差扣之由候処、被為蒙御寵命、先月廿七日

御参内ニて、当月四日 御下坂被為在候由、且今般長州表御所置之上、尚又大坂江御滞城ニて、各国御大名方御会議相成候向ニも取沙汰有之由、

一今度藝州江御出張之大小監察、被召列候御人数多分ニて、長州之激徒尚更激成ル勢ニ可相成も難計、御吟味筋も為有之由候得共、全体永井侯御順熟之御方故、其辺は篤と御心得ニて、軽挙決て有之間敷と之御評議も為有之由、尤本久留米藩脱走淵之上幾太郎事、当三月町人体ニて、松屋長兵衛と名元を偽、外ニ長州奇兵隊弐人、都合三人列立、大坂表江出浮候処、被召捕候者之由、然ニ此節三人ともニ永井侯藝州江被召連候取沙汰も有之候得共、慥ニは分り兼申候、

一肥後・柳川之両国、来月十日限小倉表江出勢被仰渡候処、肥後之儀は今度御再征ニ付、御旗本御先鋒御願立ニて、御領分鶴崎江御出勢之筋、御手当相成居候由、然ニ先達て亦々昨年通、小倉江御出勢可有之被仰渡候処、御願立之趣有之、御願通鶴崎江御出勢之筋被仰付候段、昨日隈本より申参候由、肥藩より慥ニ承得申候、

一長防之動静ニ付ては、此節御詰問之上不行届之儀は、幾重ニも伏罪致、昨年通御寛大之御所置不相成候ハヽ、無是非防戦之決定致居候由取沙汰有之、国境津々浦々防禦之用意甚敷向ニ相聞得申候、然ニ大坂よりは、当月十四日五日騎兵一隊・歩兵隊二隊・大砲一座、井伊

〔直安、与板藩主〕兵部少輔様・榊原〔政敬、高田藩主〕式部大輔様御繰出相成、去ル廿三日藝州御着之御日割ニて、追々模様次第ニは御繰出、十二月中旬比ニも相成模様次第、尚又各藩出勢被仰渡候向ニ相聞得申候、

右通承得此段申上候、已上、

小倉滞在
唐物締横目
土岐新兵衛

丑十一月晦日

生産方掛
御裁許掛衆

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕